

# SGRA REPORT

SGRAレポート No. 68

## NO. 68

ISSN 1346-0382

第7回 SGRAチャイナ・フォーラム in 北京

# ボランティア・志願者論

中文版

第七届SGRA中国论坛

Volunteer・志願者論

ENGLISH EDITION

The 7<sup>th</sup> China Forum

“Volunteering・Volunteers”



Sekiguchi Global Research Association

関口グローバル研究会

日本語版

第7回 SGRAチャイナ・フォーラム

ボランティア・志願者論

■ フォーラムの趣旨

SGRA チャイナ・フォーラムは、日本の民間人による公益活動を紹介するフォーラムを、北京をはじめとする中国各地の大学等で毎年開催しています。7回目の今回は公益財団法人日本YMCA 同盟の宮崎幸雄氏を迎え、長年の体験に基づいたボランティア活動の意義について講演いただいた。

日中通訳付き。

## SGRAとは

SGRA は、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRA は、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRA の基本的な目標です。詳細はホームページ（[www.aisf.or.jp/sgra/](http://www.aisf.or.jp/sgra/)）をご覧ください。

## SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からの SGRA 会員のエッセイを、毎週水曜日に電子メールで配信しています。SGRA かわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。  
<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

## ボランティア・志願者論

日時	2013年5月22日（水）午後4時～6時
会場	北京外語大学日本学研究センター多目的ホール
主催	（公財）渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）
後援	国際交流基金北京日本文化センター

### ボランティア・志願者論

4

宮崎幸雄（日本YMCA同盟名誉主事）

#### ■ 講演要旨

- 1) 私のボランティア原体験 <ベトナム戦争とボランティア>  
①自分で手を挙げて（挫折からの逃走） ②こちらのNeeds（体育）とあちらのInterests（養豚） ③信頼なくして“いのち”なし（地雷原の村） ④解放農民の学校（自立・自助） ⑤プロ・ボランティアとして国際社会へ
- 2) ボランティア元年といわれて—神戸・淡路大震災によって広まるボランティア（観）
- 3) ボランティア活動の社会的効果（地域への愛着・仲間・達成感・充実感・希望）
- 4) 大災害被災地のボランティア活動と援助漬け被災者  
中国人が見た東日本大震災救援活動と日本人が見た四川大震災救援活動
- 5) 3・11若者の自意識と価値観の変化  
国際社会の支援と同情・共感・一体感と死生観・共生観と人と人との絆

### パネルディスカッション Panel Discussion

23

閉会挨拶 今西淳子 28

あとがき 宋 剛 北京外国語大学日本語学部専任講師 29

講師略歴 89

# ボランティア・志願者論

## 宮崎幸雄

日本YMCA同盟名誉主事

皆さん、こんにちは。

このフォーラムは昨年9月に予定されていましたが、反日デモで中止しました。しかし、今回は予定通りここに来て、皆さんとお話できることを大変嬉しく思います。

最初に、今回のテーマである「志願者」の言葉の定義について考えてみましょう。

英語ではボランティア（Volunteer）、その語源はラテン語のボランタール（自由意思）からきているといわれています。

日本語の辞書の『広辞苑』では「志願者（義勇兵の意）、奉仕者、自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」とあります。

日本政府の生涯学習の指針では、「ボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発（自由意思）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発・発展）性にあるとする考え方が一般的である」と説明しています。（1992年7月29日・生涯学習審議会答申）

また、世界ボランティア宣言では「ボランティアとは、個人が自発的に決意・選択するものであり、人間の持っている潜在的能力や日常生活の質を高め、人間相互の連帯感を高める活動である」と定義しています。（1990年、ボランティア活動推進国際協議会総会）

このように「ボランティアの定義」には共通した哲学・理念がありますが、「ボランティア活動」になりますとその背景である文化、宗教、民族、政治、社会・経済状況などが異なることによって活動の実態は多岐、多様に及ぶことはいうまでもありません。

今日は、2008年の中国・北京オリンピックと四川省の大地震、日本の1995年の阪神・淡路の大地震、そして2011年の東日本の大地震・津波災害のときに大活躍をしたボランティア活動を中心に考えてみましょう。両国のマスメディアはこれを「ボランティア元年」の到来と呼びました。

## ■ 私のボランティア原体験

私の国際ボランティアの原体験は、1969～1976年のベトナム難民救済活動から始まります。

### ベトナム戦時下のボランティア活動

私は大学時代から YMCA（キリスト教青年会）という国際的な青少年団体に所属して活動をしてきました。ベトナム戦争が終息すると思われた1969年、戦後復興事業のひとつである、戦場から帰村する青年の社会復帰と農村の発展を支援するワーカーとしてベトナム・サイゴン（現在のホーチミン市）へ派遣されました。戦時中の米軍の平定戦略でつくられた南ベトナム・タイニン省ライチュウ村（5000人の難民の村）に着任しました。

着任するとまず、現金収入を得て“自立できるプロジェクトは何か”を調査しました。その結果、「タピオカ作物と養豚」が村民の経験と村の環境を活かした“手っ取り早い金儲け”であることが判明しました。早速、豚の飼育の勉強をしました。サイゴン郊外の村を回り、どのようにして豚を育てるのかを学ぶことから始めました。安い飼料の入手と配合、病気予防、豚舎の改良、出荷時期、輸送方法などの基礎的データを集めて「養豚事業プロジェクト」を村長とベトナム人ワーカーを説得して始めました。近隣の村を回って、豚が一番高値で売れるのは村の祭りの日であることが分かりました。その日に向けて豚を100kgにして出荷するテーブルプランはできたのですが、お祭りの1週間前になっても、なかなか豚は100kgになりません。食べさせている餌がバナナの幹、タピオカの茎、魚のアラですから、なかなか太りません。そこで、どうしたら後1週間で100kgになるか、みんなで知恵を出し合いました。「飼料に泥を混ぜて食べさせて運動禁止」これをすればすぐに100kgになるというので、やろうということになりました。今そんなことをすれば大変なことになりますけど……。

このようにして、一番豚の価格が高い日に良い値段で売るために、養豚チームは、村の祭りの日を目指して「GO! GO! 100豚」キャンペーンを始めました。

次に、豚舎と豚を運搬する三輪車を管理する協同組合をつくりました。協同組合といえば恰好いいですが、世界 YMCA 難民復興資金を使って種豚3頭と中古のシクロ3台を購入して、利益が出たらみんなで配分するという約束で、プロジェクトがスタートしました。

立派な“モデル豚舎”と“シクロ運送屋”ができました。これを機会に村人の村への忠誠心と仲間意識を高めようと、昔から村にあった村民互助の金融制度のベトナム式頼母子（講）を始めました。始めるまで時間はかかりましたが、サイゴン陥落までの8年間続いたベトナム YMCA の“看板プロジェクト”となりました。

### 村人たちのニーズ

「村人たちのニーズを探し、ニーズに応える」これはボランティア活動の原則です。しかし、現実にはニーズを把握することは至難の業です。また、「今！ これが必要です」と言われて、それが本当のニーズなのか、そして誰が必要としている

るのかを見極めるのは容易なことではありません。

上述の難民の自立を支援する「養豚プロジェクト」を振り返ってみましょう。

経験と知識⇒養豚プロジェクト⇒国際援助⇒収益⇒村民の自立⇒共同体意識⇒生活の向上⇒収益の分配⇒という過程で、プロジェクトは進行しました。しかし、養豚プロジェクトが本当に村民のニーズであったのか、また、国際援助金は適切に使われたか。当初の数年間、プロジェクトは順調に進み、種豚の数も約100頭、収支バランスもとれ、村民の参加意識の変化も見られました。しかし、最後に利益を得たのは一握りの人、そしてプロジェクトは南ベトナム解放後3年で霧散消滅したのです。十数年を経過して、残っていたのは小さな“寺小屋小学校”だけでした。

自立と持続発展を困難にした最大の要因としては、西暦40年の建国より続いた戦争→独立→外国支配→解放の歴史と、近代史では、1964年8月の米軍の北爆に始まったベトナム戦争にあると思います。破壊と死と憎しみしか残さなかった戦争からやっと束の間の平和を勝ち取ったベトナム難民にとって、「自由と独立」の国づくりは至難の業です。特に、ベトナム戦争中、国連／国際機関の人道支援、経済援助は生きるために不可欠でしたが、長引く戦争で援助される生活に慣らされた人にとって、戦争の傷を背負って自立するということは本当に難しいことだということを肌で体験しました。

ベトナム戦争が終わって17年後の1992年、ライチュウ村を訪ねることができました。村の人民委員会で身分を明かすと、「や～日本の隊長さん！知っとるよ！」と若い村長さんが出てきて村を案内してくれました。YMCA“看板プロジェクト”のモデル豚舎は村の役人の住居に、共同井戸は村長の個人所有に、シクロ運送屋は元軍人の個人財産に、協同組合は内部抗争で崩壊……残っていたのは、難民の1人の女性教師が、外部の財政的援助を受けずに数人の子どもを集めて始めた“寺小屋小学校”だけでした。

頭をガ～ン！と叩かれたようなショックを受けて、「私のボランティアのルーツを訪ねる旅」は終わりました。

## ■ 自然災害救援とボランティア活動

最初に「ボランティア元年」といわれた1995年1月の阪神・淡路大震災と、2011年3月の東日本大震災、そして2008年5月の四川大地震でのボランティア活動を比較してみましょう（図1）。

地震の規模（マグネチュード：以下MCと記す）は阪神・淡路が7.3MC、東日本が9.0MC、そして四川が8.0MCでした。死者の数、倒壊した家屋、行方不明者の数字はできるだけアップデート（2013年5月末日）な数字で示しています。そして東日本大震災ではまだ3240人が行方不明です。ボランティア活動の参加人数は、阪神・淡路と四川はそれぞれ3カ月、東日本は6カ月単位で標記しています。四川省のデータは民間NPOの調査を参考にしました。阪神・淡路のときには3カ月間で117万人が参加しました。東日本の大地震・津波のときには、73万8500人です。そして、四川省のときには130万人がボランティア活動に参加しています。



図1 災害救援活動とボランティア活動

災害救援活動とボランティア活動			
	阪神・淡路	東日本	四川
発 生	1995年1月17日	2011年3月11日	2008年5月12日
マグニチュード	7.3	9.0	8.0
死 者	6,434人	16,131人	69,000人
行方不明者	3人	3,240人	18,000人以上
倒壊家屋	249,000棟	275,258棟 386,739人	216,000棟以上
被災者	不明		約4,614,000人
避難者	不明	340,000人	約1,514,000人
ボランティア活動	1,170,000人 3カ月	738,500人 6カ月	約1,300,000人 3カ月

### 阪神・淡路大震災ボランティアの意識調査（図2 & 図3）

阪神・淡路のボランティア活動に参加した人たちの意識調査をしました。この調査は、1995年2月から8月までの期間に、神戸大学と神戸商科大学（現在は兵庫県立大学）、関西学院短期大学、日本YMCA 同盟が共同で行った調査です。

1004人のボランティアに聞き取り調査をした結果ですが、ボランティア経験が全くなかった人が40%、今までにボランティアの経験があった人は60%でした。そのうち男性が40%、女性が60%です。また参加者の属性を見ますと、学生が一番多くて44%、会社員が自分の休みを取ってボランティア活動に参加したのが20%です。次に多かったのは主婦でした。

そして活動の内容は、がれき（瓦礫）除去、レクリエーション活動、支援物資の配布、被災者個別訪問、避難所訪問と心のケアなどが活動の主なものです。

#### 事例Ⅰ 阪神・淡路震災 意識調査1 1995年



図2 意識調査1

#### 事例Ⅱ 阪神・淡路震災 意識調査2 1995年



図3 意識調査2



### なぜボランティア活動に参加したのか（動機）

参加動機について見ていきますと、自分が所属している団体、働いている会社、あるいは友人・知人に勧められてというものが一番多かったです。次に、誰かのために役に立ちたいという強い気持ちがあって自分は参加した。そして、それによって報酬・お金をもらおうと思わず、代償を求めないで参加することによって自分が変わるだろうという、自己の成長に役立つからということでした。

では、何を期待して、参加するのでしょうか。職業・業務と関係のない、普段していない仕事をしたいというのが、会社勤めの人の中で一番多かったです。いつもオフィスで仕事をしている人たちが、とにかく何かお役に立ちたいと最初に選択した仕事は、3K=汚い (kitanai)、臭い (kusai)、危険 (kiken) の仕事でした。汚い、臭い、危険な兵庫県西宮市の被災現場に行ったのです。いつ釘で足を突くかもしれない、あるいはまだ壊れている屋根が落ちてくるかもしれない危険な現場に作業に行き、現状を自分の目で確かめたいという気持ちがありました。

2番目は、被災者とふれあいたい、ふれあうことによって自分自身を見直す機会にしたいということです。3番目は自分探しです。特に自分たちの生き方ははっきりしない若者たちが、この機会に被災者と一緒に汗を流し、ボランティアの仲間と一緒に寝泊まりをしたい、その中で、自分の生き方、自分はこれからどういう生き方をすればいいのかを考えたいというものでした。

### ボランティアで何を得たか（満足度）

実際に参加して、どういうことに満足したか。感動の体験をしたことはやはり素晴らしかったと思います。それから充実感です。平均3泊4日、短い人で2泊3日、その間は非常に充実していたということです。調査の結果によりますと、参加した人の94%が大変満足をしたと答えています。それと同時に、参加者同士は強い連帯感を持ちました。

さらに、「与えるものよりも、頂くものが多かった」ということです。何かをしようと出ていったのですが、参加してみたら、いろいろなことを自分が教えられた。何かしてあげようというよりも、自分が得たものの方が大きかったという満足感があります。

それから、人のために汗をかいて喜ばれたということ、これは大切なことです。「本当に心から苦しいときに助けてもらって」と、被災者の方が率直に伝えた喜びの声を聞くということ、それが満足度につながりました。

そして、最後に生きる力では、若者たち、学生たちが、もっと自分がしっかりしなければいけない、自分たちが、自分の足で、もっと自立しなければいけないと感じたという満足感がありました。

ただ、災害時に駆けつけるボランティアを称賛する一方、それに対する批判もありました。会社勤めをしている人がなぜ会社を休んで被災地に行くのか、学生たちは大学に行って勉強しなければいけないのに、被災地でボランティアばかりしているという批判もありました。しかし、そういう中で、自分たちの生き方、

生きる力を見つけたということは、やはり素晴らしいことだと私は思います。

日本はご存じのように少子化が進んで、市場経済が大きく変化しました。日本のバブル経済が崩壊し変化する中で、物とお金があれば人は幸せになれるという考えから、若者たちの中に、物とお金第一主義では駄目なのだ、何か新しい生き方を、という気持ちが広がっていきました。そして、幸せとは何かと考えたときに、家族と友だち、地域の連帯、家族との絆という言葉が出てきました。これが大切なのです。言い換えれば、幸福とは何かということを、若者たちはこの体験を通して、自分たちで探しはじめました。ブータン王国の「グロス・ナショナル・ハピネス（GNH）」という、幸福とは何かという生き方を、日本の若者もボランティア活動を通して気づいたのです。

### ワークキャンプでの評価

阪神・淡路大震災ワークキャンプにおけるボランティアの評価は、

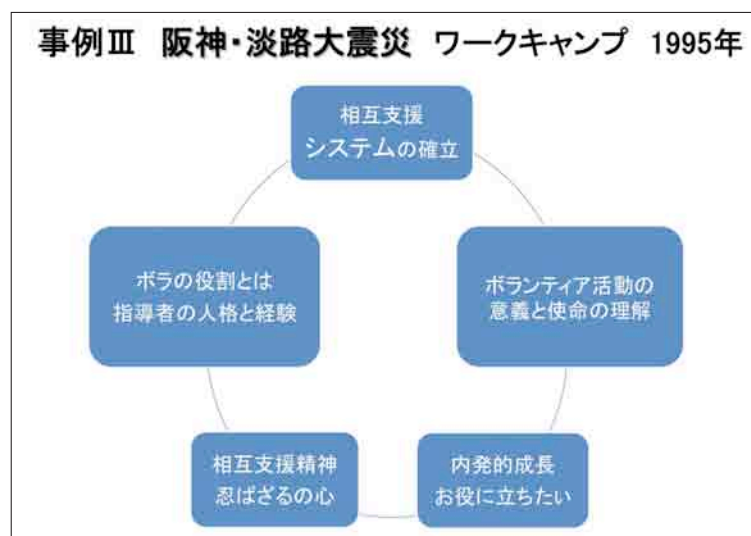
- 1 被災地域の住民との交流は男性 76%、女性 80%が満足。
- 2 「指示待ち」「自己中」の私が、自己の見直し、人の痛みを共感でき、自己の成長を謙虚に評価できた。
- 3 ボランティアの意義・使命を分かりやすく説明する必要がある。
- 4 ボランティアの仕事について説明が不十分。
- 5 指導者の人格、資質、経験の豊かさによってボランティアの評価が異なる。
- 6 参加者がお互いに奉仕の大切さと感謝の気持ちを分かち合えた。
- 7 「何かしなければ」という“忍ばざるの心”が参加の強い動機となった。
- 8 相互支援の精神の芽生えを育てる、相互支援のシステムを確立して社会開発にリンクさせる。

というものでした。

他のボランティア団体、全社協、大学学生支援室、復興支援ポータルサイト、NPO 経験・信頼ネットなどの調査でも同じような評価をしています。

では、ワークキャンプについて図4にまとめましたので、見てください。

図4 ワークキャンプ



## ボランティアの意義と使命

最初に「ボランティア活動の意義と使命の理解」について見てみましょう。「自分は何のためにボランティア活動をしているのか」という問いがありますが、ボランティア団体が「みんなのために」といって奉仕活動をしている意味と、その団体の持っているミッション、つまり目的・使命は何なのかが十分説明されていませんでした。ネガティブな意味ではありません。先ほどの意識調査の中で、良い経験をした、生きる力ができたというけれども、その反面、調査から判明したことは、ボランティア活動を何のためにするのか、その意味は何なのか、その団体はどのような使命を持っているのかという説明が十分ではなかった、ということです。

## ボランティアの基礎知識と基本的条件

それから、実際に「困っている人を助けてきなさい」と言われても、ボランティアはどのようにして助けていいのか分からない、どうすればいいのかを教えてもらっていませんでした。例えば東日本大震災では、あの津波で家の中に泥が入って、津波が家のものを全部持っていきました。泥の中の棒切れを見つけて、ボランティアがそれをごみと思って捨てようとしたら、その家の人が、「待ってください。その小さな棒切れは、うちのおじいさんが毎日うどんを作るときに、一生懸命それで伸ばしてくれた棒なのです」と言ったのです。ごみといわれる中に、その人たちの一つひとつの思い出と生活があるのです。

メディアは三陸に集まったがれき（瓦礫）を何十年分のごみだと書きます。今もがれきと呼んでいます。被災した人たちにとっては、あれはがれきではないのです。自分たちにとって大切な宝物なのです。死んだお母さん、津波に呑み込まれた子どもたちの魂が、あの家の中に、あの泥の中に埋まっているのだと言います。そのことを知らずに行って、泥かきと称して泥を全部捨ててしまった。ボランティアたちは自分はいい仕事をしたと思っても、じつは被害を受けた人たちは本当に悲しい思いをしているのです。

しかし、東北の人たちは過去の歴史の中で、いつもそういうことに耐え忍ぶことを教えられてきました。あまりそういうことを口にしません。実際にそういう人たちに会って話を聞くと、「あのときに助けにきてくれたボランティアさんが、あの大事な写真をごみと一緒に捨ててしまったのが今でも残念です」と言います。被災地に行く度にそういう話を聞きます。

## ボランティア精神・リーダーシップ・組織と仕組み・ボランティア法

もうひとつ大事なことは、現場で指揮・調整をするファシリテーターの役割です。通常ディレクターまたはリーダーと呼んでいます。このファシリテーターの人格や資質が非常に大きな影響をボランティアに与えます。後になってボランティアによる活動の評価をしたときに、現場で、「今日はここの作業に行きます。3人はあそこの家に行ってください。5人は、あそこで泥が出たのを泥の捨て場まで車で運んでください」という指揮を執るディレクター（ファシリテーター）のリーダーシップに大きく影響を受けていることが明らかになりました。

参加者がお互いに奉仕の大切さを知り、感謝の気持ちを持つことができたこと

も素晴らしいと思います。何かしなければならないという「忍ばざるの心」です。去年から今年にかけて、100人の中国人に「ボランティアとは何ですか」と質問した中で、多くの人は、「儒教の精神の中に、困っている人を見たときに助けなければいけない、忍ばざるの心というものがあります。私たちは、そういう中国の文化を身につけています」という答えが返ってきました。日本の若者たちも、そういう気持ちを内に秘めています。

復興期に入り活動を継続して続けるために、被災者もボランティアもお互いに協力して助け合うというシステムをつくらなければなりません。他者のために奉仕する気持ちだけでは不十分なので、これを実行し、持続、維持できる仕組みづくりが必要です。また、活動に必要な財源の確保、そのための募金活動も不可欠です。そして組織をつくり、活動・事業を推進し、担い手を育成するための法律と制度をつくる必要があります。日本では、2008年12月に新しい公益法人制度が施行され、NPO法人・認定NPO法人、そしてこれらを補完する税制度の改革も行われました。国民が自分の意思で、社会のため、人のために奉仕するために100年以上続いた民法の一部を改正したのです。中国には、2005年と2007年につくられた2つのボランティア法があります。その法律が良いかどうかは別の問題ですが、そういうものが需要だという認識も明らかになってきました。

## ■ 日本のボランティア元年

### NPO法の制定で「市民社会」は変わるのか

1990年代は日本では失われた10年といわれていますが、その時代に阪神・淡路大震災とオウム真理教による地下鉄サリン事件が起きました。テロ対策と大規模災害対策が日本で急速に浮上してきたのがこの時代です。

阪神・淡路大震災直後の救援活動は、警察や消防、自衛隊によって直ちに始められました。同時に、自発的に組織された地域の自治会や企業、大学、青年会議所（JC）など、地域の非営利組織（NPO）が参加して救助活動が始まりました。その活動が市民の間に広がり、その数も日増しに増え、ボランティア活動が人々の注目を引いたのです。特に参加した人たちの意識は高く、行政だけに任せるのではなく、自分たちの手で、自力で立ち上がる人々を支援しようと手弁当で集まり、救援活動に参加しました。

自発的にボランティアに参加した個人や団体が、相互協力のネットワークをつくりました。一般に、非営利組織というものは、なかなか協力し合わないのです。みんな自己主張が強く、ボランティアは自分のお金でしているのだから、よそのことなど構ってられないという人が結構多いです。しかし、それでは駄目で、同じ目的を持ち、同じ方向を向いている人たちと一緒に協力し合いながらやりましょうという気持ちが、阪神・淡路大震災のときに市民の中に芽生えてきました。

交通機関と道路の復旧が進むにつれてボランティアの数は増してきました。「何かお役に立ちたい」とバイクで駆けつけた若者のグループ、近畿圏各地から駆けつける善意の助っ人たち。かつての「志願兵」とは違う「普通の市民の姿」

を見たマスメディアが、「ボランティア元年の到来」と呼んだのです。日本におけるボランティア活動といわれるものは、記録に残っているだけでも400年前の江戸時代からありました。農民や町人が総出で橋を架けたり、護岸工事の“労働奉仕”をして村づくり、町起こしをしたのです。しかし、マスメディアが阪神・淡路大震災のボランティア活動を見て、これを「日本のボランティア元年」と命名したのは何故でしょうか？

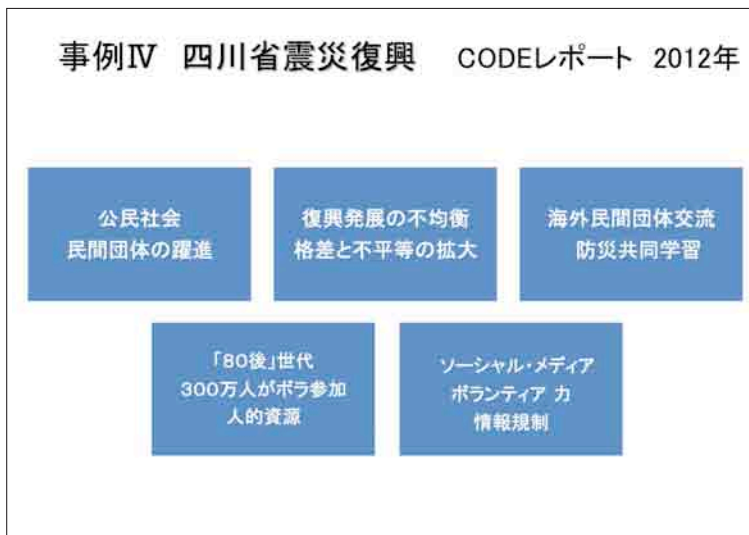
そして3年後の1998年に、特定非営利活動促進法（NPO法）という法律ができました。法律である程度、非営利団体の組織と活動を担保し、制度や枠組みをつくり、国民がボランタリーに参加することを促して、より質の高い「市民社会」を創ることを目指したのです。それがNPO法で、まだそれほど遠い昔の話ではありません。

## ■ 中国における公民社会元年

私もボランティアをしたことがあるCODE（神戸・NPOの海外災害救助市民センターの略。震災直後から現地市民団体と協力して復興事業を支援している民間団体）という災害救援のNPOが神戸にあります。2008年5月12日に中国の四川省で大地震が起きたとき、CODEは災害の復興状況を調査するスタッフを派遣しました。図5はその活動内容と評価で、信頼できる日本の民間の団体の報告書（2012年）です。

CODEは、2008年の地震の後、今回（2013年4月20日）の震災まで、現地視察と現地パートナーからの情報を収集しています。また現地の民間団体と一緒に四川省で活動を通して得た情報をホームページに載せて公開しています。しかし、現時点（2013年5月）では民間の団体、特に外国のメディアの取材は許されていません。先日、NHKが初めて四川省の復興のニュースを15分ほど放映しました。日本のメディアが今回の四川省における地震の復興状況を詳しく伝えたのはこれが初めてだと思います。

図5 CODEレポート





## 民間団体、ボランティアの爆発的増加

CODE の報告書によりますと、2008 年の四川大地震のときには、携帯電話で情報を得て、中国全土からボランティアが被災地に駆けつけました。これは皆さんよくご存じだと思います。最初の 1 年間で 300 万～500 万人、そして、現場のボランティアを支援する後方支援も入れると 1 千万人です。2008 年の四川大地震では 1 千万人のボランティアが参加しましたが、その多くが「80 後（パーリンホウ）」という 1980 年代に生まれた人たちです。

参加したパーリンホウの属性を見ますと、政府、共産党青年団、企業派遣のボランティアが 40% でした。それ以外に個人でボランティアをしたいと携帯電話で集まった人が 60% です。ロジスティックの後方支援をした人も含めると、四川のボランティアをしたいという人が 60% あったと調査にあります。

ご参考までに、2008 年 8 月に北京で開催されたオリンピックに動員された全国 600 カ所にある青年ボランティア協会のボランティアは 50 万人、2009 年の建国 60 周年記念活動に約 100 万人、さらにオリンピック後の 2010 年の上海万国博覧会のボランティアは、募集 700 人に対して 7000 人が応募したとのことでした。このように、ボランティア活動に対する市民の関心と参加は、災害救援だけでなく、年毎に増え、日常の市民生活の中に根付いていきます。そして結社の自由が十分保障されていないといわれる中国で、ボランティア活動は「公民社会化」に向けて大きな風を送り込んでいると思います。これらを見てメディアは「中国における公民社会元年の到来」と名づけました。ちなみに、私は、北京オリンピックの前年の 2007 年に、北京・精華大学で開かれたボランティアリング・ウィークというフォーラムで、日本のボランティア活動について報告をしました。会議の後、学生たちと夜遅くまで議論をしたのを思い出します。当時と比較して、最近の中国におけるボランティア活動は隔世の感があります。

## 政府主導による民間下請け型復興プロジェクト

このように、中国では、2008 年の四川大地震と北京オリンピックをはじめとして、豪雨による水害や、国家的行事に民間団体のボランティアの参加が爆発的に増加しました。これを人々は「公民社会元年」と呼びました。しかし、四川大地震の復興事業の実態はどうだったのでしょうか。民間団体の多くのボランティアが参加したといわれますが、復興事業は中央政府の主導による「対口支援」方式が主力で、過去の実績に倣って、沿岸部の裕福な省や市が GDP の 1% の援助金を拠出して被害の大きい 18 の被災地（都市）を支援しました。もちろん、インフラ整備や建物、道路、通信などの大工事は専門業者、ゼネコンが工事を請け負いますが、地震発生時の緊急救援や復旧作業は、青年志願者協会、ボランティア協会、学生（大学）、労働者による地元のグループ・団体が組織されました。そして社会工作協会や慈善団体、基金会などいっせいに支援活動を開始しました。さらに、民間救助サービスセンターや NGO 備災センターなどのネットワーク組織が民間の手で立ち上げられ、これが徐々に広がって機能的に活動をしたのです。

しかし、復興期に入り時間が経つにつれて支援団体間のネットワーク、情報交換、交流の機会も少なくなり、4 年後の神戸大学学生支援室の現地調査によります

と、多くのボランティアグループや民間団体が解散して、その後も持続的に復興と発展を支援している民間の団体はわずか数えるほどだったと報告されています。

### 復興発展の不均衡と格差と不平等感

その理由として、以下のような問題が指摘されています。

第1に、復興事業は政府主導で進められ、ボランティア団体が出る幕はほとんど無かった。

一例をあげると、山東省の対口支援の「新北川復興事業」は、道路、橋、整地などインフラ整備と住宅、ホテルなど公共施設の再建など197事業で、総額68億元（約884億円）の巨額の義援金が投入されました（人民政府工作報告書）。その受け皿は民間企業が主で、都市部の病院・学校・庁舎などの再建が優先され、農村単位の復興は後回しとなりました。

第2に、被災地で起こった格差の要因は、例えば、対口支援のプロジェクトは支援する省・市が独自に計画し、競うようにして実施したため、被災地全体の調整、統一がなされなかった。援助額も相手によって変わり、歳入の多い省・市に厚く、財政の少ない省・市には薄くなった。また、被災者に渡される1人当たりの援助額も広東省の支援と黒竜江省の支援では40倍以上の開きがあるなど、格差や不平等などが生じた。

そして第3に、農村部は情報の伝達や省令の制定が遅れ、村の伝統・慣習・しきたりなどが復興を阻んだ。

といわれています。しかし、今回のような近年まれにみる大規模の災害に際して「官主導型で民間の出番がない」という批判は少し的はずれのように思われます。社会的責任を持つ「民間の出番」ボランティア活動を行うためには、基本的条件と環境が整ってなくてはなりません。

従来の法律、行政の機構・機能・制度・人的資源などでは、住民の声を反映させ、住民が参加できる復興支援と持続的発展を目指す活動に参加することには限界があり、そのためには法改正、機構改革、財政、情報、人事などの刷新・改革が必要であることはいうまでもありません。

### 海外民間団体との交流と防災共同学習

その一方で、2008年の四川大地震の復興時には、海外の民間団体との交流や防災に関する共同学習が行われました。メディアの力とボランティアの力が見直され、ボランティアが情報社会においてどのような役割を果たすのか、どれだけ早く情報を得て対応していくのかが注目されました。いくつかの事例を紹介しましょう。

①自然災害と闘ってきた人々の知恵と伝統的技術を生かした再建計画を相互に学習する機会となった。

例えば、綿陽市安県・綿竹市遵道鎮・光明村など、100年以上の木造建築が倒壊を免れた伝統的工法の研究が金沢大学と共同で始められた。

②1998年の長江の大洪水後の国家プロジェクト「退耕還林」に学ぶ環境保護と自然保護の植林活動などが行われた。



③青少年と共に汗をかくワークキャンプを実施して、相互理解を深める国際ワークキャンプが開催された。

例えば、中華基督教青年會（YMCA）が主催する、数カ国の青少年が参加した少年サッカー大会、芸術・文化交流、青年のフォーラムが震災前から数年間実施された。

④国家や民族を超える支援活動で、言葉が通じなくても“心”（情動）が伝われば、被災者の心を支える大きな力となると確信しました。（神戸大学学生支援室の参加学生のレポート）

また、震災復興の事例ではありませんが、開発 NPO「オイスカ」は内モンゴルでの砂漠化防止と換金植物（漢方薬薬草）の植林運動を行っていましたが、数年間休止されていた植林運動を今夏、名古屋より 50 人のボランティアが訪中をして再開することになっており、民間団体と共同で持続的開発活動は続けられています。

### ソーシャル・メディアとボランティア力

ツイッターやメールの役割、機能はますます拡大しています。同時にメディア情報の信頼性と、情報規制などに関する政府の対応に関して、内外の関心が高まっています。災害時のボランティアの参加と役割は、公民社会の発展に伴いますますます必要となってくるでしょう。

今回（2013 年 4 月 20 日）の四川省の地震では、中国政府は、許可のない個人ボランティアや、技能を持たないボランティアの被災地入りを規制しました。確かに交通渋滞の原因や、ボランティアを管理できない中国特有の事情は分かるのですが、「被災者のために何かしたい」という災害の惨状を目の当たりにした人たちの素朴な「何かしたい」という情感を無視することはできません。

救援活動に参加して、被災者に寄り添い、自分が変わり、他人と共に生きることの大切さを学んだボランティアが数多くいます。ボランティア活動は、社会の担い手である若者を育てる機会でもあるのです。

### 「パーリンホウ（80後）」世代の人的資源

2008 年の四川大地震には、1 年間で 300 万～500 万人が駆けつけました。また、被災地以外で後方支援に参加したボランティアは 1 千万人といわれています。その多くがパーリンホウ（80 後）と呼ばれる 1980 年代以降に生まれた人たちでした。

現在の中国には、約 2 億人のパーリンホウ世代がいて、公民社会の担い手となる潜在的ヒューマンリソースです。「苦勞を知らない、わがままだ」と世間の評判はこれまであまりよくありませんでしたが、大地震の被災地での懸命な活躍に、パーリンホウの若者たちに対する社会の評価は一転したといわれています。パーリンホウの 300 万人がボランティアに参加したという実績を分析・評価して、これからの地域社会開発の人的資源としてどのように活用していくのか。これからの課題です。

## 四川省災害医療活動 SGRA日中パートナーシップ 2008年

ここで、具体的に四川省での医療活動を見ましょう。SGRAが行った2008年の医療活動（図6）について、見てください。SGRAは、2008年の大地震が起こったときに、すぐに東京にいた40人の中国人留学生のボランティアに呼び掛けて、「災害看護ガイド」と医療関係の日本の資料の翻訳を開始しました。日本留学中の笹川日中医学奨学生と連絡を取り合い、驚異的な速さで「災害看護ガイド」の中国語バージョンを完成させました。

そして、国際救助隊が日本からもアメリカからもヨーロッパからも入ってきました。その国際救助隊と交代した日本国際緊急医療チームと中国の災害医療チームにより、新中国建国後初めての中日合同災害医療活動が、華西医院の石康院長の指揮の下で始められました。これは歴史に残る出来事だと思います。

今回の緊急救援活動に対し、「中日友好精神を体現し、中日両国の医療領域の協力も今までにない効果を上げた」と、関係者は高く評価しました。当時の温家宝首相をはじめとする党の指導者たちも、この機会に日本医療チームと中国の医療活動が合同して、専門医療看護の共同研究を始めてはどうかという提案が出るほどでした。二国間には今いろいろな問題があるといわれていますが、この災害を通して日本と中国の災害医療の合同研究が始められるという期待を持つ人が増えてきました。

ここでDVDを放映します。阪神・淡路大震災、東日本大震災、四川省大地震のボランティアの活動が5分間の映像に編集されています。日本YMCAと中国YMCAとが共同して行ったプロジェクトです。東日本大震災のときにどのような活動がなされたか見てください。

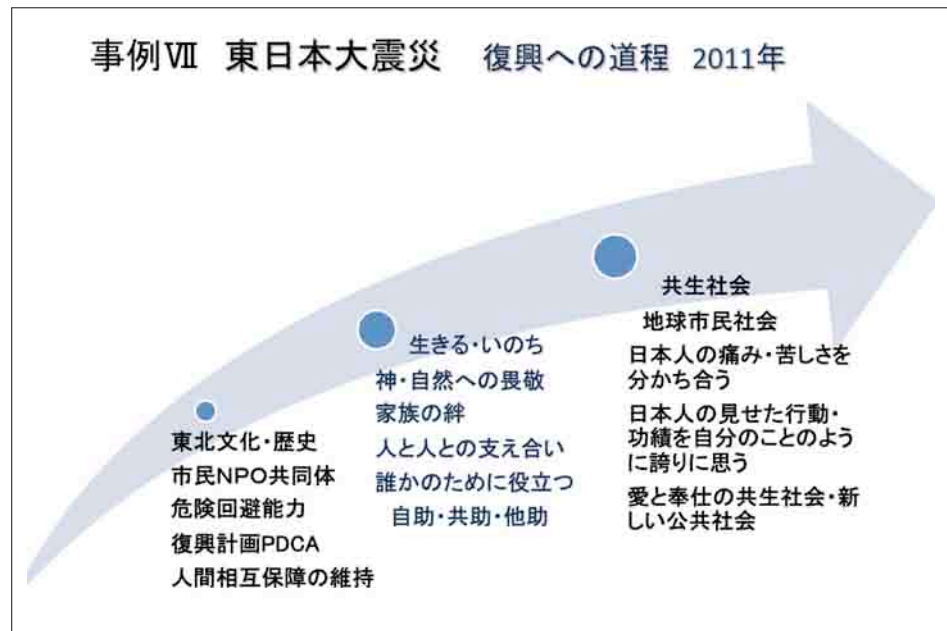
—DVD スライドショー「日本YMCA 3・11の記録」上映—（5分30秒）

図6 四川省災害医療活動



## ■ 東日本大震災の復興期への道程（図7）

図7 復興への道程



### 新しいコミュニティの建設に向かって

総人口の80%を占めていた農村人口が30%に減じた1960年代頃から、従来の「しがらみ」「支配体制」「共産主義」の“自治会・町内会”から「人のつながり」「楽しい仲間」の“コミュニティ”に変化し、津波被害から復興によってその様相（カルチャー）はさらに大きく変わろうとしています。

#### < 事例 >

- ・過去の災害の教訓を生かし、避難能力を高め、避難道路の整備、老人ホームの高台移転などを行っていました。（過去の災害：1896年6月15日に発生した明治三陸地震でマグニチュード8.2）
- ・自立への支援を行政と市民が共同企画して公共事業の推進を図る試みが行われています。
- ・市民とNPOが共同して市議会の機能を縮小する。行政業務の一部を企業に移管して、市民/NPOパートナーを動員する。しかし、行政の主体者は住民であるという意識が不十分であることが影響して、この試みは足踏みしています。

### 生きる・いのち 神と自然への畏敬

復興期のキーワード＜自助、共助、他助＞をよく耳にします。それは援助者と被援助者の関係を示す言葉でなく、同じ目標に向かって復興活動に参加する協働者の道標といえるでしょう。そして、私が参加した宮古市、石巻市での学生たちとのワークキャンプで、また、復興会議で語られた心に残ったいくつかの言葉を紹介しましょう。

- ・神（仏）と自然への畏敬の念を持つことの大切さを、野依良治氏（ノーベル化学賞受賞者）、山折哲雄氏（哲学者）、瀬戸内寂聴氏（宗教家・作家）が被災現地で語った。

・“いのち”と向かい合って一番大切なのは家族の絆、また支え合う隣人が大切であることに気づき、“遠くの家族より近くの他人”の関係を大切にする気持ちが強くなった。

・自然と向かい合って生きてきた東北人の自然観。津波に家族・家・財産を奪われても「われわれは海から恵みを受けているから、海を恨むことはできない」とつぶやいた。(自然が与えてくれる力の大きさ)

・「人は誰でも、答えのない悲しみを受け入れることは苦しくてつらいことです。しかし、日本がひとつになり、その苦難を乗り越えることができれば、その先に必ず大きな幸せが待っていると信じています。だからこそ、日本中に届けます。感動、勇気、そして笑顔を」と選手宣誓で呼びかけた。(2013年3月21日、選抜高校野球開会式で石巻工・阿部主将)

・“誰かのために何かしたい”といった責任感が心の中から湧き上がってきた。

・自立を助ける支援。1人1人に寄り添う支援。長期的・持続的「心のケア」の長い道程が今から始まる。

・津波の恐怖で立ち位置を失った人と向かい合うことができるのか？ 目前で津波に母親を奪われた子どもに「お母さんはいつも見守ってくれているよ」と言ってもただ沈黙が返ってくるだけで、悲しみの気持ちを和らげることの難しさはこれから続く。

### 共生社会/地球市民社会について世界の若者も考えた

2011年4月15日、NHK 特別講義「大震災後の世界をどう生きるか」東京・北京・ニューヨーク三元放送で未曾有の大災害を映像で見た若者たちは真剣に話し合いました。

・津波と原発事故が、同情(sympathy)を超えた共感(empathy)と一体感(unity)を呼び起こし、それを深めた。そして、日本人の見せた行動、功績を自分のことのように誇りに思った。

・マイケル・サンデル教授(ハーバード大学/共同体主義論)は、新世代の地球市民社会(global civil society)の共同体化の兆しを見た、とコメントしました。

### ボランティア活動の変容

次に、東日本大震災後、ボランティア活動がどのように変容していったのかを、図8にまとめました。図の補足説明をしますと、

・個人の生活を大切にすると同時に、地域の一員としての役割を果たすために時間を取る。

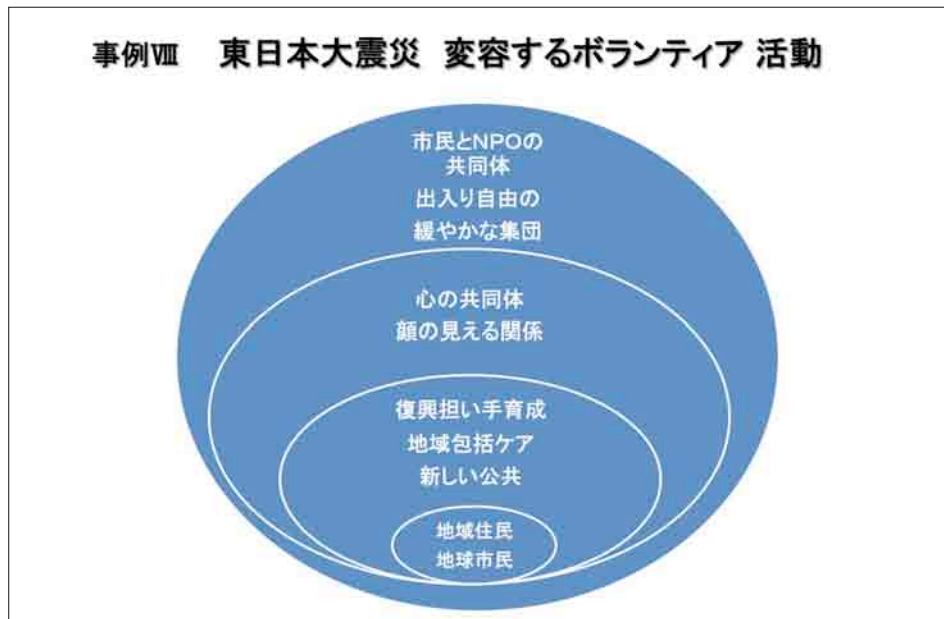
・「ワーク・ライフ・バランス」の考えを拡大して、“仕事と生活の調和”の中にボランティア活動を位置づけする動きもあります。

・本来的に「公共事業」は行政事業でないはずですが、しかし、日本では行政主導型の公共事業が長く続いたために、公共事業は行政が行う事業であると考えるのが一般化しました。

・1980年頃から住民参加型の改善・開発事業が盛んになり、住民の意識は変わりましたが、行政の意識は変わりません。しかし政府の行う公共事業といえども、



図8 変容する  
ボランティア活動



地域住民の合意なくして実施できない傾向はますます強くなってきています。例えば、災害がれき処理、原発放射能汚染物、使用済み燃料の最終処分の保管などの問題が各地で起こっています。

・「公」も「共」も、「私」が基本となる概念です。ボランティア活動では個人の自発性が基本となります。公（public）とは多くの私（private）が集まって構成されるもので、「公」という字の（ム）は private を表し、（ハ）は開くを意味します。したがって「公共」は「私」が集まって開かれていくことを意味するのです。

・赤坂憲雄（民俗学・東北学を提唱）と鷲田清一（倫理学・哲学者）の対談の中で、近年のボランティア活動は「出入り自由の緩やかな集団、義務でなく自発的に動く集団で、隙間を埋めるネットワークの役割、市民力を引き出す力を育てる機会になっている」と語っています。

・YMCA 宮古ボランティアセンターに東京から定期的に来るボランティアの夫婦がいます。彼らは、ここでのボランティア活動を通して「心の共同体（心の故郷）」を発見し、被災者と共に汗を流して相互信頼を築いた疑似家族体験を持ちました。

・東京から参加した学生ボランティアは「顔の見える関係を通して安心と相互の信頼、互いに共感や絆を育むことができた」と語っています。

・メディア報道で、「中長期計画にパートナーとしてボランティア（団体）が共同参画をする動きが、壊滅を受けた自治体で始まる」と報じています。

・その他の動向で「復興を支える人材の育成」に関しては、静岡大学の防災マイスター称号制度や東北福祉大学の災害マネジメントコース、そして石巻専修大学（復興学）などのインターンシップコースが設置されました。

・「地域包括ケア」に関しては、保健・医療（含：心のケア）・介護・福祉、住まいなどのサービスをトータルにかつ継続的に提供する新しい地域をつくる動きがあります。東京ロータリークラブが支援する「新しい命への支援」、プライマリー・ケア活動の「子育て支援センター」もその一例です。

## 若者の価値観の変化と顕在化

最後に、東日本大震災に参加したボランティアだけでなく、日本の若者たちの中にも価値観の変化が見られたことをお話ししましょう。

第1に、人とのふれあい、特に家族の絆、そして、人と人との支え合いを通しての幸福感、これを「愛と希望」と表現した人がいますが、深めることができたという人がいました。

第2に、死生観と共生観というのでしょうか、いのち（死生観）と生きる（共生感）ことを真剣に考えはじめて、“物・金第一主義”の生き方より幸せな生き方は何だろうと模索する、あるいはそれを考えはじめるという意識の変化が若者の間で見えました。

第3に、NHKが放送したハーバード大学マイケル・サンデル教授の番組からの引用です。これは北京とニューヨークと東京を結んだ三元放送で、異文化交流の震災の映像を見た若者や学生の声、意見を聞いて、マイケル・サンデル教授がまとめました。「異文化交流の体験が、過去の戦争による負の歴史と国境を越え、同情（sympathy）を超えた共感（empathy）が他の人との一体感（unity）を呼び起こし、戦争や暴力のない平和な世界の創出に風を送り込んだのではないか」。

## 中国の志願者活動の制度と課題

中国のボランティア活動の制度（図9）を駆け足で見えていきましょう。

ご存じのように、現行の公的な制度として、国内・外のネットワークを活用して多様なプログラムを進めていく青年志願者管理方法が2005年に制定されました。それから、社区志願者管理方法は2007年に制定されました。全国レベルのボランティア活動に関する法律はありませんが、地域レベルでは、8省10市1自治区にボランティア管理条例が制定されて、ボランティア活動を進めていく基本的枠組みをつくりました。

図9 活動の制度

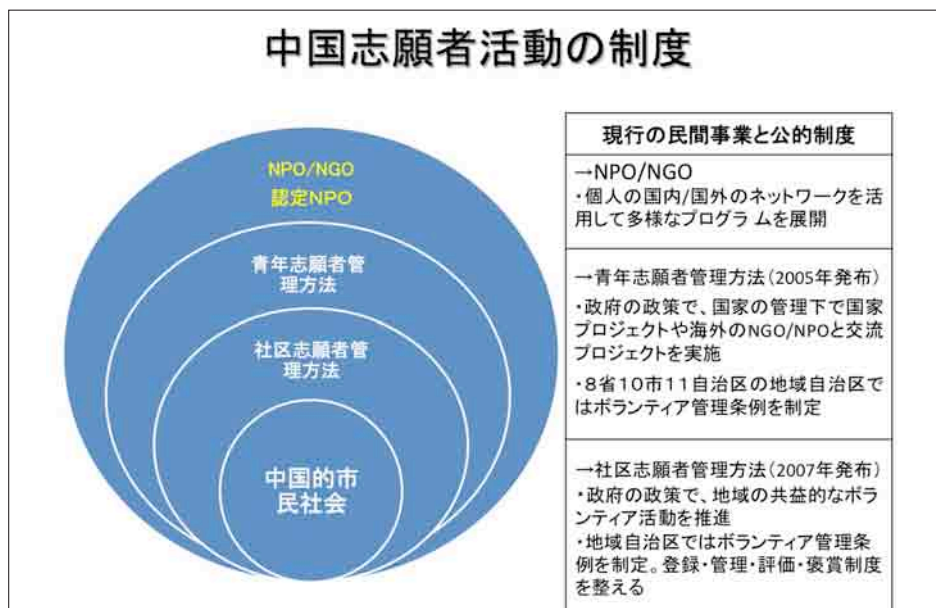


図 10 活動の課題

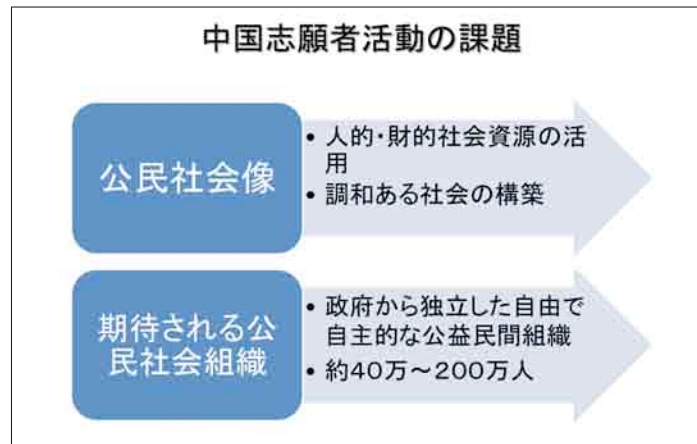


図 11 中国におけるボランティア活動の事例

事例：「社区青年志願隊」はボランティア団体ではない

イ) 2012 年、北京市の中心部の豪雨被害によって浸水した家屋は水没して 1 人が死亡した。ボランティアで協力したいと駆けつけた一般市民は「社区青年志願隊」のユニフォームを着たボランティアに参加を拒否された。

ロ) コミュニティとボランティア活動。「公民社会」の刷新に従って「社区青年志願隊」は今後どのような発展をするか？ 上海と香港 YMCA のボランティア活動をモデルにした教育と活動はすでに始められている。

中国志願者活動の課題がその中からいくつか見えてきました（図 10 & 図 11）。

それは、軽井沢で行われた SGRA フォーラムで、早稲田大学社会科学総合学術院・劉傑先生の「模索する中国的市民社会」という発題で、先生の考えは『「公民社会は国家と政府から独立したものでなければならない、中国はすでに公民社会に入った」という北京大学公民社会研究センターの見解と、『結社の自由が保障されていない現状ではまだまだ程遠い』という清華大学公共管理学院 NGO 研究所の見解は、『公民社会』の定義と解釈に関して違いがあること表していますが、両者に共通するものは、単位社会から公民社会の形成であって、それを構成する主体は NGO 組織と NPO 組織であるという点では一致しています。また、自由で独立の意思を持ち、自主的に地域社会の一員として権利を行使し、責任を果たす活動を、パーリンホウ（80 後）の世代に見ることができる。そのような期待を込めた中国における公民社会像の現状を知ることができました。

公民社会の組織については、政府から独立した自由で自主的な公民社会組織をさらに拡大していくことが期待されます。単位社会を村民の自治体、いわゆる農村部における住民コミュニティに拡大し、民主化を推進するということが、これから期待される公民社会の組織の課題であろう」と指摘されています。

私は、1990 年の世界ボランティア宣言にある「民族、文化、宗教、年齢、性別、さらに身体的、社会的、経済的状况に関係なく、すべての人が自由に集まり、ボランティア活動を行える権利を持っていること。他者や地域社会のために金銭的見返りを期待せずに、個人または集団として自分の時間・能力・そしてエネルギーを自由に提供する権利を認められるべきである」を支持し、それが実現することを期待しています。



最後になりますが、私は去年9月にここに来ました。反日デモの盛んな時期でしたが、「このような時だからこそフォーラムをしましょう」と今西淳子さんに言いました。すると彼女は「こういう時だから行きましょう」と言われて、来ました。結果的には、フォーラムはできませんでしたが、元日本留学生と親睦と懇談の機会を持つことができました。また、北京 YMCA のボランティアと米山会の元奨学生 100 人に会って「あなたのボランティア観は？」を聞くこともできました（図 12）。

多くの人が、ボランティア活動というのは「何をするのかが分からない」と答えています。「ボランティアとは安価な労働力ではないのですか」という問いもありました。また、ボランティアの精神は儒教の教訓で、われわれの文化の中にすでにあるのです、という答えもありました。

ボランティアへの「参加の意思はあっても、お金がないからできない」という意見もあります。また、ボランティアができる時間のある退職者のグループに聞いてみますと、高齢者の人たちは、「自分たちは社会のために、子どもたち、次の若い者のために何かできることを探している」という人が多くいることが分かりました。このインタビューの結果、「自発的行為」「無償の活動」「福利向上」がどういうものがまだ十分に理解されていないということが分かりました。

今後の課題として、ボランティアの教育訓練は誰がやるのか、ボランティアを育てる環境整備と監視されないネットワークはできるのか、そして、民間のボランティア認定制度は中国でできるのだろうか、という専門職の人たちの疑問。ボランティアを本当に推進するのであれば、社会的な枠組み、制度化、これに関する法令の整備、財政的措置が必要であるという意見もありました。

以上、最後の方は少し駆け足になりましたが、今日の課題として与えられました「ボランティア活動論」について、私の考え方を皆さまにお伝えしました。ありがとうございました。（拍手）

図 12 中国のボランティア 100 人に聞いてみた

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア精神は儒教の教えにあり、学校教育を通して精神的には内在している。</li> <li>・ボランティアに対する報酬は実費主義で労働の対価ではないことは理論的に理解する。</li> <li>・ボランティアをする意思はあっても、生活にゆとりがなくては参加できない</li> <li>＊ 2012 年 1 人当たり名目 GDP 日本 5,963 ドル 中国 8,227 ドル (2013/05)</li> <li>・ボランティア活動をする時間的余裕は高齢者、現職退職者にはある。特に高齢者のボランティアに関する興味とボランティアを希望する人は近年増加している。</li> <li>・後期高齢者に対するボランティアの手助けの必要性は年々増加する一方、老老介護の実態と限界も見えてきた。</li> <li>・ボランティアとは何か？</li> <li>＊ 2012 年、北京市の中心部の豪雨被害によって浸水した家屋は水没して 1 人が死亡した。ボランティアで協力したいと駆けつけた一般市民は、「社区青年志願隊」のユニフォームを着たボランティアに参加を拒否された。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアは安価な労働力ではないか？</li> <li>・ボランティアは何をするのか？</li> <li>※ 上海・香港 YMCA の地域福祉センターの活動が紹介された。</li> <li>・ボランティアの自発的行為と無償の活動？</li> <li>・ボランティアとプロ（専門家）の違いは？ 役割の違い、学歴の有無、身分の違いはあるのか？</li> <li>・ボランティアの教育訓練はどのようにして行われるか？</li> <li>・ボランティアのトレーナーはどのようにして選ばれ、どのような資格・権限を持っているのか？</li> <li>・ボランティアの社会的認定制度が必要。</li> <li>・ボランティア活動の環境を整え、ネットワークを広げる。</li> <li>・ボランティア活動の育成・保護・推進に関する法令の整備の必要がある。</li> <li>・学校教育とボランティア活動、指導要綱、表彰・認定制度を検討する。</li> </ul> |
|--|--|

# パネルディスカッション



司会    ご質問がある方は、ぜひお願いしたいと思います。申し遅れましたが、本日はロータリー米山奨学会の皆さまもおいで下さいましたので、よろしければ、ぜひコメントを頂戴したいと思います。

胡      今日は宮崎さんのご講演を聴かせていただき、大変勉強になりました。じつは私も、5月18日から北京で開催されている中国国際園林技術大会のボランティアに今年の2月頃に応募しまして、6月から実際に参加する予定になっております。中国のボランティアの発展の歴史、ボランティアの推進や概念などをより深く理解することができました。

司会    どうもありがとうございました。今日は学生の方が多いようですが、いかがですか。ボランティアは普段なかなか経験できないと思います。学生生活が忙しくて、いろいろなことを体験するチャンスも少ないと思います。

僕は、じつは2008年から日本語学部で教師を務めるようになりましたが、一時期、教師というのはどのようなものなのかなと戸惑ったり、迷ったりしていました。しかし、3年たったある日、当時担当していた授業を受けていたある学生から、先生に出会ってから勉強したくなりましたと言われ、その一言で、教師のやりがいがあるのだと思いました。それまでは教師としてのパフォーマンス

ス、スキルを磨くことをもっぱら考えていましたが、その日から、勉強させるということではなく、自立・自発させるということが教師の醍醐味ではないかと思うようになりました。

これはまさに宮崎先生の今日のお話と共通しているところがあると思います。自らやりたくなることが、われわれが何かをやる場合の一番の原動力になると思います。僕の話が長くなりましたが、昨年、全国スピーチコンテストで見事に1位を取った王さんに、ぜひお話を伺いたいです。

王 今年も四川省でまた大きな地震がありました。そのときも中国人大学生の中でそちらに行って、ボランティア活動をしたいという人もたくさんいました。しかし、現地の人たちにそれが邪魔だと言われたこともありました。私たちは今、元気な大学生で、たくさんボランティアをしたいのですが、そのとき、現地の人の邪魔になるのではなく、助けるようにするには、どのような注意事項などがあるのか伺いたいです。

宮崎 非常に大切な質問です。この間の四川の地震のときは、ボランティアが壊れた道路に殺到して、救援活動や救援物資を届けるという政府の一番大きな仕事がスムーズにできなかったということが起こったようです。特に災害のときには、何が必要なのか、というニーズを知ることです。相手のニーズが何であるかを正確にキャッチするネットワークを、それこそ携帯電話でネットワークをつくっておけば、差し迫って必要なことの情報が得られると思います。そのニーズにきちんと応えるということが、やはり大事です。阪神・淡路大震災のときも、東日本大震災もそうでした。

しかし、震災の起こった直後から、軍隊が入ったり、警察・消防が入ったり、政府の救助活動が始まると、ニーズは変わっていくのです。ですから、災害救援のときのボランティアで一番大切なのは、相手が今、何をしてほしいか、今、何を必要としているのかというニーズを的確につかまえて、それができるか、できないかという判断をすることです。できなければ、こういうニーズがあるということを経営の窓口、福祉協議会、地区のボランティア協会なりにきちんと伝えていく。そういうネットワークを、ボランティアは持たなければいけません。

阪神・淡路大震災のときに、こういうことがありました。亡くなった人のことで最初に困ったのは棺桶なのです。家の中に埋もれていた遺体を掘り出して、それを納めて火葬場に持っていく棺桶がない。これが必要だというニーズ、情報がさっと出て、それをキャッチしたいくつかの団体と個人が葬儀屋に掛け合っ、とにかく棺桶を持ってそこに行きました。ところが、その遺体はすでにきちんと火葬場に送られていました。そこで、今、何が必要かと聞くと、今度はお線香が必要だということです。遺体の臭いが外に出ないようにするお線香がないのだと。ニーズというのは、状況の変化に伴って変わってきます。

それから、復興というロングレンジで考えるときには、この人を本当に自立させ、助ける本当に必要なニーズなのかどうかということをきちんと確かめます。災害時に情報の連絡・調整をする地方自治体の担当者や全社協（社会福祉法に基

づいた各都道府県にある社会福祉協議会）をはじめ、地域の自治会、商店、企業や学校・医療機関、地域の NPO、市民運動団体などと十分に意見を交換して取り組まなければなりません。自分たちでこれが必要だと決めつけて持っていくほど迷惑なことはありません。「小さな親切、大きな迷惑」というのは、そういうところから出てくるのです。

司会 中国でもそのような言い方があります。気持ちはすごく親切ですが、結果的には相手に満足してもらえないことになってしまうことはしばしばあると思います。これからはボランティア活動をする前に、まず相手のニーズを知る必要があると思います。

Q1 宮崎先生は、長い間ボランティア活動をされているとき、自分の力で解決できない困難に遭ったことがありますか。そんなとき、宮崎先生はどうされますか。

宮崎 難しい質問ですね。たくさんありました。それは今のニーズの問題と一緒に、この人が一番私に助けてほしいのはこれだ、というように自分で決めつけてしまうわけです。それをやるのが私のボランティアの使命だと思い込んでしまう。私は多分にそういう性癖があるので、あなたの考え方を押しつけようとするとは必ず失敗しますよ、と言われる。これが一番難しかったです。

それから、いろいろな経験の中で出てきたのは、まず、「自分の命は自分で守る」こと、「自分は何ができるか」を知ること、そして、弱者の側に立つこと、役割の明確化、計画と実行、協働体制ですね。大学ならば学内のボランティアサークルがあって、そこに集まり、みんなの意見を聞くのです。みんなの意見を聞くということは、そういう人たちが参加するように動機づけをすることです。言うだけではなく、あなたは何ができるのか、あなたはそういう意見を言ったけれども、本当に一緒にやるのかどうかということを互いに確かめ合うことから始めます。これを参加型のディシジョンメイキングといいます。みんなが自分たちのサークルなり、自分たちと志、思いを同じにする人たちと話し合っ、難しい問題や課題にはどのように対応すれば良いかを考えるのです。

災害ボランティア活動で一番難しいのは「心のケア」です。これが一番長続きします。阪神・淡路大震災から 18 年過ぎましたが、現在続いているボランティア活動の中で、被災者の人たちが今も必要としているのは「心のケア」です。自分の悩みをやはり聞いてほしい。ある日、突然フラッシュバックがあります。震災のときに屋根が落ちてきて、その下敷きになったという経験を持った人は、何かあったときには、そのフラッシュバックに悩まされます。そういうときに相談できる人がいなければいけません。PTSD（心的外傷後ストレス障害）、災害の後のケアをどうするかは、かなり専門的な勉強と知識、経験を持たなければならず、そう簡単にはできません。私の経験からもまず、被害者に寄り添って相手の話を聞き（傾聴）、痛みを和らげ、「頑張って！」と言わないで自分で解決できるように背中を押してあげる、ということです。

今のご質問のように、私などはそういうことが十分に自分でできないから困り



ました。私は「心のケア」の限界を感じたときは、それを専門にしているボランティアの人に頼みます。そういうネットワークを日常的にきちんとつくっています。これも大切なことだと思います。自分自身で全部できるとは思えないこと、できると思ったときにはどこかに間違いが起こっている。できるだけ多くの知識を集め、情報を集めて、みんなが参加してできるような仕掛けをつくること、これが私にできることです。ボランティアには、専門性と責任感と愛情がなければと思います。

司会 よろしいですか。他の方はいかがですか。

Q2 私は一度もボランティア活動に参加したことがありません。私が被災地に行って、そのすさまじい光景を見、死体を見た後、多分、不安や恐怖感を抱くようになるでしょう。どうやってその不安を克服して、ボランティア活動に思い切り力を入れることができるのでしょうか。

宮崎 ありますね。東日本大震災のときにも、現場に行った人の中に、ノーベル化学賞を受賞した野依良治先生がおられました。野依先生が被災現場の惨状を見て、「自然の力を信じることのできない者は、科学者にはなれない。これは技術の敗北で、想定外は言い訳にならない。技術は人間がつくり、リスクと利益の選択肢を持っている」、そして「生きていることが申し訳ない」とメディアのインタビューに答えられたのが大変印象的です。2人目は瀬戸内寂聴さんです。被災地で開かれた日本仏教界の合同慰霊祭で参加した中学生の前で、瀬戸内寂聴さんが、お母さんを亡くした子ども、自分の兄弟を目の前で津波に呑み込まれた子どもたちに話をしたら、その中の女子中学生が立って、「先生、戦争で死ぬことと、津波で死ぬこととどう違うのでしょうか」という質問をしました。これに対して、瀬戸内寂聴さんは彼女の真摯な質問に驚いたと言われています。その場に居合わせたジャーナリストも、宗教家の人たちも惑い、何をしたらいいか分からないという状況を目の当たりにしました。

それではどうすればいいのか。私は今も被災地に2カ月に一度ぐらい行きます。2年以上たちますが、行って、今日はどういうことがありましたか、と話し掛けます。最近になってやっと、おばあさんたちが口を開いて、自分はこういうことで今も本当に悲しいのですと言うのです。「孫が亡くなったので自分は本当に1人です。自分の孫が津波で持っていかれた。あの孫が亡くなったら、自分はどうして生きていけばいいのか分からないのです」という話を、2年たって初めて話してくれました。

災害後にボランティアが行って、お母さんを目の前で津波に呑み込まれた高校生に会って話をしたときに、その高校生は黙っていました。目の前で、親が津波に呑み込まれた状況を見た人は、いまだにその話ができません。まずそういう人たちがいるということを知ったときに、「自分に何ができるか」「何をしてはいけないか」ということが分かると思うのです。

「今日は泥かきの仕事もないし、荷物を運ぶ仕事もないけれども、前の畑にでき

た草を抜くだけの仕事だけでも一緒にしましょう」。私は、一緒にやるのがひとつの答えだと思います。自分がこれをできる、これをしなければいけないということは、災害ボランティアの場合はなかなかありません。

ボランティアは災害だけではありません。基本的には、相手が「何を私に求めているのか」「何を自分に言ってほしい」と思っているのか……ということを知る、そういう感性を磨くことが第一歩なのです。それから始まるのではないかと私は思います。

司会      そろそろ時間になりますので、これで質問を終了させていただきたいと思います。本日、宮崎先生のお話を伺いまして、ひとつ考えさせられました。今の時代は、体を満足させるという思考は人々の頭の中にありますが、心を満たす、魂を満たす方法はいまだに見つかっていないのではないかなと思います。しかし、今現在、最も良い方法は、まさにボランティアをやるということではないかと思いました。あらためて宮崎先生に拍手をお送りいたしましょう。(拍手)

最後に、SGRA 代表の今西淳子さんに閉会の挨拶をお願いしたいと思います。



## 閉会挨拶

■ 今西 皆さま、今日は第7回 SGRA フォーラムにいらしていただき、ありがとうございます。昨年の9月にする予定が、社会情勢が悪くなってできなかったのがとても残念でしたが、こうやってついにできたことを嬉しく思います。

宮崎さんのお話にレポートの話が出てきました。アジア各国の市民社会の状況を、若い学者の先生に話してもらったフォーラムをして、それをレポートにしました。第52号です。日本語のものはオンラインでダウンロードすることもできます。「SGRA」か「関口グローバル研究会」で検索していただければ出てきます。もしくは「渥美財団」から「SGRA」を探していただければ出てきます。実は中国語に訳しつつありまして、中国語で出そうかと考えてもいます。少なくともオンラインでは出せると思いますので、もう少しお待ちください。

さて、組織化したボランティアになってくるノン・プロフィット・オーガニゼーション（NPO）とか、ノン・ガバメント・オーガニゼーション（NGO）は、今、日本ではかなりブームではないかと思います。何か社会のためにしたいという気持ちが強くなっています。これは日本だけではなく、欧米でも、若い人たちはビジネスよりも、もう少し社会に貢献して、しかもそれを寄付だけでするのではなくて、資金が全部回るようなソーシャル・ビジネスという方向に進んでいるようです。中国の中の若い方々も、興味をお持ちになっているのではないかと思います。ネットを見ればいろいろな情報がいくらでも入ってくると思いますから、こういうことをきっかけに、いろいろな世の中の動きを見ながら取り組んでいってください。ボランティア・ワークは小さいことからいくらでもできますが、だんだんどうやって組織にするか、どうやって資金を獲得するかということで、ボランティアが組織化していく過程になります。

国家が行っていることから見ればとても小さいのですが、ひとつひとつは小さな組織でも、それがすごくたくさんになると、社会が変わってくるのではないかと思います。

SGRA フォーラムにいらしてくださいました、国際交流基金の吉川所長、ロータリー米山奨学会中国学友会の皆さま、そして受付などをしてくださったボランティアの学生さん、素晴らしい同時通訳の方々、ありがとうございました。

最後に、宋剛さん、これだけの取りまとめをありがとうございました。（拍手）



第7回チャイナフォーラム

# 「ボランティア・志願者論」報告

宋 剛 北京外国語大学日本語学部専任講師

2013年5月22日、第7回チャイナ・フォーラムが、ついに、北京外国語大学日本学研究センター3階多機能ホールにて開催された。

「ついに」という言葉を用いたのは、昨年9月に北京で開催できず、今回まで延期となってしまったので、夢がやっと叶えられたという気持ちが込められているからだ。昨年、開催できなかった理由は周知のとおりだが、5月の開催が急に決まったために、今回のフォーラムの特徴のひとつは短い準備期間であった。ポスターの印刷と掲示が開催1週間前、レジュメの完成が3日前、横断幕の製作が2日前、アンケートの作成が当日の朝、という慌しいスケジュールだった。それでも、フォーラムは無事に終了した。そういう意味で、今までで一番やりがいと満足感を味わったのは今回かもしれない。

個人的な感想はさておき、本題に入ろう。

東京YMCA同盟の宮崎幸雄名誉主事が今回の講師を務めてくださった。講演のテーマは「ボランティア概論」だ。テーマが幾度か変更されたが、レポートではポスターのとおりにする。YMCAといえば、西城秀樹のあの名曲「YOUNG MAN (Y.M.C.A.)」を想起させるが、宮崎先生は日本キリスト青年会（Young Men's Christian Association）同盟の名誉主事なのだ。しかし、その健やかな姿は、一目見れば、今の西城秀樹でも匹敵できない、と思ってしまうほどだ。

講演は、ベトナム戦時下、宮崎先生のボランティア原体験に始まり、養鶏、養豚などの逸話が盛り込まれると、早くも会場にいる人々を釘付けにした。話が近年の災害救援活動とボランティア活動に進むと、より身近に感じられ、阪神淡路大震災、四川大地震、東日本大震災の際、あれだけ多くのボランティアが力を注いだことに、思わず脱帽した。また、四川大地震の後、心のケアに関するマニュアルの日中翻訳作業に取り込んだSGRAも事例として挙げられ、私はその翻訳者の一員として、当時よりも誇らしく思った。

阪神淡路大震災以来、また四川大地震以来、ボランティア精神は、徐々に両国で広がり、より多くの若者がボランティア活動に身を投じるようになった。そんな中、宮崎先生は、若者の意識の変化に注目している。阪神淡路大震災のボランティアたちが期待していたのは、非日常的体験、被災者とのふれあい、居場所の発見であったのに対し、東日本大震災の場合、家族の絆、死生観や共生観に関す

る思考、異文化交流と近代史の学習など、高い次元の精神的ニーズが求められているという。

最後に、宮崎先生は、開催地の中国に焦点を絞り、そのボランティア活動の限界と新たな展望について述べた。政府の力が大きい中国では、ボランティア活動もその監督部門の指導を受け、組織的に行われている。それは、全体的に見れば効率がよいというメリットがある一方、一人ひとりの参加者が、自主的に参加するわけではなく、言われたからやっているに過ぎない、言ってみれば、ボランティア活動から得た満足感と達成感が希薄で、一人ひとりの力も最大限に発揮できないというのも無視できない。

しかし一方、80年代生まれ、いわゆる八零後（パーリンホウ）世代の人々は、自由で、独立の意志を持ち、自主的に地域社会の一員として権利を行使し、責任を果たす活動を展開している。そういう意味で、近い将来、中国で自主的にボランティア活動やチャリティ事業に従事する若者がどんどん増えていく、と宮崎先生は楽観視している。

質疑応答の段階で、ロータリー米山奨学会中国学友会の方や北京外国語大学の学生より、コメントと質問を頂戴した。ボランティア活動に止まらず、宮崎先生は、フォーラム終了後もしばらく学生の人生相談相手を務められた。

来年から、チャイナ・フォーラムは研究者交流へ方向転換する可能性が大きい。中日外交の行方が不明瞭の中で開催された第7回チャイナ・フォーラムは、きっとわれわれの記憶に焼き付き、忘れられない一回となるだろう。

中文版

## 第七届 S G R A 中国论坛

# Volunteer · 志愿者论

### ■ 论坛宗旨

SGRA 中国论坛作为介绍日本民间人士公益活动的论坛，每年均会在中国各地的大学或其他机构举办。此次的第 7 届中国论坛，我们荣幸邀请到了公益财团法人日本 YMCA 同盟的宫崎幸雄先生，他会根据其自身常年的经验，向我们阐释志愿者活动的意义所在。提供中日翻译。

## 关于 SGRA

SGRA，以从世界各国来到日本、经过长期的留学生活在日本的研究生院取得博士学位的“知日派”外国研究者为中心，为了对个人或组织在树立面向全球化的方针与策略时有所裨益而进行研究，提出解决问题的建议，并将其成果以论坛、报告、网页等方式广泛地向社会传播信息。根据不同的研究主题，多领域多国籍的研究者编成研究小组，广集智慧与人脉，从多方面的数据来分析、考察，进行研究。SGRA瞄准的不是某一特定的专家，而是广泛地以社会全体为对象，开展包含广阔研究领域的跨国界、跨学科的活动。SGRA的基本目标是实现良好的地球市民作出贡献。详细情况请参看主页（[www.aisf.or.jp/sgra/](http://www.aisf.or.jp/sgra/)）。

# Volunteer · 志愿者论

时间 | 2013 年5月22日（星期三）下午4点~6点  
地点 | 北京外国语大学日本学研究中心多功能厅  
主办 | 渥美国际交流财团关口全球研究会（SGRA）  
后援 | 国际交流基金北京日本文化中心

## Volunteer · 志愿者论

34

讲演 宫崎幸雄先生（日本YMCA同盟名誉主事）

### ■ 讲演要旨

#### 1) 我的首次志愿者经历 <越南战争与志愿者>

- ①自愿参加(逃避挫折)②这边的Needs（体育）与那边的Interests(养猪)
- ③生命源于信任（布满地雷的村庄） ④解放农民的学校（自立与自助）
- ⑤作为职业志愿者参与到国际社会

#### 2) 被称作志愿者元年——阪神大地震之后开始普及的志愿者（观）

#### 3) 志愿者活动的社会效应（对地区的爱、伙伴、成就感、满足感、希望）

#### 4) 大地震受灾地区的志愿者活动与善于救援的受灾群众

中国人眼中的东日本大地震救援活动与日本人眼中的汶川大地震救援活动

#### 5) 3·11青年的自我意识和价值观的变化

国际社会的支援、同情、通感、一体感、生死观、共生观、人与人之间的牵绊

## 提问和回答环节

53

闭幕讲话 今西淳子 56

后记 宋刚 北京外国语大学日语系讲师 57

讲演者简历 89

# Volunteer · 志愿者论

宫崎幸雄

日本 YMCA 同盟名誉主事

大家好！

这次的论坛原定是在去年 9 月举行的，但是由于中国的反日游行而中止了。尽管如此，我还是很高兴能和今天到场的各位在此畅谈。

首先，我们来探讨一下今天的主题，“志愿者”这个词语的定义吧。

志愿者的英文是 Volunteer，据说它的词源来自拉丁语的 Voluntar（自由意愿）。

在日文词典《广辞苑》中，对这个词的解释是“志愿者（意为义勇兵），贡献者，自愿无偿参加社会事业等的人”。

在日本政府的终生学习方针中，则做了如下说明：“志愿活动，是基于个人的自由意志，主动贡献出其技能和时间等，对社会做出贡献；一般认为，志愿活动的基本理念在于其自发性（自由意愿）、无偿性（无薪酬），公共性（公益），先驱性（开发、发展）”。（1992 年 7 月 29 日 终生学习审议会议汇报）

而在全世界志愿者宣言中，则是这样定义的：“志愿者是个人自发地决定并选择参加的，为提高人的潜在能力和日常生活的质量而进行的，增强人与人之间依存感的活动。”（1990 年 国际志愿者协会总会）

这样，各种“志愿者的定义”之间，在哲学和理念方面趋势有共通之处，但到了“志愿者活动”的层面上，则自然会由于文化、宗教、民族、政治、社会和经济情况等背景的不同，而使其活动的形态变得多种多样。

今天，我们就关于在 2008 年中国·北京奥运会和四川大地震，以及在日本发生的 1995 年阪神淡路大地震、2011 年东日本大地震和海啸灾害时，做出了巨大贡献的志愿者活动，来进行探讨吧。两国的媒体都分别将这些事件作为两国“志愿者元年”到来的标志。

## ■我的志愿者初体验

我第一次参加国际志愿者活动是 1969 年 ~1976 年的越南难民救助活动。

### 越南战争时期的志愿者活动

我从大学时候开始，就加入了 YMCA（基督教青年会）这个国际青少年团体参与各种活动了。在 1969 年，也就是越战结束的那年，我作为一项战后复兴活动的志工被派往了西贡（现在的胡志明市），帮助从战场回来的青年回归社会，并援助那里的农村发展。当时是在战争时，在美军的据点战略下建成的一个位于南越西宁省的 5000 人的难民村——莱州村工作的。

首先我们对能够获得现金收入的“可以自立的项目是什么”做了调查。结果显示，“木薯作物和养猪”是能够发挥村民的经验和充分利用村庄环境的“简单快速的赚钱方法”。于是我就马上开始学习养猪。首先从考察西贡郊外村庄，学习如何养猪开始。先搜寻了许多关于便宜饲料的获得和配制方法、猪病预防、猪舍改良、出货时间、运送方法等方面的基础信息，然后做成“养猪事业项目书”，再开始向村长和越南工人们进行推荐。通过在周边村庄的问询得知，猪价最高的时候，是村庄节日的时候。当时我们制定了一个桌上计划，以节日为目标，计划在那之前饲养出 100kg 以上的猪来出售，但是到了目标时间的前一周，猪还是没有长到 100kg。因为喂猪的饲料都是一些香蕉竿、木薯茎、鱼骨头什么的，所以怎么也长不起来。于是，大家就聚在一起商量，该怎么办才能让猪在一周后达到 100kg。“饲料里面和泥巴喂猪吃，再禁止猪运动”这样的话很快就能长到 100kg，于是立刻就这么办了。如果现在这样做的话，那可就不得了了。

这样，为了能在猪价最高的那天卖个好价钱，养猪小队开始了以村庄节日为限的“GO!GO!100kg 猪”的活动。

然后，先设置了一个管理猪舍和运猪用三轮车的合作社。合作社这个名字听起来很气派，但实际上就是用世界 YMCA 难民复兴资金买了 3 头种猪和 3 台半旧的人力三轮车，商量好赚钱了大家分，就这样开始了这个项目。

就这样，我们拥有了一个像模像样的“模范猪舍”和“三轮车送货郎”。借此机会，为了提高对村民对村庄的忠诚度和伙伴意识，我们还重新开始了过去的村民互助式金融制度，也就是越南式的村庄组织。这个组织开展起来用了不少时间，但一直持续到了西贡陷落，共持续了 8 年，成为越南 YMCA 的“代表项目”。

### 村民的需求

“发现人们的需求，并满足这些需求”这是志愿者活动的原则。但是，实际上要把握人们的需求是难上加难的。而且，即使有人说“现在就需要这个！”，要看出这是不是真的需求，或者是谁的需求也并非是一件易事。



让我们再来看看上面的支援难民自立的“养猪项目”吧。

这个项目是按照一个“经验和知识→【养猪项目】→国际援助→收益→村民自立→共同体意识→生活质量的提高→收益分配”的流程展开的。但是，【养猪项目】是否真的就是符合村民需求的呢？或者，【国际援助资金】的使用是否妥当呢？在最初的几年内，项目进展很顺利，种猪也达到了 100 头，收支平衡良好，村民的参与意识也发生了变化。但是，最终获利的却只有一小撮人，而项目也随着南越的解放在 3 年后就不了了之了。经过十多年，留下的只有一所“小学堂”而已。

造成自立和持续发展上的困难的最大的原因之一，就是自 1940 年后就一直持续不断的从战争到独立，再到外国统治、解放的那段历史，以及 1964 年 8 月，在美军对北越南的轰炸中爆发的越南战争。对于越南的难民来说，在战争留下的破坏、死亡和憎恨中，好不容易获得短暂和平的他们，要建立一个“自由独立”的国家是非常困难的。特别是在越战中，联合国和国际组织的人道援助、经济支援对于人们的生存是必不可少的，但是在漫长的战争岁月中，已经习惯了这种生活的人们，要背负着战争造成的伤痛重新自立起来，则绝非易事。这也是我亲身体会到的。

在越战结束 17 年后的 1992 年，我得以重访莱州村。和村子的人民委员会表明身份后，年轻的村长一边说“啊！是日本的队长吧！我知道你啊！”，一边带我参观了村子。而当时 YMCA 的“代表项目”模范猪舍变成了村子干部的住房、公共井成了村长个人的所有物，而人力三轮车送货厂则成了一个退役军人的个人财产，合作社由于内部分歧解散……留下来的只有一个难民女教师，在不接受任何外部财物援助下，带着几个小孩子开的小学堂。

当时我好像挨了当头一棒，而“探访我的志愿者活动历史之旅”也就这样结束了。

## ■ 自然灾害救援和志愿者活动

我们来对同样被称为“志愿者元年”的 1996 年 1 月阪神淡路大地震和 2011 年 3 月东日本大地震，以及 2008 年 5 月四川大地震中的志愿者活动做一个比较。（图 1）

地震的大小上（以下震级用 MC 表示）：阪神淡路为 7.3MC，东日本大地震 9.0MC，四川大地震 8.0MC。死亡人数、损坏的房屋数、失踪人数尽量使用的是最新发布（2013 年 5 月末）的数据。东日本大地震中失踪人数为 3240 人。志愿者活动的参加人数上：阪神淡路和四川地震以 3 个月为单位，东日本大地震以 6 个月为单位来计算。四川省的数据参考的是民间 NPO 的调查结果。阪神淡路大地震时，3 个月共有 117 万志愿者参与。东日本大地震和海啸时，有 73 万 8 千 500 人参与。四川地震时有 130 万人参加了志愿者活动。

图 1

	阪神・淡路	东日本	四川
时间	1995年1月17日	2011年3月11日	2008年5月12日
震级	7.3	9.0	8.0
死亡者	6,434人	16,131人	69,000人
失踪者	3人	3,240人	18,000人以上
损毁房屋	249,000幢	275,258户	216,000幢以上
受灾人数	不明	386,739人	约4,614,000人
避难人数	不明	340,000人	约1,514,000人
志愿者活动	1,170,000人 3个月	738,500人 6个月	约1,300,000人 3个月

### 阪神淡路大地震志愿者的意识调查

这里对阪神淡路地震时，参加志愿者活动的人做了一个意识调查。图2、3（事例1、2）

这项调查，是1995年2月到8月间，由神戸大学、神戸商科大学（现在也是兵庫県立大学）、关西学院短期大学、日本YMCA同盟共同进行的。

调查中，共对1004个志愿者进行了采访，其中以前没有过志愿者活动经验的人占40%，有经验的占60%。其中男性40%，女性60%。从参加者的属性来看，学生最多，占44%，公司职员使用自己的假期来参加志愿活动的有20%，第二多的是主妇。

活动的内容主要包括：清理废墟、重建活动、援助物资的分配、对受灾人的个别访问、对避难所的访问和心理辅导等。

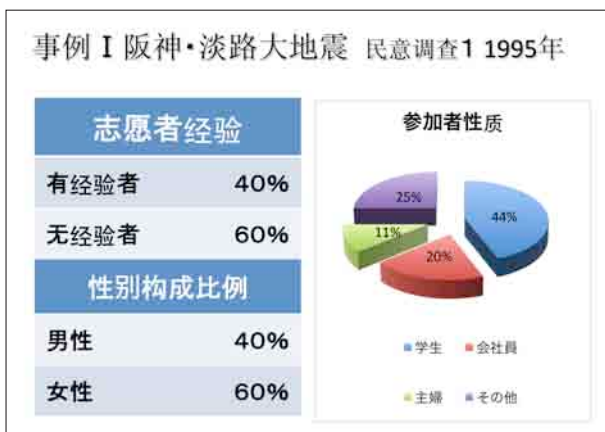


图2 意识调查1

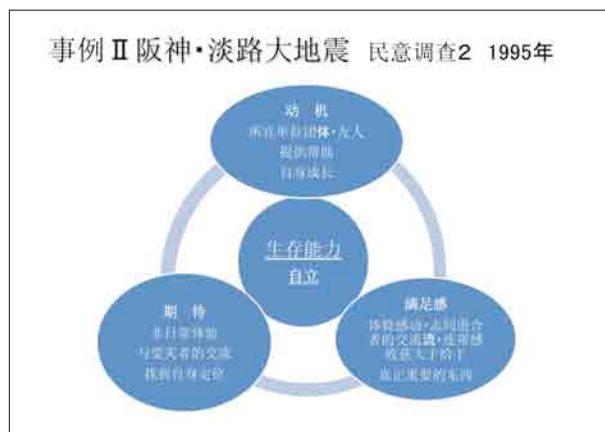


图3 意识调查2

## 为什么参加志愿活动（动机）

在参加动机上，最多的是受到自己所属团体、所在公司，或者朋友和熟人邀请。其次是因为自身就有想要帮助别人的强烈感情而自愿参加的。而最重要的是，没有想要通过这些活动而获得薪酬和金钱，是不求报酬，希望通过参与而改变自我的这种为了实现自我成长的动机。

那么，参加活动的期望又是什么呢？在就职于公司的参加者中，最多的是希望能做一份和职业、业务无关的，平常不会去做的工作。经常在坐办公室的人们，只是为了能够为他人作出贡献，最开始选择的都是脏、臭、危的 3K 工作。他们前往位于兵库县西宫市的脏、臭、危受灾区，来到不知道哪脚就会踩到钉子、或者不知什么时候房顶就会坍塌的危险的地方，就是为了亲眼看到受灾的现状。

第二个是希望能够和受灾人进行接触，通过这种接触来获得一个重新审视自身的机会。第三个是寻找自我。特别是不清楚自己生活方式的年轻人，希望能够借这个机会，和受灾人一同流汗，和志愿者活动的伙伴们一起露宿，并从中思考自己的生活方式，思考自己今后应该如何生活。

## 通过志愿者活动获得了什么（满足度）

通过实际参加活动，在哪些方面获得了满足，获得了什么样的令人感动的体验，觉得什么是值得的，以及充实感。志愿者的平均工作时间是 4 天 3 夜，短的人可能只有 3 天 2 夜，这段时间是否度过得非常充实。根据调查的结果显示，94% 的参加者都认为非常满足。同时，还和同样参加活动的人建立了强烈的伙伴意识。

还有就是“得到的要多于自己付出的”。起初只不过就是自己想要做点儿什么才去的，参加后，学到了很多事。有种收获大于付出的满足感。

然后是为别人付出自己的劳动，这点非常重要。“在发自内心的痛苦到来时，希望你能够帮助我”。听到受灾人发出的由衷的喜悦之声，这也是满足度的一部分。

最后，在生活的能力方面，年轻人、学生们的满足感还体现在感受到自己必须更加有力量，能够更坚实地用自己的双脚更自立地生活下去。

而在对灾害发生时奔赴灾区的志愿者的一片赞扬声中，也有对他们的批评：明明在公司里有自己的工作，为什么要请假去受灾地呢？学生应当在大学里好好学习，怎么可以放下学业去做什么志愿者呢？可是，我还是认为，能够在志愿者活动中明确自己的生活方式，找到生活的力量是一件非常有意义的事。

大家知道，现在日本正面临着日益严重的少子化问题，而市场经济也在发生重大变化。在泡沫经济崩溃后日本经济发生的变化中，年轻人的想法也在随之改变，以前人们认为只要有物质和金钱就能够使人获得幸福，但现在，物质

至上、金钱至上主义是行不通的，必须要寻找一种新的生活方式的这种想法，在年轻人之间逐渐扩散开来。而在思考什么是幸福时，也开始出现家人和朋友、地区的归属感、家人之间的亲情等词语。我认为这点非常重要。换句话说，年轻人开始通过这样的活动，自己去寻找什么是幸福了。就像不丹提出的“国民幸福指数（GNH）”一样，日本的青年人也开始自觉地通过志愿者活动来寻找一种追求幸福的生活方式了。

### 志愿者工作营中的评价

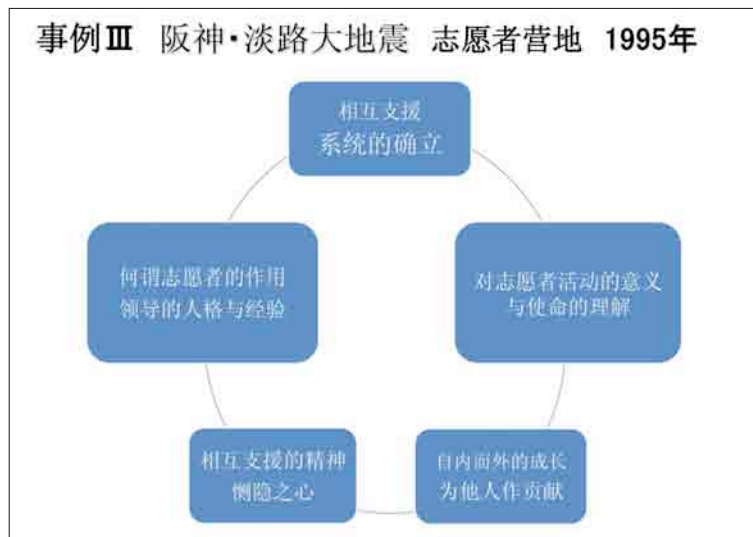
对阪神淡路大地震志愿者工作营的活动评价如下：

1. 在和受灾地居民的交流上，76%的男性表示满意，80%的女性表示满意。
2. 觉得过去“一味等待指示”“自我中心”的自己变得能够重新审视自己，并对他人的痛苦感同身受，能够谦虚地评价自己的成长。
3. 认为有必要对志愿者的意义和使命赋予简单易懂的解释。
4. 认为关于志愿者要做的工作的解释不充分。
5. 对志愿者工作的评价，和领导者的人格、资质、经验丰富与否有很大关系。
6. 参加者互相分享了各自的感悟，包括相互奉献的重要性和感激之情。
7. “必须要做些什么”的这种“不忍之心”是参加活动的强烈动机。
8. 促进相互援助精神的萌芽、确立一个相互援助系统的建立，并将它用到社会开发上去。

在其他的志愿者团体、全国社会福祉协议会、大学学生支援室、重建援助门户、NPO 经验和可信赖网站进行的调查也显示了相同的评价结果。

那么，我们来看一下图 4（事例 3）中志愿者工作营的情况。

图 4 志愿者工作营



## 志愿者的意义和使命

首先我们从“志愿者活动的意义和使命的理解”开始看吧。有一个这样的问题，那就是“我为什么要参加志愿者活动呢？”而对此，志愿者团体只说是“为了大家”，但是对志愿活动本身的意义，以及团体自身的任务，也就是目的和使命是什么并未做一个充分的说明。不是消极方面的意思。我想说的是，从刚才我们看的意识调查中可以看出，尽管人们觉得获得了一个很好的经验，并得到了生活的力量，但相反地，调查还显示我们对志愿活动的目的、意义是什么，以及这个集体有着什么样的使命的说明并不充分。

## 志愿者的基础知识和基本条件

而且，尽管实际上说要“帮助有困难的人”，但是作为志愿者，应该如何去帮助他们、应当怎么做，却并没有人来教这些东西。比如，在东日本大地震中，好多房屋都因为海啸而被淤泥淹没，家里的东西也全都被海水卷走了。有一个志愿者在淤泥中发现了一段木棍的残骸，以为是垃圾就要扔掉的时候，那家的人叫住他说：“请拿着它。这片小残片原本是一个擀面杖，我家爷爷每天都用它给我做乌冬面吃。”在别人认为是垃圾的东西里面，却藏着一个人们的记忆和生活的碎片。

媒体写道，堆积在三陆的废物是几十年份的垃圾。现在我们都称那是废物，但是对于受灾地的人们来说，那并不是什么废物，而是非常重要的宝物。他们说，去世的母亲，还有被海啸吞没的孩子们的灵魂就在家中，正埋葬在淤泥中。但是有的人不了解这种感情，而是一句“清除淤泥”就把那些淤泥全部清理一空。也许志愿者以为自己做了好事，但是对于受灾地的人们来说，却给他们带来了难过的回忆。

但是，居住在东北地区的人们，已经在过去的历史中习惯了去忍耐这样的事情。虽然他们不会主动说出口，但是实际去和那些人交谈的时候，还是会听到他们说：“那时候来帮忙的志愿者，把那张很重要的照片和垃圾一起丢掉了，现在想起来都觉得很可惜。”每次我前往受灾地，都会听到类似的话。

## 志愿者精神、领导能力、组织和框架、志愿者法

另一个重要的事情，就是在现场进行指挥和调度的调节员们的作用。通常都称他们为“负责人”或者“领导”，而这些调节员的人格和资质等，都对志愿活动有很大的影响。在后来的活动评价中，也了解到了这些在现场进行指挥，比如指挥“今天在这里进行作业。你们3个去那家。你们5个把那里冒出的泥浆用车子运到淤泥场去。”的负责人（调节员）的领导能力的重要性。

我认为，参加者能够明白相互奉献的重要性，并且对他人怀有感恩之心也是非常重要的一点。这就是必须要去做些什么的一种“不忍之心”。从去年到今年，我对100个中国人进行了一个关于“什么是志愿者”的调查。许多人都



是这样回答我的：“在儒家思想中有一个不忍之心，就是看到了有困难的人就必须去帮助他。我们有这样一种中国文化。”日本的年轻人们的心中，也有类似的想法。

在进入重建期后，为了维持活动的进行，还需要建立一个受灾人群和志愿者相互合作、相互帮助的系统。只有帮助他人的心情是不够的，还需要一个将之付诸实践并持续、维持下去的框架。此外，志愿活动需要确保资金来源，因此相应的募捐活动也是不可或缺的。而建立组织、推进活动和事业的进行、培养负责人的过程中，法律和制度的完善也必不可少。在日本，2008年12月就实施了新的公益法人制度，关于NPO法人、注册NPO法人，以及辅助的税收制度方面也进行了改革。为了国民能够按照自己的意志，为了社会为了他人做贡献，还对100年都没有修改过的民法进行了部分修改。中国也在2005年和2007年分别制定了2项志愿者法规。无论法律本身是好是坏，人们已经开始明确地认识到了它的必要性。

## ■日本的志愿者元年

### NPO法的制定会引起“市民社会”的改变吗？

上个世纪90年代，在日本被称为遗失了的10年。在那个时期，还发生了阪神淡路大地震和奥姆真理教的地铁沙林事件。日本开始注重反恐恐怖主义和应对大规模灾害也是在这个时期。

阪神淡路大地震发生后，警察、消防、自卫队立即开始了救援活动。同时，由地区自治会、企业、大学、青年会议所（JC）等自发组织起来的地区非营利组织（NPO）也参加到了救援活动中来。这类活动在市民中不断传播，参加的人也一天天增多，志愿者活动开始引起了人们的关注。尤其是，参加者的意识都很强，他们感觉到不能把一切都放手交给政府，而是要通过自己的力量，去帮助那些想要努力重新站起来的人们。这些人带上简单的干粮聚集到一起，加入到救援活动中。

自发参加志愿者活动的个人和团体，结成了相互协作的网络。一般情况下，那些非盈利团体之间是很难合作到一起去的。各自的主张都很强，还有很多人认为，自愿者活动是花的自己的钱，所以别人怎么想不管自己的事。但这样是行不通的，有共同的目的、向一个方向努力的人们应当相互合作，在阪神淡路大地震中，市民之间萌生了这样一种想法。

随着交通机构和道路的恢复，参加志愿者活动的人也变得多了起来。有骑着摩托车飞奔而来的年轻人们，只为了“看能帮上什么忙”，还有从近畿地区赶来帮忙的怀着善意的人们。看到这种和过去的“志愿兵”截然不同的“普通市民的身影”时，媒体发出了“志愿者元年到来了”的感叹。在日本，被称为

志愿者活动的历史，从文献记录上可以追溯到 400 年前的江户时代。当时农民和町人一齐出动，进行桥梁架设、护岸工程等“劳动奉献”，来建设村庄或城镇。然而，媒体在看到阪神淡路大地震中的志愿者活动后，为什么要把它称作“日本志愿者元年的到来”呢？

在 3 年后的 1998 年，日本制定了特定非营利活动促进法(NPO 法)。法律中，对非营利团体的组织和活动进行一定程度的担保，加强制度和框架的建立，促进国民参加志愿活动，以创造更高水平的“市民社会”。这就是 NPO 法，这部法律的制定距离现在还没有多久。

## ■ 中国的公民社会元年

神戸有一个灾害救援的 NPO 团体 CODE（神戸・NPO 海外灾害救援市民中心的简称。是在地震发生后立刻和当地的市民团体合作援助重建工作的民间团体），我也曾在那里做过志愿者工作。在 2008 年 5 月 12 日中国四川省大地震发生时，CODE 派出了工作人员调查灾后复兴情况。图 5（事例 4）是活动的内容和评价，属于可以信赖的日本民间团体报告。（2010 年）

CODE 从 2008 年的地震发生后，到这次大地震（2013/4/20）为止，一直在进行现场调查并从当地的合作伙伴中收集信息。并在 HP 上公布了和当地民间团体共同在四川省进行的活动中获得的信息。但是，现在（2013 年 5 月）还不允许民间团体，特别是外国媒体进行采访。前天，NHK 首次播放了一个 15 分钟长的有关四川省的重建情况的新闻。这应该是日本媒体首次对四川省地震重建情况进行详细报道。

图 5 CODE 报告



## 民间团体、志愿者的激增

CODE 报告书写道，2008 年四川大地震发生时，人们通过手机得知地震消息后，从中国各地奔赴了受灾现场。我想大家应该也很了解。第一年大概有 300~500 万人参加志愿活动，如果加上在后方进行支援的人数，可以达到 1000 万人。2008 年的四川大地震中有 1000 万人参加了志愿者活动。其中多数是被称为“80 后”的 20 世纪 80 年代出生的年轻人。

这些 80 后中，政府、共青团、企业派遣的志愿者占 40%。其他 60% 的都是靠手机联系在一起的自发参加的志愿者。再加上后方支援团，大概有 60% 的人都想要参加四川的志愿者活动。

这里有一些数据可以供大家参考。2008 年 8 月北京奥运会中动员的来自全国各地的志愿者协会的青年志愿者有 50 万人，2009 年建国 60 周年纪念活动约 100 万人，而在奥运会后举行的 2010 年上海万国博览会中，共有 7000 人来参加大会 700 个志愿者岗位的应招。可以说，人们对志愿者活动的关注和参与已经不仅仅限于灾害救援，参与人数也在年年增加，并不断渗透到市民的日常生活中。而且现在中国还不能充分保障结社自由，在这种情况下，志愿者活动则为“公民社会化”的到来提供了很大的帮助。而中国的媒体将它称为“中国公民社会元年的到来”。我曾经在北京奥运会前的 2007 年，在北京大学召开的志愿者周论坛上做过一个关于日本志愿者活动的报告。回忆起会后和学生们讨论到深夜的情景，再看看最近中国志愿者活动的情况，不由得有种恍如隔世的感觉。

## 政府主导民间承包型的重建事业

这样，在 2008 年四川大地震和北京奥运会后，在中国，参加暴雨造成的洪灾或国家大型活动的来自民间团体的志愿者人数急剧增加。人们称之为“公民社会元年”。然而，四川大地震的重建工作实际进展情况又如何呢？据称有许多来自民间团体的志愿者参与其中，但重建工作主要采取的还是中央政府主导的“对口支援”方式，并效仿过去的例子，由沿海比较富裕的省市分别拿出相当于各自 GDP1% 的援助资金，来对受灾情况比较严重的 18 个地区（城市）进行援助。当然，基础设施、建筑、道路、通信等较大的工程是有专业的施工单位或者 \_\_\_\_\_ 来进行施工的，但是地震发生时的紧急救援和重建工作，则是由青年志愿者协会、志愿者协会、学生（大学）、工人等当地的组织团体来组织进行的。同时，社会工作协会、慈善团体、基金会等也共同开始援助工作。还有民间救助服务中心和 NGO 防灾中心等网上组织也在民间建立起来，并陆续扩大发挥其功能。

但是在进入重建期后，援助团体之间的网络、信息交流、交流机会等变得越来越少，据 4 年后神户大学学生援助室的现场调查显示，许多志愿者团体和民间团体都已经解散，其后仍持续援助重建和发展工作的民间团体屈指可数。

## 重建发展的不均衡、差距和不平等感

造成这样情况的原因如下：

首先，重建工作是由政府主导进行的，其中几乎没有志愿团体出场的余地。

举个例子，山东省的对口支援项目时“新北川重建项目”，包括对道路、桥梁、平地等基础设施和住宅、宾馆等公共设施的重建在内，共有 197 项工作，一共投入了 69 亿人民币（约 884 亿日元）的巨额援助金。其主要的援助对象是民间企业，计划优先修复城市的医院、学校、政府等建筑，其次才是农村的重建。

第二点，受灾地区形成差距的一大原因，比如就是对口支援项目是由援助方的省市分别计划的，并在实施中相互竞争，从而导致了受灾地区没有整体的调节和统一。援助额度也因地而异，每年收入较多的省市就比较多，财政收入少的就比较少。平均到每个受灾人手中的援助额上，广东省所援助的地区和黑龙江省的援助地区之间就有 40 倍的差距，差距和不平等也就由此而生了。

第三点就是农村地区的信息传达和政令的制定都比较滞后。而村庄的传统、习惯、规矩等也成为了重建工作的障碍。但是我想，对于这次发生的多年来罕见的大规模灾害中，人们所说的“政府主导使得民间没有插手的余地”的指责是不正确的。反而是没有一个基本的条件和环境能保证“民间的插手”——志愿者活动在社会中可以顺利实施。

在以往的法律，以及行政机构和功能、制度、人才资源等条件下，在人们参与那些反应居民声音、由居民参加的重建援助工作和面向可持续发展的活动时，是受到一些限制的。因此，不用说，我们必须修改法律，并实施机构、财政、信息、人事方面的改革。

## 和海外民间团体间的交流和防灾方面的共同学习

同时，2008 年四川大地震重建工作中，还进行了和海外民间团体的交流以及防灾方面的共同学习。而媒体的力量和志愿者的力量被重新审视，人们开始关注在信息社会中，志愿者所发挥的作用，以及如何尽快获得信息来进行应对等问题。这里介绍几个事例。

1 人们在和自然灾害长时间斗争过程中积累了许多知识和传统技术，而我们有机会相互学习应用了这些智慧和技术的重建计划。

例如，在绵阳市安县和绵竹市遵道镇以及光明村里，流传着一种传统技艺，能使得 100 年以上的木质建筑在地震中免于倒塌，而现在金泽大学正和中国开展对这种工艺的共同研究。

2 1998 年长江特大洪水后，开始了一系列仿照国家项目“退耕还林”的环境保护和保护自然的植树造林运动。

3 开展了青少年一起流汗劳动的志愿者工作营，还有有助于加深相互理解的国际工作营。

比如，由中华基督教青年会（YMCA）主办的、多国青少年参加的少年足球比赛、艺术文化交流、青年论坛等活动，这些活动早在地震发生的几年前就开始实施了。

4 通过超越国家和民族的援助活动，我相信了即使语言不相通，只要“心”（情绪）传达到了，就能变成受灾人们的心灵支柱。（来自神户大学学生援助室的学生参加者的报告）

还有一个不是灾后重建相关的例子，开发 NPO 法人“OISUKA”曾在内蒙古进行了防治沙漠化和经济作物（中草药药等）种植两项造林运动。而在今年夏天来自名古屋的 50 位志愿者又使得中断多年的植树造林活动重新开展起来，从而这一和民间团体共同进行的开发活动也得以持续下去。

### 社交媒体和志愿者力量

微博和短信的作用、功能在不断扩大。同时，对于媒体信息的可信度和信息管理方面政府的对策，来自于国内外的关注程度也越来越高。而灾害发生时，志愿者的参与和作用，也将伴随着公民社会的发展，而越来越必不可少吧。

这次（2013 年 4 月 20 日）的四川省地震中，中国政府对未经允许的个人志愿者和没有特殊技能的志愿者进入受灾地区进行了管制。的确，交通堵塞的原因，以及志愿者无法进行管理的这种中国特有的情况是可以理解的，但是我们不能够无视那些看到地震灾害的惨状而“想要为受灾群众做些什么”的人心中，那份朴素的“想要做些什么”的心情。

有许多的志愿者，都通过参加救援活动，陪伴在受灾群众身边，而使自己得到改变，并学到了和他人共同生存的重要性。志愿者会动也是作为培养社会接班人的青年人的好机会。

### “80 后”的人力资源

2008 年的四川大地震发生后，在 1 年内共有 300~500 万人奔赴受灾地区。而据说，在受灾地外的后方参加援助活动的志愿者有 1 千万人。其中大多数都是被称为 80 后的，上个世纪 80 年代出生的人们。

现在中国大概有 2 亿人属于 80 后，他们也是肩负公民社会的潜在人才资源。而在这之前，社会评价他们“不知道吃苦，任性”，可以说评价并不高。但是，当人们看到大地震发生后，在受灾地区尽全力工作的 80 后们时，社会对他们的评价也随之发生了 180° 的大转变。今后的课题就是，对这 300 万个 80 后参与志愿者活动的事例进行分析和评价，并研究该如何把他们作为今后地区社会开发的人才资源利用起来。

### 四川省灾害医疗活动 SGRA 日中合作伙伴关系 2008 年

这里我们来看一下，四川省实施的具体医疗活动吧。先请看 SGRA 进行的



图 6 四川省灾害医疗活动



2008 年度医疗活动 图 6（事例 6）。在 2008 年四川大地震发生时，SGRA 立刻召集在东京的 40 个中国留学生作为志愿者，开始进行“灾害护理指南”和医疗相关的日本资料的翻译工作。通过和在日留学中的笹川日中医学奖学金学生进行联系，“灾害护理指南”的中文版以十分惊人的速度完成了。

此外，日本、美国、欧洲都向中国派遣了国际救援队。在救援队撤退后，由日本国际紧急医疗小队和中国灾害医疗小队共同参与的，新中国成立后首个中日合作灾害医疗活动，在华西医院的石康院长的指挥下开始工作了。我想，这件事将会名留史册。

对这次紧急救援活动，相关人士给予了很高的评价：“体现了中日友好精神，并使中日两国在医疗领域的合作取得了一个前所未有的成效。”当时温家宝前总理和共产党的领导人们，还提出借此机会，让日本的医疗队和中国医疗活动一同开始专业医疗看护方面的共同研究。尽管两国间现在还有各种问题，但仍有越来越多的人希望通过这场灾害，日本和中国能够开始灾害医疗方面的共同研究。

下面放一段 DVD。这 5 分钟的视频里，包含了阪神淡路大地震、东日本大地震、四川大地震中志愿者活动的镜头。这是日本和中国两国 YMCA 共同进行的项目。让我们看看东日本大地震时，都进行了哪些活动吧。

——DVD 短片“日本 YMCA3・11 记录”放映——（5 分 30 秒）

## ■ 东日本大地震重建时期的进程（图 7）

### 将新共同体的建设作为目标

从上个世纪 60 年代，日本农村人口占总人口的比例由 80% 减少到 30% 后，传统的“关系”、“支配体制”、“共产主义”组成的“自治会・居民会”开始向

图 7 通往复兴的道路



提倡“人与人之间的关系”“快乐的伙伴”的“共同体”过渡，而在海啸灾害后的重建过程中，这种形式（文化）也将发生更大的改变。

#### 事例

- 吸取过去灾害的教训，提高避难能力，进行了避難道路的修整、老人院高处搬迁等工作（过去发生的灾害：1896年6月15日发生的明治三陆地震，震级8.2级）
- 尝试通过政府和市民共同计划，来推行支援地区自立的公共事业。
- 市民和NPO共同努力缩小市议会的功能。将行政业务的一部分交给企业，并动员市民和NPO伙伴参与。但是，人们对居民才是行政的主体的认识尚不充分，受此影响，这方面的尝试一直没有进展。

#### 生存、生命、对自然的敬畏

经常听到的重建期的关键词是“自助、互助、他助”。这并不是援助方和被援助方之间关系的写照，而是面向同一个目标参加重建活动的、共同劳动者的标识。这里我想向大家介绍一下，我曾经在宫古市和石卷市参加学生志愿者工作营时，听到了几句关于重建活动的令人印象深刻的话。

• 野依良治（诺贝尔化学奖获得者）、山折哲雄（哲学家）、濑户内寂听（宗教家）在受灾现场讲述了人怀有对神（佛）和大自然敬畏之心的重要性。

• 直面“生命”，最重要的就是和家人的联系，还有就是意识到相互支持着的邻居的重要性，“远亲不如近邻”，强烈地感受到要珍惜这种关系。

• 面对大自然生存至今的东北人的自然观。他们说，即使海啸夺走了自己的家人、房屋和财产，“我们一直受惠于大海，因此不能怨恨大海。”（来自于自然的力量之巨大）

• 在运动员宣言中，是这样说的：“无论是谁，要接受没有答案的悲伤，都是一件非常痛苦和难过的事。但是只要整个日本抱成一团，一起迈过那些苦

难，我相信，最终等着我们的，一定是更大的幸福。所以，我们想向整个日本传递感动、勇气和笑容。”（2013年3月21日 高中棒球选拔赛开幕式中，石卷工阿部主将）

- 我的心中涌起了一种“想为谁做些什么”的责任感。
- 帮助人自立的援助。陪伴在每个人身边的援助。长期的、持续性的“心灵上的帮助”这一漫长的路途，就从现在开始。
- 你能面对那些因海啸而失去了生存的地方的人们吗？当你对那些母亲在自己眼前被海啸夺去了生命的孩子们说，“妈妈会一直守护你的”的时候，所得到的却只有一片沉默。今后，要缓解这些人们的悲伤情绪的困难，仍将持续。

### 年轻人也有关于共生社会 / 地球市民社会的想法

2011年4月15日，NHK特别讲义“大地震后的世界将如何生存”中，从东京、北京、纽约三地同时播送了这些前所未有的大灾害的视频。年轻人们在看到这个视频后，开始了认真的讨论。

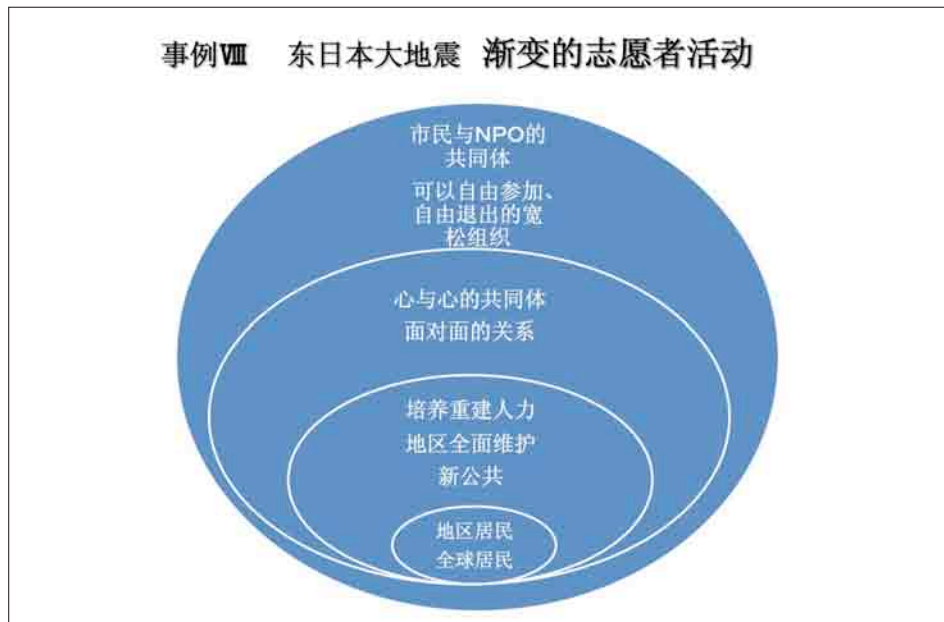
- 海啸和核电事故引发的是超越了“同情”的“感同身受”和“一体感”，并加深了这些感情。并且，会将日本人所做出的行为和成就作为自己的骄傲。
- 迈克尔·桑德尔教授（哈佛大学 / 共同体主义论）评论道，从中可以看出新一代人实现地球市民社会（global civil society）共同体化的前兆。

### 志愿者活动的变化

下面，图8（事例8）表示的，是东日本大地震后，志愿者活动是如何不断变化的。我来对图做一下补充说明。

- 在珍惜个人生活的同时，还愿意为作为地球的一份子来发挥自己的作用而投入自己的时间。
- “工作·生活平衡”的思维不断扩大，也有的人希望能够将志愿者活动作为“工作和生活的和谐”的一部分。
- 本来，“公共事业”并不属于行政事业。但是由于日本由行政主导的公共事业已经有多年的历史，因此一般人们都会认为，公共事业就是行政所做的事业的一部分。
- 1980年前后，由居民参加型的改善、管理事业开始盛行。尽管居民们的意识发生了改变，但是行政机构的意识还是依然如故。但是，就算是政府进行的公共事业，如果没有获得当地居民的首肯，那么就实行不下去，这样的倾向越来越明显。比如灾害废物的处理、核电放射能污染物、废弃燃料的保管等问题在各地纷纷出现。
- “公”“共”“私”是基本的概念。志愿者活动中，个人的自发性是基础。“公”（public）是众多的我（private）聚集在一起形成的，因此如果把“公”这个字拆开看，下面的部分表示“private”，而上面的部分则表示开放、召开。因此，

图 8 变化的志愿者活动



“公共”就是多个“我”聚集在一起开展的意思。

• 在赤坂宪雄和鹭田清一的谈话中，关于近几年的志愿者活动这样说道，“这种出入自由的松散的团体、不讲义务自发行动的团体，起到填补空隙的网络的作用，并为提升市民力量提供了一个机会。”

• 有一对定期从东京来到 YMCA 宫古志愿者中心的夫妻。他们说，通过在这里的志愿者活动，发现了“心灵的共同体（心灵的故乡）”，在和受灾人们共同流汗劳作的过程中，建立了信赖关系，获得了一种近似家人的体验。

• 来自东京的学生志愿者说：“通过这种面对面的关系，获得了安心感，并在相互之间培养出信赖、共同感和羁绊。”

• 媒体报道称：“在受到毁灭性打击的自治体里，志愿者（团体）开始在中长期内作为伙伴参与到共同体建设中。”

• 其他动向方面，在“培养担负重建重任的人才”上，设置了静岡大学的放在 My Star 称号制度、东北福祉大学的灾害管理课程、石卷专修大学（复兴学）等实习课程。

• “地域整体护理”方面，开始建设一个能够在保健・医疗（包括心理护理）护理・福利以及住房等方面都能提供全面且持续的服务的新的地区体制，例如，东京扶轮社援助实施的“援助新生命”基础护理活动中的“生育援助中心”就是一个例子。

### 年轻人价值观的变化和表面化

最后，不只是参加了东日本大地震救援的志愿者，日本的年轻人之间也发生了价值观的变化，下面我们就来谈谈这点。

第一点，与人交往，尤其是和家人的牵绊，以及人与人相互支持中获得的幸福感——有人将它们称作“爱和希望”，也有人感到这种感觉加深了。

第二点，大概可以称作生死观和共生观念吧，可以看到年轻人在这方面的意识正在发生着变化，他们开始认真考虑生命（生死观）和活着（共生观念），并开始探索或开始思考“物质金钱至上主义”之外的幸福的生活方式是什么。

第三点，是从 NHK 播放的哈佛大学迈克尔·桑德尔教授的节目中引用的一段。这是北京、纽约、东京的三方直播，里面采访了看到异文化交流的震灾视频的年轻人和学生，听取他们的意见，并由迈克尔·桑德尔教授进行了总结。他评论道，“异文化交流的经历，使人们超越了过去战争带来的负面历史、超越了国界，唤起一种超出同情（sympathy）的感同身受（empathy）和同他人的一体感（unity），为创造一个没有战争和暴力的和平的世界送上一阵顺风。”

## ■ 中国志愿者活动的制度和课题

我们来快速看一下中国志愿者活动制度（图 9）的概要。

正如大家所知道的那样，在现行的公共制度方面，已经在 2005 年制定了利用国内外网络进行多种多样的项目活动的青年志愿者管理办法以及社区志愿者管理办法。这里的社区意思，大概相当于 community 吧。而 2007 年，在中国的 8 省 10 市 11 自治区制定了志愿者管理条例。这样，推行志愿者活动的基本框架就成型了。

而中国志愿者活动面临的课题，也能从中看出二一（图 10 & 图 11）

这是在轻井泽召开的 SGRA 论坛中，早稻田大学社会学科综合学术院的刘杰老师做的一次题为《摸索中的中国式市民社会》的报告。报告中刘老师的看法是，尽管“公民社会必须从国家和政府中独立出来的，中国已经进入了公民社会”的北京大学公民社会研究中心所做的论断，和“就结社自由尚未得到保证的目前的情况来看，仍任重道远”的清华大学公共管理学院 NGO 研究所的见解，在对“公民社会”的定义和释义上有所不同，但是两者之间有一个共通点，就是从单位社会到公民社会的形成方面，关于其构成主体是 NGO 组织和 NPO 组织的判断是一致的。同时，拥有自由独立的意志，作为地区社会的一员自主地行使权力并担负责任，这样的活动可以从 80 后的行动中找出来。从中，我们可以了解到备受期待的中国公民社会的现状。

公民社会的组织方面，人们期待独立于政府的自由自主的公民社会组织能够进一步扩大。同时，还指出，将单位社会向农民自治体，也就是农村的居民共同体方面扩展，推进民主化，是为建设未来我们所期待的公民社会所面临的组织方面的课题。

我支持 1990 年国际志愿者宣言中所说的“不论民族、文化、宗教、年龄、性别，甚至身体上的、社会上的、经济上的情况，一切人都能自由地聚集到一起，开展志愿者活动的权利。应当认可的是，人们为了他人、为了地区社会，不期



图9 活动的制度

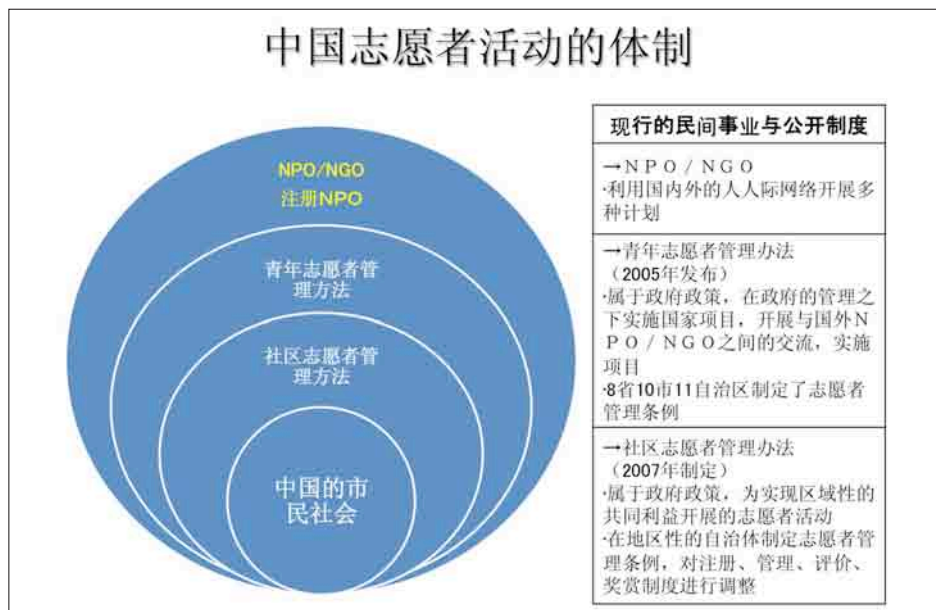


图10 活动的课题

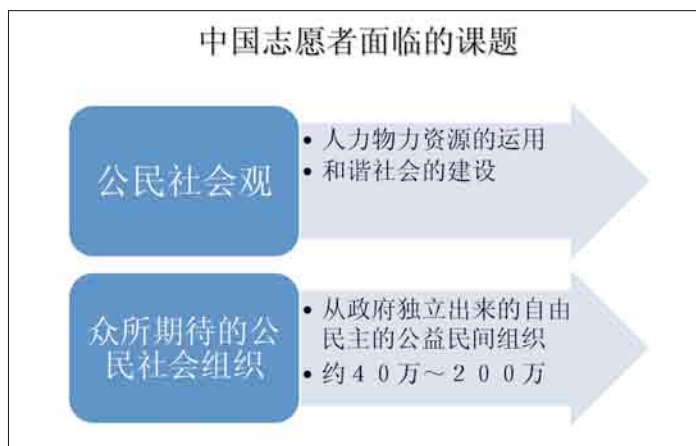


图11 中国的志愿者活动事例

**事例：“社区青年志愿队”不是志愿者团体**

1) 2012年,北京市中心因暴雨而导致房屋浸水,造成1人死亡。当想要参与救援的一般市民来到现场时,却被穿着“社区青年志愿队”制服的人们拒绝在外。

2) 共同体和志愿者活动。随着“公民社会”的更新,“社区青年志愿队”今后将何去何从呢?现在,已经开始了学习上海和香港YMCA志愿者活动的教育和活动。

待金钱上的回报,而作为个人或集体来自由地投入自己的时间、能力以及能量的权利。”我非常期待这一天的到来。

时间已经接近尾声了。我在去年9月曾经来到过这里一次。当时正处在反日游行正盛的时期,当时我对今西淳子女士说:“正是因为在这个时候才应该召开论坛!”结果她被我说:“这种时候,才要去啊。”而来到了北京。但是那一年的论坛没能成行,尽管如此,我们还是有了一次和原日本留学生进行亲切交往和恳谈的机会。并且,还面向北京YMCA的志愿者,以及原米山奖

学金获得者的 100 名学生，关于“你的志愿者观是什么？”做了一个调查（图 12）。

多数人都回答道，志愿者活动“要做什么不知道”。也有人问我说，“志愿者不就是廉价的劳动力吗？”还有人说，志愿者精神是儒家的教诲，在我们的文化中已经有了。

有人说，志愿者活动“想参加，但是没有钱所以无法参加”。而在对有时间参加志愿者活动的退休人员进行的采访中得知，他们有很多人都“在寻找自己为了自己的社会，为了孩子们和下一代的年轻人能够做些什么”。通过调查可以说，人们对于“自发行为”“无偿活动”“福利提升”的理解仍不到位。

那么关于今后的课题，有专业人士提出了一些问题，比如，志愿者的教育的训练由谁来做？培养志愿者的环境和不受监视的网络是否能够建成？在中国能否建立一个民间的志愿者认证制度？有人提议道，如果要真正推进志愿者活动的开展，那么就必须要从社会机制、制度化，以及相关的法律法规的制定和财政上的措施等方面进行完善。

最后的结尾有些仓促，不过还是将“志愿者活动论”这一现在我们所面临的课题，把我的想法介绍给大家。非常感谢大家（鼓掌）。

图 12 中国志愿者 100 人问答

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>· 志愿者精神在儒家思想中也有体现，通过学校教育，这种精神内在地存在于中国人的心中。</li> <li>· 在理论上，能够理解志愿者的报酬是基于一种实际费用主义，而不劳动的等价报酬。</li> <li>· 即使有想要参加志愿者的意思，但由于生活不宽裕没办法参加。</li> <li>*2012 年人均名义 GDP 日本 5963 美元，中国 8227 美元（2013/05）</li> <li>· 老年人和退休人员有做志愿者活动的时间。特别是老年人，近几年对志愿者感兴趣，希望参加志愿者活动的人数一直在增加。</li> <li>· 对后期老龄人口的生活助手志愿者的需求每年都在增加，老老看护的现状和极限渐渐为人们所看到。</li> <li>· 志愿者是什么？</li> <li>*2012 年，北京市中心因暴雨而导致房屋浸水，造成 1 人死亡。当想要参与救援的一般市民来到现场时，却被穿着“社区青年志愿队”制服的人们拒绝在外。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>· 志愿者不就是廉价的劳动力吗？</li> <li>· 志愿者要做什么？</li> <li>* 介绍了上海·香港 YMCA 的地区福利中心的活动。</li> <li>· 志愿者的自发行为和无偿活动？</li> <li>· 志愿者和专家的区别是？二者之间有没有作用的区分、学历的有无、身份的差别？</li> <li>· 志愿者的教育训练是怎么做的？</li> <li>· 培训志愿者的人员是如何选出来的？需要何种资格和权限？</li> <li>· 志愿者的社会认证制度的必要性。</li> <li>· 志愿者活动环境的完善和网络的扩大。</li> <li>· 必须完善培养、保护、推进志愿者活动的相关法令。</li> <li>· 关于学校教育和志愿者活动、指导纲要、表彰和认证制度的讨论。</li> </ul> |
|---|---|

# 提问和回答环节



**主持** 希望有问题的听众，能够踊跃发言。这里向大家介绍晚了，今天，扶轮社米山奖学会的来宾也来到了现场，如果方便的话，我们希望能听一下各位的想法。

**胡** 今天听了宫崎先生的讲演，我学到了很多。其实，我也在今年2月份应招了从5月18日开始召开的北京中国国际园林技术大会志愿者工作，并将在6月份开始工作。而对中国志愿者的发展历史和志愿者活动的推进以及概念都有了一个更深的理解。

**主持** 非常感谢。今天到场的学生有很多啊，不知道大家如何想的呢？我想，志愿者活动的经历在平常是很难得的。学生的生活都很忙碌，也没有走到社会中，进行各种体验的机会。

我是从2008年开始进入日语系做老师的。当时我一度对什么是老师产生了困惑。但是，现在已经是我做老师的第三年了，有一个当时我教过的学生对我说，老师，因为遇见了您，我才开始想要学习的。这句话让我感到，作为教师的意义就正在这里。那之前，我一直在想该如何提高自己作为老师的表演和技术水平，但是从那天开始，我明白了作为一个教师的真谛，并不是让学生去学习，而是让他们能够变得自立、自发地学习。

我想，这和今天宫崎先生的讲演是有共通之处的。自己想做一件事，才是做成一件事的最大的原动力。我的发言可能有点儿长了，那么现在就请去年全国演讲大赛中荣获1等奖的王同学来发表一下她的意见吧！

**王** 今年，在四川省发生了大地震，当时有许多中国大学生都想要去那里作为志愿者工作。但是当地人却认为他们是在帮倒忙。我作为一个朝气蓬勃的大学生，也想参加许多志愿者活动。那么，这个时候，要真的为当地人帮忙而不是帮倒忙，应该注意哪些问题呢？

宮崎

你的問題非常好。在此前的四川大地震中，由於大量志願者湧向地震中損壞的道路上，結果導致了救援活動以及運送救援物資這一非常重要的政府工作無法順利進行。這裡，必須要明確災害發生時的需求，什麼才是最必要的。這時候就需要一個能夠準確的抓住對方的需求的網絡，而如果能通過手機形成一個網絡聯繫，那麼就能夠獲得有關他們迫在眉睫的需求的信息了。對這些需求做出正確的應對還是非常重要的。這在阪神淡路的時候是一樣的，在東日本大地震的時候也是一樣的。

但是在地震發生後，軍隊立刻就介入其中，警察和消防也開始工作，政府的救援活動也開展起來，而人們的需求也將隨之發生改變。所以，災害救援志願者活動中，最重要的是準確地把握對方現在想要什麼，現在需要什麼，並對這種需求是否能夠得到滿足做判斷。如果自己不能幫他們的話，就要把這種需求的存在想行政窗口啊、福利會啊、地區志願者協會等轉達。志願者必須有這樣的一個網絡。

在阪神淡路大地震時，曾有过這樣一件事。有人去世時最難辦的是棺材。從房屋下面挖出來的屍體，要運到火葬場去的時候，沒有裝屍體的棺材。這個需求立刻作為信息被發出去，接到了這些信息的幾個團體和個人向壽裝店聯繫，儘可能帶一些棺材過去。但是屍體已經被送到了火葬場，於是就問現在需要什麼呢？回答需要香火。沒有能讓屍體的臭味不散到外面去的香火。可以看出，需求也是因情況不同而變化的。

而從長遠的角度考慮重建工作時，就必須明確，什麼樣的需求才是讓人實現真正的自立和要真正幫到他們。災害發生時，必須和負責信息的聯絡和調整地方自治體負責人、全社協（社會福利法下各個都道府縣的社會福利協議會），以及地區自治會、商店、企業和學校・醫療機構、地區 NPO、市民運動團體進行充分的意見交流，再開展行動。自作主張才是最大的倒忙。“好心幫倒忙”就是說的這個。

主持

中國也有相似的说法啊。初衷是非常好的，但是結果卻無法滿足對方的需求，這樣的事情時有發生。今後在開展志願者活動前，必須要明確對方的需求。

Q1

宮崎先生，您長時間從事志願者活動，有沒有過遇到過自己的力量無法解決的問題的時候呢？那個時候您是怎麼辦的？

宮崎

這個問題很難啊。有很多。這和剛才的需求的問題是一起的，我會擅自斷定，這個人最需要我幫助的是這裡。並把這件事當做我作為一個志願者的使命。可能我就是有這樣的毛病吧，所以有人對我說，你把自己的想法強加給他人是一定會失敗的。我想這是最困難的地方。

然後，我從以往各種經歷中總結出了這幾個經驗，首先是“自己的生命要自己來保護”，還有了解“自己能夠做什麼”，並能站在弱者的角度考慮問題，明確職責，制定計劃並實施，以及合作勞動體制的建立吧。大學裡面的話，可以去學校的志願者協會，听听那里的學生們的意見。听取大家的意見，也能夠為他們的參加提供一個動機。不只是嘴上說說，你能去付諸實踐嗎？你所说的意見是這樣的，但是你是不是能夠和我們一起來實施呢？人們相互確認對方的意志，而志願者活動就是從這裡開始的。這就是參與型的決策制定過程，也就是他人和自己形成一個圈子，在里面，有相同想法和意志的人們進行對話，來共同商議如何解決困難和課題。



灾害志愿者活动中，最困难的就是“心理护理”了。它耗费的时间也最长。阪神淡路大地震已经过去了18年了，而在现在进行的志愿者活动中，受灾人最需要的就是“心理护理”。他们希望能有人听自己倾诉苦恼。有这样一种情况，就是在某天，当时的情景会在脑内重现。曾经在地震中被压在突然倒塌的房子里的人，在发生一些事的时候，就会遭遇这种幻觉重现，并为之而苦恼。这时候，必须有人听他倾诉。PTSD（创伤后应激障碍）、灾后的心理护理应如何做，如果没有专业的学习经历和知识，没有经验，那么就很难做好。根据我的经验，首先，要陪伴在受灾人的身边，聆听他的倾诉（倾听），缓解他的痛苦，不是去说“加油！”，而是在背后支持他，使他能够自己解决这些问题。

就像刚才你所问的那样，我的苦恼就是没办法自己做到这样的事情。当我在“心理护理”方面感到自己力量有限时，就会去求助专业的志愿者。而要从平时就建立这样的网络。我觉得这也是非常重要的。不要觉得自己什么都能做，如果这样想了，那么就会在什么地方出错。尽可能收集更多的知识和信息，并让更多的人参与进来，这才是我能够做到的事。志愿者必须要有这样的专业性和责任感，以及一腔热忱。

主持

还有其他人提问吗？

Q2

我还没参加过志愿者活动。我想，如果我到了受灾现场，看到那里的悲惨景象，看到死去的人的尸体，可能会觉得非常不安和害怕。要如何才能克服这种情绪，全力投入到志愿者活动中去呢？

宫崎

确实有这样的感觉啊。在东日本大地震的时候，前往受灾现场的还有诺贝尔化学奖的获得者野依良治先生。他在看到受灾地的惨状后，回答记者的提问时说：“不相信自然的力量的人，是不能够成为科学家的。这是技术的失败，不曾预料这并不能够成为人们的借口。技术是人创造的，有风险和利益两方面的双刃剑。”他还说，“觉得自己还活着非常抱歉”他的这段讲话给我留下了很深刻的印象。还有就是濑户内寂听先生，在他和失去了母亲的孩子们，还有自己的兄弟在眼前被海啸吞没的人们谈话时，有一个女中学生站起来问：“先生，在战争中死去，和在海啸中死去有什么区别呢？”濑户内先生当时对这个女孩子提出的真实的问题感到十分惊讶。当场的记者们，还有宗教家们，都不知道应该如何是好了。

那么，应该怎么办呢？现在我还保持2个月一次的频率造访受灾地区。时间已经过去了2年，我现在还会去那里问问他们，今天发生了什么事了吗？而到了现在，那些老奶奶们才能够开口说话，说自己经历了什么而感到非常地难过。“孙儿去世后，就真的只剩我一个人了。我的孙子被海啸夺走了。我完全不知道，失去孙子后，自己要如何活下去。”经过了两年，她才终于说出这番话来。

我去做灾后志愿者的时候，曾经和一个在自己面前因为海啸而失去了母亲的高中生谈话，当时他一言不发沉默着。那些曾经亲眼目睹自己的亲人在海啸中丧生的人们，现在还无法向别人讲述这段经历。我想，在知道了这样的人的存在的同时，也就明白了“自己能够做什么”和“自己不应该做什么”。

“今天不需要清除淤泥，也没有搬东西的工作，那就一起去给前面的田地除草吧！”我想，和他们一起劳作是一个很好的答案。做救灾志愿者的时候，自己能



够做这个，不能做这个的这种限制是很难有的。

职员这也不仅限于救灾。基本上，必须了解对方“希望我做什么”、“想对我说什么”，要有这样的意识。而磨练这方面的感知能力，是志愿者的第一步。我想这里是志愿者的出发点。

主持

（主持）因为时间已经差不多了，那么提问环节就到此结束。今天，听了宫崎老师的讲演，我想到了一件事情。现在这个时代中，人们的脑海里能够想到如何让身体满足，却仍然没有找到一个能让心灵和灵魂满足的方法。而现在，我想最好的办法也许就是去做一回志愿者。好，这里再次向宫崎老师致以掌声的谢意。（鼓掌）

最后，请 SGRA 的代表今西淳子女士做闭幕讲话。

## 闭幕讲话

今西

各位来宾，非常感谢大家来到第七届 SGRA 论坛的现场。原定于去年 9 月进行的本届论坛，由于社会形势的恶化而不得不延期至今，我感到非常遗憾。但今天，论坛最终能够得以召开，我又感到非常的欣喜。

宫崎先生刚才提到了一个报告。就是请一些年轻的学者老师，让他们就亚洲各国的市民社会的情况做一个讨论，然后将它们总结成了这样一个报告。这个是第 52 号。日语版的可以在网上下载阅读。搜索“SGRA”或者“関口グローバル研究会”就可以找到。或者从“渥美财团”搜索“SGRA”也可以找到。其实也在做中文的翻译，我们想是不是也出一个中文版的报告。至少在网上能够出来，所以还请大家再等一等。

有组织的志愿者团体，NPO 或者 NGO 团体，现在在日本已经形成了一种热潮。人们想为这个社会做些什么的心情越来越强烈。不仅仅在日本，在欧美，年轻人在为社会做更多贡献方面的热忱已经要高于对商务的关注，而在贡献上，也不是单纯的捐款，而是向一个资金能够全部回转起来的社交式商务方向发展。我想，在中国的各位，是不是也对此感兴趣呢。在网上查一下，就能获得很多这方面的信息，还希望大家能够以此为契机，关注世界上的各种动向，来开展自己的活动。志愿者工作的话，那些小事可以做许许多多，但是逐渐就需要面临如何去组织，如何去获得资金的这些问题，从而进入志愿者逐渐组织化的过程中去。

如果从国家的角度来看，这些事都是非常小的事。但是当一个个小型的组织逐渐变得多起来时，我想，也许整个社会就会随之发生变化。

这里再次感谢莅临本次 SGRA 论坛的来自国际交流基金的吉川所长、来自扶轮社米山奖学会中国学友会的各位来宾，还有负责接待的各位志愿者同学们，以及我们出色的同传，谢谢你们！

最后，要感谢宋刚老师为此次论坛的召开做出的努力！（鼓掌）

## 后记

第七届中国论坛

# “Volunteer · 志愿者论” 报告

宋 刚

北京外国语大学日语系讲师

2013年5月22日第七届中国论坛终于在北京外国语大学日本学研究中心三层多功能厅拉开了帷幕。

之所以使用“终于”这一词，说来话长。原本计划于去年9月召开的这届论坛被迫延迟到了今天，梦想终于实现，心中不免五味杂陈、百感交集。去年未能召开的理由已经不必多说了。由于召开时间突然定在5月，因此本届论坛的特点之一就是准备时间之短。宣传海报的印刷与张贴工作在开幕前一周，完成讲稿目录是在开幕前三天，横幅制作是在开幕前两天，问卷调查的制作是在开幕当天早上，一切都在超速运转下展开。即便如此，论坛完美闭幕。作为筹备者之一，不仅油然而生出一种满足感，这种满足感或许是以往历届之中最大的。

个人感想在此就不赘言了，进入正题。

我们有幸邀请到了东京YMCA同盟的宫崎幸雄主事担任本届论坛的主题报告人。报告的题目是“志愿者概论”。其问题目改变了数次，本报告中就依照宣传海报上的说法。提起YMCA，或许会有人想起西城秀树的名作「YOUNG MAN (Y.M.C.A.)」，但是宫崎先生实际上是日本基督教青年(Young Men's Christian Association)同盟的名誉主事。不过，看到宫崎先生的矫健步伐，可能西城秀树也要自叹不如了吧。

讲演一开始，宫崎先生就将自己最早在越南战争时的志愿者经历娓娓道来。养鸡、养猪等趣闻让在场的听众们听得津津有味。当话题转入近几年的灾害救援活动和志愿者活动后，使人备感亲切。阪神大地震、汶川大地震、东日本大地震之际，竟然有那么多志愿者参与到救援活动之中，不仅让人肃然起敬。另一方面，宫崎先生还谈到了在汶川大地震之后，SGRA组织了心理卫生方面的医疗手册翻译的事例，我作为翻译者的一员，实在是备感荣幸。

日本自阪神大地震，中国自汶川大地震以来，志愿者精神在两国开始扎根发芽，有越来越多的青年人参与到志愿者的活动之中。在这一大背景之中，宫崎先生注意到了年轻人意识的变化。阪神大地震之后，参加志愿者活动的年轻人们期待的是一种非日常性的经历，他们渴望与受灾者进行交流，同时渴望找到自己在社会上的正确定位。与此相对的是，东日本大地震之后，参加志愿者活动的人们需要的是对于家人间的牵绊、生死观、共生观的思考，同时意图在活动中学习到不同文化间的交流和近代历史。这显然和阪神大地震之后的志愿者活动的动机有了明显不同的层次。

最后，宫崎先生将话题的中心转向召开论坛的中国，就中国的志愿者活动的极限和对其的期待进行了阐述。在中国，政府力量较日本为大，志愿者活动均受到政府部门的监管，有组织的进行。从整体层面来看，这是一种效率较高的机制，但是从个人层面来看，每个人并非都是自愿参加，一部分人只是服从命令而已。因此，个人从志愿者活动中可以得到的满足感与成就感极为有限，因此每个人的力量并不能发挥到极致，这一点实在不容忽视。

但是，在中国上世纪八十年代以后出生的年轻人中，也就是被称为“八零后”的这一代人有着自由和独立的意识，他们积极参与到地区建设之中，承担自己的责任，履行自身的义务。因此，宫崎先生认为，在不久的将来，中国一定会诞生大量的自主型志愿者活动和公益事业。

在问答部分，rotary 米山奖学会中国学友会的代表以及北京外国语大学的学生纷纷举手发言。内容不仅涉及到了志愿者活动，在论坛结束后，还有多位学生与宫崎先生共同探讨人生。

自明年开始，中国论坛的形式有可能改为研究者交流活动。但是，在中日关系的未来走向尚明了的这一时期召开的第七届中国论坛必定会深深留在我们的记忆之中，久久难以忘怀。

ENGLISH  
EDITION

## The 7<sup>th</sup> China Forum

---

### “Volunteering · Volunteers”

#### ■ Introduction

SGRA hold China Forum every year at universities in China like the University of Beijing to present our activities for the interests by Japanese public.

For this 7<sup>th</sup> China Forum, we have invited Mr. Yukio Miyazaki of YMCA, Japan, Public Interest Incorporated Foundation and requested him to be our guest speaker to discuss volunteering based on his personal experience.

(He will be assisted by an interpreter between Japanese and Chinese)

## What is SGRA?

SGRA is short for Sekiguchi Global Research Association (pronounced as SEGRA). It is a Civil Society Organization (CSO) based in Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo, Japan and has a mission to reach out globally. It is under the Atsumi International Scholarship Foundation (AISF), which was formed on the behest of the late Takeo Atsumi (former President of Kajima Construction). SGRA's mission is to contribute to good global citizenship under the principle of harmony in diversity. The core of SGRA is formed from former AISF scholarship recipients of foreign students in the final stage of Ph.D. work in a Japanese university. SGRA is also engaged in lay person-oriented research in Japan studies, environmental/energy, global citizenship, peace/security, human resource development, IT/education, and historical issues. SGRA's membership is therefore open to all men and women of goodwill irrespective of nationality, social rank, or field of intellectual pursuit.

SGRA holds at least four forums per year in Japan and regularly publishes the SGRA report (generally in Japanese, although there are special issues published in other languages as well). SGRA also has regular international collaborations with like-minded institutions in the Philippines, the Republic of Korea, China, and Mongolia.



# “Volunteering · Volunteers”

Beijing Forum: May 22 (Thu.) 16:00-18:00

At Beijing Foreign Language School (Japan Cultural Center, Multi-Purpose Hall)

Sponsored by Atsumi International Foundation,

Sekiguchi Global Research Association (SGRA)

Supported by the Japan Foundation, Japan Cultural Center in Beijing

## “Volunteering · Volunteers”

62

Yukio Miyazaki (Honorary Director of the World Alliance of YMCAs of Japan)

### ■ Summary of his lecture

- 1) My formative experience in volunteer (A volunteer in the Vietnam War)
  - ① Applying by myself to escape from a sense of failure.
  - ② My “Need” (physical training) and their “Interests” (hog raising).
  - ③ No “life” without “reliance” (a village of minefield).
  - ④ A school of liberated farmers (self-reliance and self-help).
  - ⑤ Towards international societies as a professional volunteer
- 2) The first year of Volunteering – expansion of volunteer activities from experience in the Great Hanshin earthquake.
- 3) Social effects of volunteer activities (affection for the locality and people, sense of accomplishment, sense of fulfillment, and hope)
- 4) Volunteer activities after big disasters in stricken areas and victims in need of aid. Rescue operation after the Great East Japan earthquake as seen by the Chinese and the Sichuan earthquake as seen by the Japanese
- 5) Change of self-consciousness and values of the young after 3.11. Aids and sympathies from international societies, sense of unity, feeling of life or death, bonds of friendship.

## Panel Discussion

82

Closing remarks Junko Imanishi 86

Afterword Song Gang (Full-time lecturer of Japanese language, Beijing Foreign Language School) 87

Mr. Yukio Miyazaki—bio-data 89

# “Volunteering · Volunteers”

Yukio Miyazaki

Honorary Director of the World Alliance of YMCAs of Japan

This forum has been scheduled to be held in September last year, but, due to anti-Japan demonstrations in China, it was cancelled.

Today, I am glad to meet you here, as scheduled.

First of all, I like to think of a definition for the word ‘Volunteers’, which is today’s theme. It is said that the word ‘Volunteers’ comes from ‘Vo-ran-ta-ru’ (Latin), which means free will. According to the Japanese dictionary ‘Ko-Jien’, a volunteer is a soldier, priest or servant, who participates in social work on his own will with no financial gain.

The guide line issued by the Japanese government, through the Lifelong Study Council defines ‘volunteering as an activity to contribute to society by giving one’s art and time on his own free will. It is common knowledge that the basic idea of volunteering is self-motivation, no financial gain, public interest and skill development.’ (Report to Lifelong Study Council, July 29, 1992)

The Declaration of World Volunteering says ‘volunteering is determined and chosen by an individual, to heighten his potential capacity and quality of life, and improve his sense of solidarity with the human society. (General Meeting of International Council for Promotion of Volunteering, 1990)

The ‘Definition of Volunteer’ has a common philosophy and idea. However, ‘Volunteering’ has a variety of meanings depending on the culture, religion, people, politics and socio/economic background.

Today, I want to tell you about volunteering which played a very active role, especially after the Beijing Olympic Games, the Great Sichuan Earthquake in 2008, the Great Hanshin Earthquake in 1995 and the 2011 Tohoku earthquake and tsunami. Mass media both in China and Japan called these events the coming of “the first years of volunteering.”

## Assignment Vietnam

### My formative experience in volunteering is described as follows

I was working as a member of YMCA (Young Men’s Christian Association) in Tokyo, when I was dispatched to Saigon (present Ho Chi Minh City) in 1969 when the Viet-

nam War seemed about to end. I arrived at my post at Rai-chu village of TayNinh Province (a village of 5000 refugees), which was built by the US armed force as a strategic leverage.

My role was to support young men who returned from the battlefields who wanted to get rehabilitated. I also worked for the reconstruction and development of farm villages that were devastated by the war. These were reconstruction activities after the war.

## Hog Raising

I investigated first what self-supporting project or projects could generate cash income. My investigation showed that cultivation of tapioca and hog raising were quick and prompt money makers and can use the experience of the villagers.

I studied how to raise hogs by visiting villages in the suburbs of Saigon. I gathered such basic data as how to get cheap feed and how to produce it. I also studied hog disease prevention, improvement of the pigsty design, scheduling time of harvesting and shipment, and mode of transport to the market, etc. And I began to persuade village headmen and Vietnamese workers to develop more profitable hog raising projects.

It became clear after I visited the surrounding villages that on the village festival day hog raisers can sell at relatively high prices. The harvesting schedule specifies that we ship a pig when its live weight reached 100Kg. But when a pig did not reach 100Kg one week before the festival day, we checked for possible causes. We identified such causes as wrong feeds such as trunks of banana trees, stems of tapioca and head and bones of fish; and we changed the feeds accordingly. We studied how to produce 100Kg pigs within a week. We tried one idea, which we thought would solve our problem: we mixed the feed with mud and kept the pigs from moving around.

Unfortunately, our experiment failed.

Anyway, the hog raising team started a campaign called 'Go! Go! 100Kg Pig' hoping that we sell at a good price when hog price peaked.

## Establishing a cooperative

Next, we formed a cooperative which managed the pigsty and 'trikes' which were used for transporting the pigs. The idea of a cooperative seemed good. To start our cooperative we bought three stud pigs and three second-hand 'Xich-lo', using YMCA fund. Our cooperative would share among the members any profit from our operation. We completed a model pigsty and a 'Xich-lo' transporting company. Taking this opportunity, we established 'Tanomoshi-ko', a savings and loan association in the Vietnamese way in order to strengthen the villagers' loyalty to the village and to tighten fellowship among the villagers. The cooperative spirit took time to start and grow, but it became a 'signboard project' of the Vietnam YMCA and continued to prosper for eight years until the fall of Saigon.

## Needs of the villagers

Search for the needs of people and how to respond to these needs is a principle of volunteering. But, it is very difficult to identify the real needs of the people. And, when people demand, "we want it now!" it is not so easy to judge whether such needs are true or who the true beneficiaries are.

Let us look back at our hog raising project which we started as a self-supporting initiative for refugees.

The flow of the process was as follows: get relevant experience and knowledge of hog raising project, capital which may be in the form of foreign aid, self-supporting initiative of the villagers, sharing of profits, and improvement of living conditions of the villagers. Did our hog raising project really meet the needs of the villagers?

Was foreign aid properly used? The project prospered during the first several years. The number of stud hogs increased to about 100, and the operating income covered the operating expenses.

However, when the villagers thought they were not their fair share of the profit they started leaving the cooperative, and the project finally ceased operation three years after the end of the war. Only a small Terakoya (temple school) Elementary School remained after ten- years.

I can say that the biggest reason that made self-supporting and sustainable development of the villages difficult was their history of successive wars, followed by independence, then domination by a foreign power, and finally liberation. This is their history since the foundation of their country in the year 40 A.D.

I think the last Vietnam War, in modern history, which started from the bombing of North Vietnam in August, 1964 was another reason for the failure of the project. For the Vietnamese refugees the war left only destruction, death and hatred and won a transient peace. Under these circumstances it was very difficult to establish a country of freedom and independence. Especially, it was essential to have a humanitarian and economic assistance from the United Nations and other international organizations to rebuild after the Vietnam War. It was also very difficult for the people to become self-sufficient after being accustomed to receiving doleouts. I figured out such ideas from my own personal experience.

I visited Rai-chu Village again in 1992, 17 years after the end of the Vietnam War. When I revealed my identity, a young village headman led the village in saying “Yes, captain! I know you!” The model pigsty with the YMCA project sign-board became the house and property of the village headman. The Xich-lo transportation company became the property of an ex-soldier and the cooperative collapsed due to internal strife.

Only the Terakoya elementary school, where one of the refugees, a female teacher, has been teaching several children without financial aid, has remained.

I ended my travel visiting the root of my volunteering shocked by what I saw, as if I had been hit on the head.

## Volunteering and rescue operation during natural disasters

First of all, I want to compare volunteering activities in the Great Hanshin Earthquake in January, 1995, which is called “The First Year of Volunteering”, the Tohoku Earthquake and Tsunami in March 2011 and the Great Sichuan Earthquake in May 2008. DWG. 1

Dwg.1

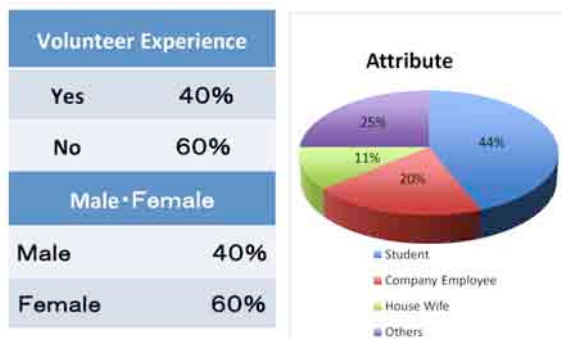
Disaster Relief and Volunteering Activities			
	Hanshin-Awaji	East Japan	Sichuan
Date	January 17, 1995	March 11, 2011	May 12, 2008
Magnitude	7.3	9.0	8.0
Dead	6, 434	16, 131	69, 000
Missing	3	3, 240	More than 18, 000
Collapsed Houses	249, 000	275, 258	More than 216, 000
Victims	(Unknown)	386, 739	About 4, 614, 000
Evacuee	(Unknown)	340, 000	About 1, 514, 000
Volunteering	1, 170, 000 3-months	738, 500 6-months	About 1, 300, 000 3-months

The magnitudes of the earthquakes were 7.3 MC (magnitude) in the Great Hanshin Earthquake, 9.0 in the Tohoku Earthquake and Tsunami, and 8.0 in the Great Sichuan Earthquake. The number of dead persons, destroyed houses, and missing persons were updated (in DWG.1) as of end May, 2013.

The numbers of casualties and volunteers were as follows:

- Missing persons in the Tohoku Earthquake and Tsunami was 3,240;
  - Volunteers were 738,500 for six months;
  - Great Hanshin Earthquake: 1,170,000 volunteers for three months
  - Great Sichuan Earthquake: 1,300,000 volunteers for three months,
- (The data for Sichuan Province are from an investigation report by a non-governmental NPO).

### 1. Hanshin-Awaji (Attitude Survey1 1995)



Dwg.2 Attitude Survey – 1

### 2. Hanshin-Awaji (Attitude Survey 2 1995)



Dwg.3 Attitude Survey – 2

## An attitude survey of volunteers at the Great Hanshin Earthquake

I conducted an attitude survey of the volunteers at the Great Hanshin Earthquake (Picture: 2/3, Example: 1/2) This survey was conducted at Kobe University, Kobe University of Commerce (present University of Hyogo), Junior College of Kansei Gakuin University, and YMCA, Japan. The results of my study were as follows:

- 40% of volunteers had no prior volunteering experience; and 60% had some volunteering experience;



- 40% were male and 60% were female;
- 44%, the biggest number of volunteers, were students; 20%, company employees who took leave from their jobs; and the balance consisted of housewives.

Their main activities were removal of debris, distribution of relief goods, door-to-door visits with victims, visits to refugee shelters.

### Motive for volunteering

When we look for a motive for volunteering, we found that most of the volunteers were recommended by their organizations, employers, or are friends of other volunteers.

They also volunteered from their strong will to help others who were in need, with no expectation of compensation of any kind. Then, what did volunteers expect? Most of the company employee-volunteers expected to have some experiences which were different from their usual daily works at their offices. The first job which they selected as serviceable for victims were the 3K jobs. *Kitanai* (dirty), *Kusai* (bad smelling) and *Kiken* (dangerous) They visited first the dirty, the bad smelling and dangerous disaster-stricken sites at Nishinomiya-city, Hyogo Prefecture. The reasons why these visits to such places were: first, they wanted to confirm how dangerous the situation was. For example, they may step on exposed nails or a broken roof may fall on their heads.

The second reason is they wanted to establish a close relationship and good rapport with the victims. The third reason was finding themselves. The young volunteers who could not yet clearly see the direction of their lives took this great opportunity to try how to live, sweating together with the victims and lodging with the other volunteers, and try to find for themselves how to live or how to choose their life's direction hereafter.

### Satisfaction from volunteering

I thought it was wonderful to know that the volunteers got satisfaction from their experience as volunteers. Then, they said their feeling of fulfillment, stayed with them for an average of three to four nights. According to the result of the post-evaluation of the volunteers a high 94% of the participants experienced satisfaction. The participants also felt a sense of solidarity with each other.

Furthermore, they said “they got more than they gave”. It is important that the victims were also highly appreciative of the volunteers' work.. It was very pleasing for the volunteers to hear the victims' frank and delighted voices saying “we were saved when we were really in difficulties”.

The young or students also felt that they have to settle down and stand on their own feet. Their volunteering experience inspired them to live and continue to help others in need. Those volunteers were praised when they rushed to the scene of disaster, but, on the other hand, they were also criticized. Questions were raised: volunteers, who were working for companies, were asked why they had to take leaves in order to go to help in the disaster sites? Student-volunteers were asked why they missed classes and went volunteering, instead. For me, it was think it was wonderful to know that these volunteers had the correct priorities preferring to save lives even with some inconvenience to themselves.

As you know, Japan is experiencing declining birth rates and the market economies have changed. The collapse of the bubble economy brought about changes in the

Dwg.4 Work Camp



Japanese society. The attitudes and outlook of the young also changed. They think that they can be happy if they have money and material things. However, this way of thinking is wrong. They have to find a better way of life, with happiness in the solidarity of families and in bonding with friends or communities and among families. This is important. In other words, the young must find these virtues by themselves through their wholesome experiences as in volunteering. In the Kingdom of Bhutan, they have this acronym GNH which stands for Gross National Happiness. I sincerely hope that, Japan would temper its energetic pursuit of high GNP (Gross National Product) with a generous dose of GNH for the greater happiness of her people.

### Evaluation of the Work Camps

An evaluation of the volunteers in the Great Hanshin Earthquake follows:

- ① Interaction with the residents of the disaster-stricken areas 76% of the male and 80% of female residents were satisfied with the work of the volunteers;
- ② I, 'man waiting for instructions' or 'self-centeredness, have changed to sympathy for others and rediscovering oneself;
- ③ It is necessary to explain in simple terms the meaning or mission of volunteering;
- ④ Explanations of volunteer works were insufficient;
- ⑤ Evaluation of volunteering differed depending on the personality, capability and experience of the volunteer- leader;
- ⑥ The participants could share the feeling of the importance of charitable works and the gratitude of the beneficiaries;
- ⑦ The sincere commiseration with the victims of disasters was a strong motivation for participation; and
- ⑧ Encouraging and establishing a system of mutual support can lead to development and advancement of societies.

Studies of other volunteer organizations, such as the Japan National Council of Social Welfare, supporting offices for university students volunteering, portal sites of supporting and restoration projects and the network of NPOs showed similar experiences.

–Look at the Picture 4 at Working Camps (Example 3)–.

## Meaning and mission of volunteering

What is the meaning and purpose of volunteering? I find insufficient the present answer and explanation by some groups that volunteering is service for people. I am not being negativistic. I agree with the observation of the volunteer-participants said that their volunteering was a good experience, giving them insights on how to cope with the challenges of daily life. But, on the other hand, it became clear to me that the explanation of the meaning and purpose of volunteering, were not sufficiently made clear to the early volunteers.

## Basic knowledge and fundamentals of volunteering

Volunteers, who were told “please go and help the victims”, actually were not told how to go about doing this. For example, at the Tohoku Earthquake and the tsunami, mud flows took away everything, including houses and their contents. An example of the inadequate instructions to volunteers is the case of a volunteer who found a piece of wooden stick in the mud. He was about to throw it away, thinking that it was just rubbish. But, one person, who has been living in that house, said, “Wait a moment, please. This stick is a rolling pin for noodle-making which my grandfather had used to knead noodles every day. Even in a small piece of rubbish, there is a memory of the life of people.

In another case, the media wrote about a heap of rubble of Sanriku which had been preserved by the family for a few decades and the media called them rubbish! Of course, for the victims, these are not rubbish, but precious heirlooms that have been with the families for a long time.

According to traditional beliefs the souls of mothers or children who died from tsunami were in the bodies that were buried in the mud. Volunteers, who went to the sites without knowing this background, threw away all the mud and rubbish and thought they did a good job. However, the victims felt sad about this lack of understanding and compassion.

People in the Tohoku area have learned to endure such careless disregard for their past histories. When I actually met them, they seldom say that “we are sorry that the volunteers, who came to help us, threw away our memorable and important photographs, together with the rubbish.” However, whenever I visit the disaster area, I hear such comments along these lines.

## Volunteer Spirit, Leadership, Organization and Mechanism, Rules for Volunteering

Roles of facilitators, who lead and coordinate activities at the volunteer sites, are important. We usually call them directors or leaders. Personality and capability of facilitators are factors that influence people to volunteer. Post-evaluation of volunteering projects showed that volunteers were inspired by decisive directors/ facilitators. I think it is wonderful that participants appreciate each other's importance in providing volunteer services and share the expressions of gratitude from the beneficiaries. Sympathy and compassion for the victims are emotions which compel the volunteers to do something.

I asked nearly 100 Chinese, who had been doing volunteering for the last two years

their understanding of volunteering? Many of them replied that commiseration is a principle of Confucianism. “It is a duty to help people who are in trouble. We have acquired such Chinese culture.” The youth in Japan also have a similar understanding.

We are now in the post-disaster reconstruction phase and we have to establish a system would result in cooperation between the victims and the volunteers. Commiseration and compassion are not enough. It is essential to establish a mechanism which can sustain such volunteering. It is indispensable to secure sources of revenue to sustain the volunteering activities. The revenue sources can include fund-raising campaigns. It is also necessary to enact a law to establish organizations that would promote volunteering activities and projects.

There are two volunteer laws in China which were enacted in 2005 and 2007. It is yet to be determined whether or not these laws are good. But, it is clear that understanding of volunteerism is necessary.

In Japan, a new public service corporate system emerged in December 2008. Specified and Approved Nonprofit Corporation and taxation systems which complement NPO corporations were reformed. The Civil Law which has existed for more than 100 years in Japan was amended partly for the purpose of enabling people to serve their country as volunteers.

## The First Year of Volunteering in Japan

### Does “Civil Society” change through the enactment of the laws of NPO?

The 1990s are called “the lost decade” in Japan. In this decade, the Great Hanshin Earthquake and the ‘sarin-gas attack’ by the ‘Aum’ in the Tokyo Subway occurred. Anti-terrorism measures and large-scale preparations against disasters were rapidly put in place during this decade.

Rescue operations, in the Great Hanshin Earthquake, started immediately by the quick action of the police and fire brigades and by the Self Defense Forces. At the same time, other rescue operations by neighborhood self-governing organizations which were organized voluntarily and NPO organized by companies, universities and the Junior Chamber International Japan (Jaycees) also participated in the rescue effort. Such activities spread rapidly among the citizens and the number of participants increased day by day. It drew public attention. The participants were strongly committed and undertook the rescue operations without pay. The people wanted to show that they could rise from the disaster without help from the government.

Individuals and groups who participated in such volunteering activities spontaneously organized networks for their mutual protection. Generally, non-profit organizations seldom co-operate with each other. Many people are individualistic and do not care what other people do because they are not paid. But, that is wrong. If they have the same goal or are going in the same direction, they should co-operate with each other. Such sense of cooperation among the citizens was evident during the Great Hanshin Earthquake.

As transport facilities and roads became accessible. The number of volunteers increased. Groups of youth rushed by motorbikes and goodwill helpers rushed from

the Kinki area. Both just wanted to help as much as they could. The media saw in this event “the willingness of ordinary people to help their fellowmen in times of difficulties – and called this event “the coming of the first year of volunteering in modern Japan”. Japanese history has recorded volunteering in Japan since the Edo period, 400 years ago. At that time, according to the record, all the farmers and townspeople participated in rural planning rendering labor services as building a bridge or embankment protection works. Three years after the Great Hanshin Earthquake, the Law Concerning the Promotion of Specific Non-Profit Organization Activities (the NPO Law) was enacted. It aimed for a higher level of “civil society” which encourages the people to participate in volunteering. It legalized the NPO concept and established a framework for such organizations. This is the NPO Law.

## The First Year of Civil Society in China

There is a NPO called CODE in Kobe which I visited.

CODE stands for Citizens for Overseas Disaster Emergency, and is a non-governmental organization which assists overseas citizens’ organizations in their recovery operation immediately after the occurrence of disasters.

CODE dispatched an investigation team to China when the Great Sichuan Earthquake occurred on May 12, 2008. Picture 5 (Example 4) shows the activities of this team which were reported by a reliable Japanese NPO in 2012.

CODE collected data from its local partner in China and conducted on-site inspections until the next earthquake occurred, this time, on April 20, 2013. CODE disclosed the information on their activities, which they got on their HP with the assistance of a local NPO in Sichuan. Unfortunately, collecting news materials by private organizations, especially foreign media are not allowed at this time (May 2013). A few days ago, NHK televised, for 15 minutes, for the first time, the news of the restoration work of Sichuan. I think this was the first report by a Japanese media on the recovery in Sichuan after the earthquake.

Dwg.5 Code Report





## An explosive increase in the number of NPOs and volunteers

According to the report of CODE, volunteers from all over China rushed to the disaster-stricken areas after hearing the news from their cellular phones. In the first year after the news broke out, three to five million people, or ten million including logistical support for the volunteers rushed to the site. Ten million volunteers participated at the Great Sichuan Earthquake in 2008. Most of them were called “the Post 80s (Ba LinHou)” which means the volunteers born in the 1980s.

40% of volunteers were from the Government, the Communist Youth Party and commercial establishments and 60% were private individuals who learned of the disaster through cellular phones. According to other sources 60% of the people, including logistical support, wanted to do volunteering work in Sichuan.

For your reference, here are comparative numbers of volunteers from the Chinese Young Volunteers Association, who did volunteering in some important events in China:

- 500,000 volunteers are said to have participated in the Sichuan operation;
- 600,000 volunteers from the whole of China at the Beijing Olympics in August 2008;
- About 1,000,000 volunteers in activities of China’s 60th National Day in 2009; and
- It is said that 7,000 people applied against 700 vacancies for the Expo 2010 in Shanghai, after the Beijing Olympics.

It is said that the people’s concern with and participation in volunteer activities are not limited to disaster relief and increased gradually year by year and took root in the daily life of the citizens. I think such volunteer activities send a strong message on “civil society” in China where freedom of association is not fully permitted.

In the article titled “The Coming of the First Year of Civil Society in China”, I reported about volunteer activities in Japan at the Peking University conference on Volunteering Week in 2007, one year before the Beijing Olympics. I recall that I discussed with students late into the night after the conference. Comparing with the old days in China, I felt that I was living in a completely different age.

## Private Restoration Project initiated by the Government

Talk has greatly increased about volunteer participation of nongovernment organizations in national events or big disasters such as the Great Sichuan Earthquake and the Beijing Olympic Games, both in 2008, and flood damages caused by heavy rains. People are saying that 2008 when these great events took place marked “The First Year of Civil Society” in China.

*What was the actual situation of the restoration project after the Great Sichuan Earthquake?*

People said a lot of volunteers from nongovernment organizations participated in the recovery assistance. But, those restoration projects were actually mainly “man-to-man support (对口支援)” initiated by the central government. Rich provinces or cities in the coastal areas contributed 1% of the GDP, according to the past records, directed to 18 disaster-stricken cities. Needless to say, rebuilding of infrastructures or big restoration works had to be done by specialized enterprises or general contractors. But, for emergency rescue operations or restoration works just after the disasters, local groups

or organizations were formed by the Young Volunteers Association, Volunteer Association, university students or workers. NGOs (“Social Development Association” (社会工作協会)), charitable organizations and foundations also provided support activities. Furthermore, network organizations, such as “rescue service centers” (救助服務センター) and NGO “preparation centers for disasters” (備災センター) were also formed as nongovernment bodies. Such movements spread and each organization worked efficiently.

But, when the reconstruction phase started, the chances of networking among supporting groups, exchange of information and chances of interaction among groups decreased and eventually disappeared. According to the field survey by the Student Service Facility of Kobe University, many volunteer groups and nongovernment organizations were dissolved. It is said that the number of nongovernment organizations which support reconstruction and development are very few.

### Unbalance, Gap and Feeling of Unfairness in Reconstruction and Development

The reasons for the unbalance and gap in development and the feeling of unfairness in reconstruction are reported to be as follows:

1) The reconstruction projects were led by the government; and volunteer groups were not allowed to participate. As an example: at the “Reconstruction project of New Beichuan (北川) Province” which was a “man-to-man support” (对口支援) of Shandong Province, there were 197 projects which cost 6.8 billion Chinese Yuan (about 88.4 billion Japanese Yen). The projects consisted of project preparation, construction of infrastructures such as roads, bridges and reconstruction of public facilities such as civil works, and reconstruction of houses and hotels. (“Industrial Report” (工作報告書) by the Chinese Government).

These projects were undertaken mainly by government-contracted private companies and priorities were the reconstruction of hospitals, schools and government office buildings. Reconstruction works in the villages were left behind.

2) Main reasons of gaps in the disaster-stricken areas arose from lack of equity in selecting local governments to be granted national assistance. Provinces and cities which were entitled to support from the projects competed with each other in to be included among the project beneficiaries. The allocation of aid also differed among the provinces and cities. Provinces and cities with revenues were given more aid than those with less revenue. Allocations of aid to individual victims were also different among provinces. In Guangdong Province, for example, people received as much as 40 times the share of people residing in Heilongjiang. Gaps or unfairness also prevailed.

3) Villages which were late in communicating information or were late in promulgating provincial laws got smaller share of project, or none at all. It is said that traditions, customs or customary practices of the villages blocked reconstruction of these villages. Such criticism that the private sectors had no chance of getting government projects because the government monopolized the project may be irrelevant. If “nongovernmental bodies” which have social responsibilities want to do volunteer works, it would be essential that basic conditions and circumstances should be in order. For volunteer participation, it is important that projects for reconstruction assistance and

sustainable development should reflect the needs of the people. This participation may have been based on past laws, mechanisms, functions, systems and human resources and would need to be revised or amended to address current needs.

### Interaction foreign non-governmental organizations

During the reconstruction period after the Great Sichuan Earthquake in 2008, there were exchanges of knowledge about disaster prevention between China and foreign non-governmental organizations. The power of the media to quickly inform the public was reconsidered, particularly in cases of disasters and emergencies. The media was recognized as the best way to attract public attention and mobilize rescue and recovery assistance. I like to introduce some examples:

① It was good opportunity for the people to restudy an old wisdom of fighting and coping with natural disaster and implementing reconstruction plans, using traditional technologies. For example, they started together with Kanazawa University in relearning traditional technologies about wooden buildings which were built more than 100 years ago in 綿陽市安県、綿竹市ソソ道鎮、光明村.

② They started afforestation projects for the protection of the environment and nature as promoted by the national project called “The Program for Conversion of Cropland to Forest” (退耕還林), after the heavy floods of the Yangtze River in 1998.

③ They organized working camps, sweating it out with the youth; and international working camps were held to promote mutual understanding.

For example, YMCA of China have sponsored, for several years since the Sichuan disaster, soccer competitions and youth forums participated by boys from several countries, promoting not only sportsmanship and camaraderie but also exchange of culture and art.

④ We, (students of the Kobe University, who assisted in the University student supporting office ) are convinced that we were able to communicate our heart-felt support to the disaster victims, even if we could not verbally.

It is not an example of reconstruction assistance, but NPO “OISCA (The Organization for Industrial, Spiritual and Cultural Advancement-International) have been engaged in afforestation activities in Inner Mongolia for desertification prevention, including planting cash, a Chinese medicinal herb. OISCA is continuing development activities, together with NGOs, and will dispatch 50 volunteers this summer from Nagoya to China for other afforestation projects.

### Social Media and Volunteering Power

The role and function of twitters and email are becoming bigger.

At the same time, the interests of many people and sectors, inside and outside China, on aspects such as reliability of information provided by the media, and counter-measures against government control of such information are increasing. The participation of volunteers during disasters is required more and more as civil society advances.

The Chinese government has instituted controls of entry of volunteers without permission or did not have technical skills, for example, into disaster-stricken areas at the Sichuan Earthquake (April 20, 2013).

I understand the special situations in China when disaster strikes and there is a sudden influx of volunteers, causing something like a traffic jam which the government cannot control. But I cannot disregard the volunteers' spontaneous reaction to help when they see with their own eyes the horrible scenes of disaster.

A lot of volunteers have learned the importance of living harmoniously with others after they participated in rescue operations and stood close to the victims of disasters. Their experience changed for the better their outlook on life.

### Human resources of “Post-80s (Ba-Ling-Hou)” generation

At the Sichuan Earthquake in 2008, 3-5million of people rushed to the disaster sites. It is said that the number of volunteers who joined logistical supports outside the stricken areas was 10million. Most of them were born after the 1980s, so-called “Post-80s”. There are about 200million of “Post-80s” generation in China now who are potential human resources for the future civil society. They have had poor public reputation before, being characterized as “they do not know hardship or they are selfish”. But, after the “Post-80” generation worked hard at the stricken areas of the Sichuan Earthquake, it is said that such reputation changed considerably. How to make use of this enlightened human resource for the development of local communities will be the subject of the following sections of this report.

### Medical relief activities after the Sichuan Disaster

#### –SGRA Partnership with China and Japan, 2008–

Let us look into the medical activities in Sichuan Province objectively. Please see Chart 6 of medical activities in 2008 (Example 6).

When the Sichuan Great Earthquake occurred in 2008, SGRA immediately appealed for volunteering to 40 Chinese students in Tokyo. The volunteers started translating “Guidance to Disaster Nursing” and medical materials which were originally printed in Japanese. They, together with Chinese medical students on scholarship in Sasagawa, completed the translation into Chinese the “Guidance to Disaster Nursing” very quickly.

Dwg.6 Medical services for disaster victims in Sichuan Province



International rescue teams from Japan, America and Europe rushed to China. A Japanese International Emergency Hospital service team and a Chinese disaster hospital team, both of which are based in Japan participate in international rescue operations. These two organizations have started the Japan-China joint disaster medical services (for the first time after New China), under the Director 石康 of Huaxi (華西) Hospital. It will go down as a “first” in history.

Emergency relief activities this time were rated high “getting good results in the medical field of both countries, embodying the spirit of friendship between Japan and China.”

Some of leaders of the Communist Party in China, starting from Prime Minister Wen Jiabao, suggested the formation of a joint Japanese-Chinese medical team to undertake medical research in Chinese medical activities starting with a special joint study of the present status of medical nursing in China. I know there are various problems between Japan and China, but many people are hoping to start, through the disaster this time, joint studies for disaster medical relief.

Please watch DVD, Volunteering at the Hanshin-Awaji, the Tohoku earthquake and tsunami and the Sichuan earthquake have been edited to run for five minutes each. These are joint projects by YMCA of Japan and China. You can understand how they participated in volunteering at the Great East Japan Disaster.

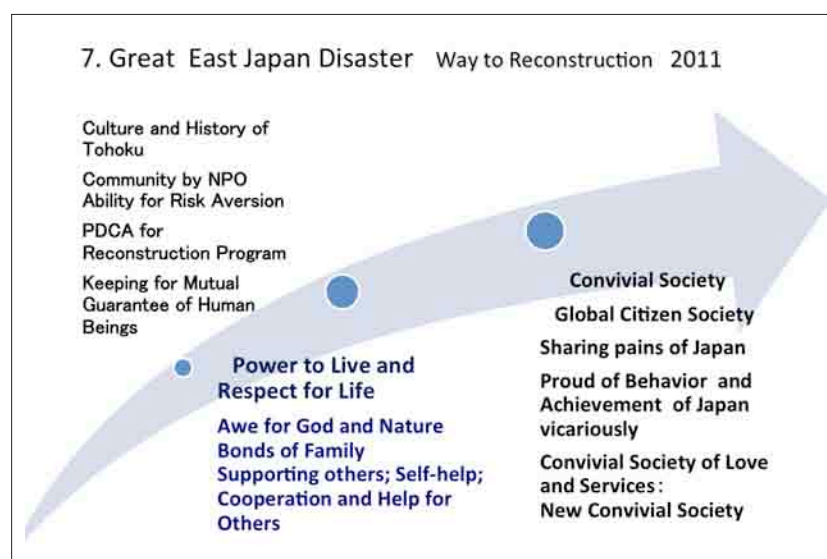
–DVD slide “Record of YMCA of Japan, 3-11” on the screen (5”30”)–

## Reconstruction Period after the Great East Japan Disaster (see Comment) (Chart 7)

### Toward construction of a new community

Agricultural population decreased to 30% of total population from 80% in the 1960s. The terms “Residents’ or Neighborhood Association” by “fettors”, “ruling system” or “communism” changed to “Community” by “relationship” and “friendship.” “Culture” also changed by the reconstruction from the destruction caused by tsunami.

Dwg.7 Passage to reconstruction





(Example)

- The people improved their ability to escape to safety from disasters such as tsunami through improved roads to refugee shelters; moved the homes of the aged to higher locations; and making use of lessons from past disasters, such as the Meiji Sanriku Earthquake of June 15, 1896, which magnitude was 8.2.
- The people are trying to promote self-supporting public works for by joint planning with administration and citizens.
- They also tried to improve the functions of the municipal assembly through the cooperation of citizens and the NPOs. They tried to shift part of administration works to public companies and mobilize citizens/NPO partners.

But they could not make any progress in their attempt at reforms because the leading administrators are members of the communities who have vested interests to maintain the status quo.

### **Be Alive · Hold in Awe and Respect God and Nature**

I hear key-words, “reconstruction”, “self-help”, “help each other”, and “help others” quite often.

These words do not show relations between supporters and beneficiaries. I can say those words are guideposts for co-workers who participate in reconstruction works having the same goal. I like to add a few words which were uttered at work-camps or in reconstruction meetings in Miyako-City or Ishinomaki-City where I joined or participated.

- Ryoeji Nozoe (Nobel-Prize), Chemistry, Winner, Tetsuo Yamaori, Philosopher, and Jakuchō Setouchi (Woman of Religion) expressed the importance of awe and respect for God (Buddha) and Nature in disaster sites.
- People discovered the importance of bonds in families or with neighbors who support each other when faced with the trials of “Life” and strongly believe that “A neighbor nearby is better than a relative living far away”.
- People in the Tohoku Area, who faced nature every day, have a special understanding of Nature. They believe “we cannot bear a grudge against the sea because we are getting blessings from the sea” even though they lost family, house and property by Tsunami.
- “It is painful and difficult for anybody to accept sadness which has no solution. But I believe we can find blessings if Japan is united in overcoming such hardships. So, I bring courage and smile throughout Japan” (An oath by Abe, Captain of the baseball team of Ishinomaki Technical High School at the Opening Ceremony of the Japanese High School Baseball Invitational Tournament on March 21, 2013).
- “I like to do something for somebody” expressed from bottom of one’s heart” is a statement of a strong sense of responsibility.
- Sustained support for self-reliance, for standing close to each other, and caring for each other have just begun.
- How do we face people who lost their homes and properties from panic caused by a tsunami?

How do we handle such situation as when you tell a child who lost mother due to a tsunami, “you are always looked after by your mother”, and the child just stares at you in silence. It is very difficult to console them.

## The youth of the world study Symbiotic and Global Citizens Societies

The young people who watched the NHK special program, “How to live after the Big Disaster”, which was aired in Tokyo, Beijing and New York on April 15, 2011, discussed the most disastrous earthquake on record. The discussions included the following:

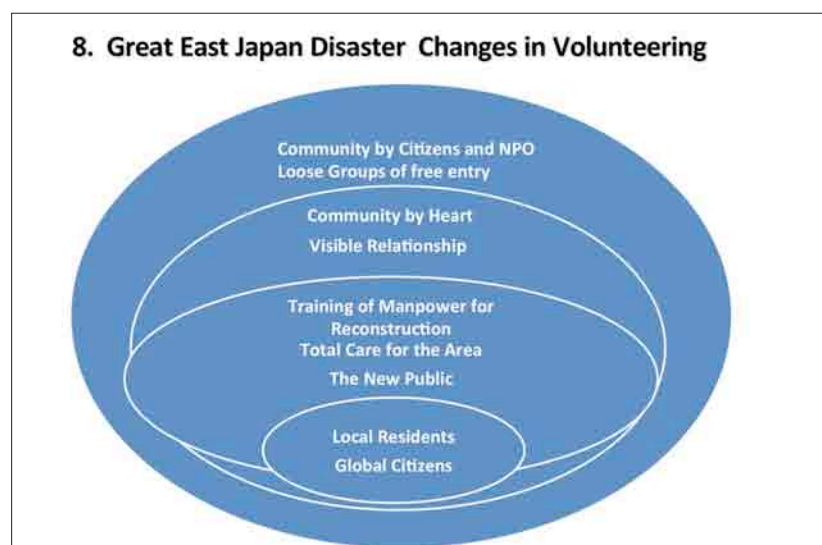
- The tsunami and the nuclear accident aroused and deepened ‘unity’ and ‘empathy’;
- Pride of the Japanese achievement as even among the non-Japanese discussants, as if these achievements were their own.
- Michael J. Sandel (Harvard University/School of Communitarianism) commented he saw in the outpouring of recovery assistance in the aftermath of the Tohoku tsunami disaster an indication of communitarianism of a global civil society of the new generations.

## Changes in volunteering

I summarized the changes of volunteering after the Big Earthquake in Tohoku in Dwg. 8 (Example 8). My supplementary explanations are as follows:

- People changed their outlook in life, both as members of their communities and as individuals, when they volunteered in the rescue and recovery operations after the earthquake;
- They began to put volunteering activities in their concept of “harmony between work and life” enlarging their understanding of “work - life - balance”;
- “Public works” should not be administrative works only. But, public works in Japan initiated by the government last a long time so that the people believe that public works should be initiated by the government, with citizen participation in the implementation;
- Since 1980, works for improvement and development with citizen participation have become popular and the practice has been accepted by the people. The government is increasingly getting the consent and cooperation of the citizens before implementing public works. For example, in solving the problems of disposal of disaster wastes, storing radioactive contaminants or spent nuclear fuel which are reported in many places, the cooperation of the citizens is important in the selection of disposal sites;

Dwg.8 Changes in volunteering



- In Kanji (Chinese characters), the concept of “public” is equivalent to the concept of “private”. Volunteering is based on individual self-motivation. Public (公) is derived from (丌) (open) and (厶) (private). So, “public” in Japanese means opening to “private”.
- A talk between Norio Akasaka (folklorist) and Kiyokazu Wasida (philosopher) explained that recent volunteering activities provided “opportunity to bring out the ability of the citizens to spontaneously and voluntarily fill the gaps left by formal groups.
- The YMCA volunteer center in Miyako City has a couple who regularly come from Tokyo as volunteers. They found “community in mind and hometown in heart” through volunteer activities and hold simulated family experiences which built mutual confidence from toiling together.
- Student volunteers from Tokyo told us that their direct contact with other people, strengthen their self confidence and sense of security and bonding with their fellow men.
- The media reported that volunteer groups participated as partners in preparing medium- and long-term plans for the recovery and reconstruction of local governments which suffered massive destruction”.
- As a result of the disasters programs for the “development of human resources to prevent disasters and support recovery and reconstruction” were included in the curriculum of some universities. Examples are the Disaster Prevention Meister System at the Shizuoka University, Disaster Management Course at the Tohoku Fukushi University and the Reconstruction Internship Course at Ishinomaki Senshu University.
- Also, programs of “Regional Package Medical Care”, consisting of physical and mental health care, welfare and housing services have been established on a sustainable basis. An example is the “Child Care Support Service Center”, a primary care project of “Support for New Life” by the Tokyo Rotary Club.

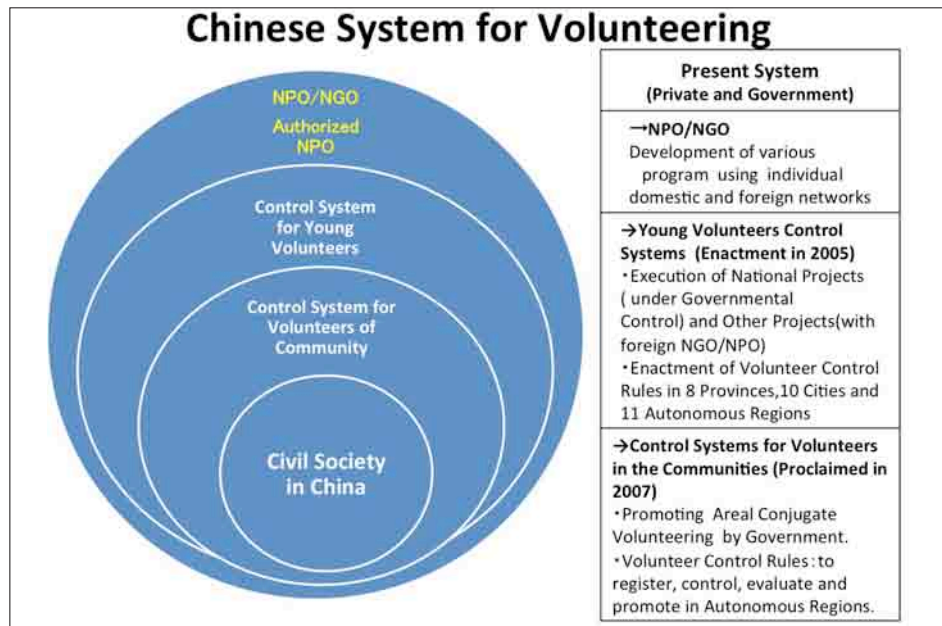
### Values of the youth changed and were adopted

Lastly, I like to tell you that the values not only of volunteers, but of the youth in Japan, also changed, as follows:

- ① Some people said they have deepened communication with others, especially strengthening family bonds and happiness from supporting each other; somebody called these feelings “love and hope”.
- ② We can see a change of consciousness of the youth now, starting to realize that a happy life can be attained by volunteering to help those who may be in need, rather than the materialistic and selfish “goods/money first principle”. Their experiences in volunteering have made them appreciate more the meaning of life, symbiosis and death.
- ③ This is a quotation of Michael J. Sandel, Professor of Harvard University (mentioned earlier), in a NHK broadcast of the Tohoku disaster from the viewpoint of cross-cultured communication covering Beijing, New York and Tokyo. Professor Sandel summarized the opinions of the youth or students who watched the broadcast, thus: “Experience of cross-cultural communication exceeded the negative legacy of the history and borders. Empathy which exceeded sympathy called a sense of unity with others to mind. Those feelings inspired creation of a peaceful world which has no war or violence”.

## Volunteering in China, its System and Problems

Dwg.9 System of volunteering



Let us look into the volunteer activities in China. (Dwg.9)

As you know, the law governing youth volunteering in China was enacted in 2005. As an official system, it promoted various programs utilizing networks - domestic or foreign. Community volunteer organizations were established in 11 Autonomous Regions, 10 cities, and 8 provinces in 2007. Basic frameworks for volunteer activities were formulated.

We can see some problems of volunteer activities in China. (Dwg. 10/11)

Dwg.10 Problems to be solved in volunteering



Dwg.11 Example of volunteering activities in China

Case: "Young volunteers association in Residential Communities ( 社区 )" is not a volunteer group.

a) In 2012, there was a dead person in a flooded house in the central part of Beijing. Volunteers and the general public, that rushed to help were rejected to participate by volunteers in the uniform of "Young Volunteers in the Community" ( 社区青年志愿队 ).

b) Community and Volunteering Activities: How will the "Young Volunteers in the Community" develop after the reforms of "Civil Society"? Training and actual volunteering began using as model the volunteering activities of the YMCA in Shanghai and Hong Kong.

Social Science Professor LIU Jie, Waseda University (社会学科総合学院) pointed out in his paper “Civil Society in China is Groping” at a SGRA Forum in Karuisawa, that there is a difference in the definition and understanding of the term “Civil Society”. Peking University (Civil Society Study Center (公民社会研究センター)) insisted that “Civil society should be independent from nation and government. China is already a civil society.” Tsinghua University (NGO Institute of Public Management School (公共管理学院)), on the other hand opined “freedom of association is not guaranteed in China”.

But there is a common point of agreement. The term “civil society” comes from the term “unit society (单位社会)”. Examples of existing responsible that can be cited as a form of civil society are existing NGOs and NPOs. The “Post-80s (Ba-Ling-hou)” enjoy freedom and independence, and exercise their rights and fulfill their responsibilities independently as members of civil society.

I see with hope the eventual development of civil society in China.

I expect such an organization which would be formed legally and designed for humanitarian objectives as non-government organizations would increase in number and influence. It is pointed out that, at present, the problems of organizing a civil society, that need to be solved are: a definitive understanding of civil society as an organic service unit of the community; expansion of the role of civil societies in the community and in the country as a whole; and promotion of the formation of civil societies in the rural areas.

I support the World Volunteer Declaration in 1990. It declared “All the people can enjoy freedom regardless of race, culture, religion, age, gender and of physical, social and economic situation. Rights of the people to their time, ability and energy freely to others and to their local communities without financial consideration, should be granted to all the people”. And I hope these words would be realized soon.

I visited here last September when anti-Japan protests were spreading and I told Mrs. Imanishi that “let’s have a forum because of time”. She replied “let’s come because of time”. Though we could not have a forum then, I could had a chance to get acquainted and had friendly chats with students who had studied in Japan as SGRA scholars. I met volunteers from the YMCA Peking and 100 students from Yoneyama Scholarship program. I asked them their views on volunteering?” (Dwg.12)

Here are samples of the answers I received:

- “I do not know what I would do in volunteering”.
- “Does volunteering mean offering cheap labor?”
- Some said that the “spirit of volunteering is part of the teachings of Confucius, which we already have in our culture”.
- There was an opinion that “we cannot do volunteering as we have no money even though we wanted to volunteer”.
- When I asked a group elderly of retired persons who have plenty of time to participate in volunteering, many of them replied “we are looking for ways by which we can still be useful to society, our children and the youth of the next generation”. As the result of my interviews, I realized that “voluntary works” with no financial consideration”, but done for the general “improvement of the welfare” of the community are not well understood.



As to the problem of definition and understanding of the term “volunteer or volunteering”, the experts still not in agreement. Additional questions that are being studied are:

- Who will train volunteers?
- Is it possible to improve the environment?
- Can networks of volunteers be established without intervention by the government?
- Is it possible to establish a non-official authorization system for volunteers in China?

Some people say that if we want to promote volunteering in China, it will be necessary to establish social framework and systems and to organize legally with financial backup.

I apologize to have rushed, but I hope you could understand my message about “volunteering” which is today’s theme.

Thank you very much for your attention. (Applause)

#### Dwg.12 100 volunteers in China

- The volunteer spirit which is part of the teachings of Confucianism is included in the formal education system in China. It is embedded in the Chinese culture.
- The volunteers understood that their volunteering is free although they are reimbursed for actual expenses>
- They could not participate in volunteering work if they could not afford to work for free, that is, without pay, even though they are willing to volunteer.
  - \* Nominal per capita GDP in 2012 in Japan was US\$5,963; in China, it was \$8,227 in May 2013
- The aged and retired people could afford to do volunteering. The aged persons, especially, have keen interest in volunteering and they are increasing in number.
- The need of volunteers for the late-stage elderly persons are increasing every year. The actual situation and number of “elder-to-elder nursing” homes (老老介護) also became clear.
- What is volunteering?
- Is volunteering cheap labor?
- What do volunteers perform?
  - \* Activities by the Community Welfare Center of Shanghai and the Hong Kong YMCA are examples.
- Voluntary activities are without monetary compensation?
- Is there a difference between volunteers and the professionals?
 

Are there differences in the educational background, social and economic status of volunteers?
- How to undertake training programs for volunteers?
- How to select trainers for volunteering? What are the required qualifications of volunteers?
- It is necessary to have a chain of command for volunteers.
- Appropriate environment for volunteering activities should be prepared and networks of volunteering should be expanded.
- Enactment of laws which encourage, protect and promote volunteering activities would be necessary.

The role, training and administration of volunteer work as part of the formal education, as well as guidelines for actual volunteer work and reward system need to be reviewed and improved.

# Miyazaki Report—Q&A



**FACILITATOR** If you have any question, please raise your hand.

We have here with us students from the Yoneyama Foundation; sorry for this late information, I would appreciate getting some comments from them.

**Ho** The lecture of Mr. Miyazaki is a good and timely reference for me. I am to participate in 中国国際園林技術大会 as a volunteer, which will start from May 18 in Beijing. I applied for this assignment in February. From this lecture I got a better understanding of the history, progress and concept of volunteering in China.

**F** Thank you very much, Mr. Ho. We have many students here today. How about your opinion?

(WHO IS THIS? F or HO? I think you cannot experience volunteering easily. As you are so busy with your student life, you hardly have time for social life and experience many things.

I, myself, became a teacher of the Japanese language in 2008, but, once, I was bewildered or in doubt as to what a teacher is. One day, 3 years after I became a teacher, a student of mine told me, “I liked to study after I have met you”.

His remark reminded me that teaching is a worthwhile job. I have been thinking how my performance or skill as a teacher could be improved. But, I realized on that day that true pleasure from the job as a teacher is attained by letting students be self-reliant or let them study on their own initiative, not on a compulsory basis.

I think such awareness of mine is similar to that of Mr. Miyazaki. When you like to do something, a feeling that you like to do it earnestly will be the best motivation.

I am sorry that I have talked much.

Mr. Wang, I like to ask your opinion. Mr. Wang won the first prize in the national speaking contest last year.

WANG We had a big earthquake in Sichuan this year. There were a lot of Chinese students who wanted to do volunteering in Sichuan. But, some of them were told that they would be hindrance. We are good in health now and like to do a lot of volunteering works.

I like to ask Mr. Miyazaki about important points that helpful, not to be hindrance to the people working in the disaster sites.

MIYAZAKI That is a very important point. Actually, at the recent Sichuan earthquake, many volunteers rushed to damage roads and, as a result, government rescue operations or delivery of relief supplies could not be done smoothly. It is important to know what tasks are required in the order of their priority in disaster sites. So, it is essential to establish networks by, for example, cellular phones etc. which can quickly transmit information. It is very important that appropriate response is done immediately. The cases of the Hanshin-Awaji and the East Japan Earthquake were the same.

Once the army or police or fire brigade enters the sites or governmental rescue operation begins, the requirement at the sites would change, based on the reality on the ground. In case of disasters, it will be most important for volunteers to immediately assess and understand the needs of the people and determine whether the volunteers can respond to the needs or not. If the volunteers think they cannot respond, they must immediately inform those in-charges of the operation, or welfare councils, or volunteer committee of the disaster area. Volunteers must establish such networks before volunteer works begin.

At the Hanshin-Awaji Disaster, such troubles actually happened. The first trouble was regarding coffins for the dead. There were no coffins to bring the dead to crematories, after digging out dead bodies in the destroyed houses. Some groups or individuals who got such information brought coffins hurriedly to the sites. But dead bodies had already been brought to the crematories. The groups or individuals asked what is required next. The answer was incense sticks to remove the stink from decaying bodies. There were no incense sticks. Needs change according to the actual situation.

If we have properly planned our volunteer activities could anticipate most of the immediate needs of rescue and recovery operations. The long-term needs for restoration and reconstruction must be confirmed from actual site investigation and should consider the real needs of the victims and their desire to be self-reliant. We determine such needs by discussion with the person or persons in charge in the local government who have information, starting from the National Council of Social Welfare (councils of all the prefectures in Japan, based on the Social Welfare Law), neighborhood associations, shops, companies, schools, medical institutions, NPOs and citizen groups. It will be a nuisance for the people if we misunderstand what are absolutely necessary for them. Failures by the volunteers seriously consider this aspect of volunteering would cause people would say that “Your small kindness can be a big bother to other people.”

F There is a similar saying in China. I think it happens often that other people cannot be

satisfied even if you are so kind. It is necessary to know exactly what is really required before you start volunteering.

Q1 Have you ever met with difficulties which you thought you could not solve during your long experience of volunteering? And, if so, how did you solve it?

MIYAZAKI It is a difficult question. I have a lot of such difficulties. I have decided that in such occasions the other person wanted me to do my mission. It is the same case with ‘the need’ I talked about. As I have such nature, I was told that I would fail [to carry out my mission] if I force my ideas on others. I think it is very difficult.

From my various experiences, I came to know that ① I defend my life by myself; ② I have to know what I can do; ③ I think from the standpoint of the weak; ④ clarification of roles; ⑤ planning and execution; and ⑥ system for working together.

In case of universities, there will be a volunteer circle. You listen to their opinions. What you hear is their opinions that will become their motivation to participate in volunteering. You start from confirming with each of you what you can really do: what you said you can do alone, and what you said you will do together. I call such way of thinking as a decision-making process for participation.

You get together, discuss and judge how to jointly respond to difficulties or problems together with people who have the same way of thinking.

When you participate in volunteering, you will find that the most difficult problem is “emotional care”.

It takes a long time. Eighteen years have passed since the Hanshin-Awaji Disaster and volunteering is still continuing up to the present. It is “emotional care” that the victims want most. They want us to listen to their distress. They suddenly experience flashbacks.. If somebody experienced being buried under a fallen roof, he would be distressed by flashback of that experience. He must have a qualified person whom he can consult. Such consultant must have special studies, knowledge and experiences about PSDT (Posttraumatic stress disorder) or with experience in such special care after a disaster. But, this is not easy. From my experience, all I can do is to listen to what the victims like to talk about standing close to each other, and just push his back so that he would solve his difficulty by himself. Do not say “Good luck!”

I was in difficulties when I realized that I could not do “emotional care”, so I asked other volunteers who are specialists in PSDT. I organized my network for the purpose. Do not think that you can do everything by yourself. When you think you can do everything, there may be some mistakes. What I did was get some background knowledge and information about the subject. I organized a network of resource and other interested persons and set up a system by which emotional care can be provided to people needing such care.

I think specialty and a sense of responsibility and love are necessary for volunteering.

F Thank you very much. Is there anybody who has some questions?

Q2 I never have experience in volunteering. If I go to a disaster-stricken area and watch terrible scenes of destruction and bodies of the dead, I feel uneasiness or nightmare

when asleep. How do I overcome such uneasiness so that I can do volunteering?

MIYAZAKI I also felt a similar uneasiness. Professor Ryouji NOYORI who won the Nobel Prize in Chemistry visited the site of the East Japan Earthquake. He saw horrible scenes of death and destruction. When he was interviewed by the media, he said “We cannot be a scientist if we do not believe in power of Nature. It is a defeat of science and we cannot explain the vagaries of Nature but offer only the lame excuse that such disasters are “beyond expectations”. Technologies are developed by human beings and applied without thorough consideration of the risks and benefits inherent in such technologies.” Then he also, “I am very sorry to live now”.

Jakucho SETOUCHI also visited the site. At the joint service for the dead by the Japan Buddhist Society, she spoke in front of children who lost their mothers and saw their brothers swallowed up by the tsunami. One middle school girl student asked her one question. “Is there any difference between the dead by war and the dead by tsunami?” SETOUCHI was surprised at her serious question. Attending journalists and men of religion at the place also could not find answers to the question.

Then, what to do? I visit the site once every two months. During each visit, I asked the people how they were that day. In a recent, I got an answer from an old lady. “I am alone since my grandchild died. He was swallowed up by the tsunami. I do not know how to live without my grandchild.”

One volunteer spoke to a high school student who lost his mother being swallowed up by the tsunami in front of him. He kept silence. People who saw their parent being swallowed up the tsunami in front of them cannot talk about it. When you know there are such people, you will realize what you can do and what you must not do.

Today, we do not have any works like raking mud or disposing rubbish. Let us weed the front field. I think this will be an answer to our search something to do together. In volunteering during disasters, it will be rare that you would work on what you can do or on what you have to do.

Volunteering is not limited to disasters. It is essential to know “what those in-charge want us to do or “how they want us to speak to. It will be the first step that keep in your mind. Everything starts from such point.

F It is about time to end our Q and A. Today’s report by Mr. Miyazaki made me think of various things. We know how to satisfy ourselves physically. But we do not know how we satisfy ourselves mentally or how to satisfy our soul. The best answer will be “do volunteering!” Please give Mr. Miyazaki a big applause again. (Applause)

Lastly, Mrs. Junko Imanishi, please give us the closing remarks.



## Closing remarks

IMANISHI Thank you very much for coming to SGRA Forum No. 7 today. It was unfortunate that we could not open this forum last September because of some serious situation. But, I am very happy now because we could get together today.

Mr. Miyazaki mentioned about reports today. It is Report No. 52 in which young scholars discussed about situation of civil societies in Asian countries. You can download Japanese version by searching for “SGRA” or “Sekiguchi Global Research Association”. You can access to “SGRA” from “Atsumi Zaidan” too. Actually, we are now translating their reports into Chinese and you will be able to access to Chinese version soon. Please wait.

By the way, I think NPO (Nonprofit Organization) and NGO (Non-Governmental Organization), both as organized volunteers, are now in boom in Japan. Many people think strongly that they like to do something for society. Way of thinking of the young in Europe and America are also changing like Japan. They like to contribute to their societies rather than just doing business. They like their money (capital or funds) to be rotated rather than they just contribute. I think the young in China are also interested. As you can access to various information on the net, I hope, taking advantage of the forum this time, you tackle various problems watching movement of the world. You can start small volunteering any time and will study how to organize volunteering or how to get funds. It is a process to organize volunteering.

It may be small from viewpoint of the government but such a small organization would change societies if numbers of such small organization become many.

I like to express my thanks to all of you who participated in our forum today, Mr. Yosikawa, Director of Japan Foundation, students’ association in China of the Yoneyama Foundation, students volunteers who helped reception desk and simultaneous interpreting.

Lastly, I thank you, Mr. Song Gang, for organizing today’s forum. (Applause)

The 7th China Forum Report

# “Volunteering · Volunteers”

SONG GANG

(Full-time lecturer of Japanese language, Beijing Foreign Language School) is responsible for this paper.

The No.7th China Forum was held at the Beijing Foreign Language School, Japan Cultural Center, 3F on May22, 2013 at last.

The reason why I said “at last” comes from my strong emotion that my dream has finally come true. This China Forum had been scheduled to be held in Beijing last September, but it was postponed. I think all of you know the reason for this postponement. As this forum was held this May, in haste, we could not have enough time for preparation. We printed and put up posters one week before the forum. We completed the resume three days ago, prepared banners two days ago and prepared questionnaires in the morning of the day of the forum.. All of us at SGRA were very busy. And we were able to conduct the forum smoothly.

In such meanings, I can say I could have most worthwhile and satisfying feelings this time.

Having given my personal impressions, I now return to the subject.

We requested Mr. Yukio Miyazaki, Honorary Director of the World Alliance of YMCAs of Japan as a lecturer in this forum. The topic of his lecture was “Volunteering · Volunteers”.

This topic was changed several times, but the report was unchanged, as mentioned in the poster. When we say YMCA, we recall a song “YOUNG MAN (Y.M.C.A)” of Teruhiko Saigo (singer), but Mr. Miyazaki is Honorary Director of the World Alliance of Young Men’s Christian Association. He is youthful enough and can be favorably compared with Mr. Saigo (singer).

Mr. Miyazaki narrated his experience as a civilian volunteer in Vietnam during the Vietnam War., particularly, his working with village folks to improve practices in chicken and hog raising, as well as in marketing the produce. This part of his lecture drew the rapt attention of his audience who seemed to have been riveted to their seats. When he mentioned about recent volunteering in disaster relief activities, we felt it is very familiar to us. We saluted the number of participants for volunteering in the Great Hanshin Earthquake, the Great Sichuan Earthquake and the East Japan Disaster. He also quoted SGRA activities during the East Japan Disaster, as an example, wherein we participated in the translation of the manuals for mental health care from Japanese into Chinese after the Sichuan Earthquake. I feel more proudly today than at that time of my actual participation in such work.

The spirits of volunteering have spread in both China and Japan after the Hanshin-Awaji and the Sichuan Earthquake and the number of young volunteer participants increased.

Mr. Miyazaki paid tribute to the wholesome changes in the consciousness of the young volunteers.

The volunteers in the Hanshin-Awaji expected their new experiences, close relationships and discovering themselves. But, in the East Japan Disaster, it is said that the volunteers aspired for their high-grade spiritual needs, such as the bonds of families, views on life and death or views on temporarily living together, exchanges of different cultures and studying modern histories.

Lastly, Mr. Miyazaki focused on China and spoke about its limits on volunteering and new development. In China where political power is strong, volunteering is controlled by competent authorities and organized systematically. As a whole, there is a merit in its efficiencies, but, on the other hand, each “volunteer” participated because he was asked to do so, not from his own free will. In other words, they did not enjoy satisfaction or sense of accomplishment. Understandably, they did not exert their best effort in their “volunteer” work.

“Post-80’s” volunteers, however, participated in volunteering works on their own free will, independent from coercive authority. They carried out their activities as members of civil societies, exercising their rights and fulfilling their responsibilities. So, Mr. Miyazaki viewed optimistically that the number of the young participants in volunteering and charitable undertakings will increase.

At the “Q and A” session, we got comments and questions from student’s association in China of the Yoneyama Foundation and Beijing Foreign Language School. Mr. Miyazaki became an advisor for them not only for volunteering, but also on general self-improvement, even after the forum.

China Forum may change its direction to exchanging opinions of scholars next year.

The 7th China Forum was held in uncertain diplomatic atmosphere between China and Japan. I think this forum will be impressive and unforgettable.



## ABOUT THE AUTHOR

### ■ 宮崎幸雄 宮崎幸雄 Yukio Miyazaki

現職：（公財）日本 YMCA 同盟名誉主事、学校法人アジア学院評議員、学校法人恵泉学園委員、（公財）公益法人協会評議員、（社）青少年海外協力隊を育てる会顧問、（社）CISV 理事、在日本救世軍本営監事

略歴：1933 年大阪に生まれる。関西大学英文科専攻後米国に留学、青少年教育を学び日本 YMCA に就職。1969 年、世界 YMCA 難民救済事業ベトナム担当ディレクターとしてサイゴンに 7 年間に在り、ベトナム難民の定住と難民青少年の教育に当たる。8 年間、スイス・ジュネーブにある世界 YMCA 同盟本部の難民事業の統括責任者として国連難民弁務官事務所（UNHCR）との連絡担当、米国民間団体との交渉業務を担当する。1985 年帰国後日本 YMCA 同盟常務理事・総主事 1998 年 3 月定年退職。1998 年よりロータリー米山記念奨学会事務局長 / 専務理事、アジア青少年団体協議会会長、国際協力機構（JICA）青年海外協力隊・技術専門委員 / 青年海外協力隊を育てる会副会長・顧問として現在に至る。

現任：（公益財団法人）日本 YMCA 同盟名誉主事、学校法人亚洲学院評議員、学校法人恵泉学園委員、（公益財団法人）公益法人協会評議員、（社団法人）青少年海外協力隊培育会顧問、（社団法人）CISV 理事、在日本救世軍監事

简历：1933 年生于大阪。关西大学英文专业毕业后前往美国留学。学习青少年教育后就职于日本 YMCA。1969 年作为世界 YMCA 难民救济事业越南人在西贡居住长达七年，期间致力于越南难民的定居与难民青少年教育事业。其后前赴瑞士日内瓦世界 YMCA 同盟本部，担任难民事业总负责人，八年时间里负责与联合国难民署办公室（UNHCR）的联络事物，并同美国民间团体进行交流。1985 年回国后成为日本 YMCA 同盟常務理事、总主事。1998 年 3 月退休。1998 年至今担任 rotary 米山纪念奖学金会事务局长及专务董事、亚洲青少年团体协议会会长、国际合作组织（JICA）青年海外合作队技术专门委员、青年还未合作队培育会副会长及顾问。

**PRESENT POSITION:** Honorary Director of the World Alliance of YMCAs of Japan (Public Interest Foundation, Incorporated);, Councilor of Asian Rural Institute (a legally incorporated educational institution), Committee member of Keisen Gakuen, Councilor of Association of Public Interest Foundation Incorporated, Advisor for Japan Overseas Cooperation Volunteers, Director of CISV (formerly Children's International Summer Villages), Inspector of the Salvation Army of Japan.

**BRIEF PERSONAL HISTORY:** Born in Osaka in 1933; studied in the United States of America after graduation from Kansai University, with a degree in English literature; worked at YMCA, Japan; worked in Saigon, Vietnam for 7 years as Director for Relief and Works Agency for Vietnam Refugees (mainly for fixed dwellings and education of refugees); worked for 8 years at YMCA HQ in Geneva as a person in charge for refugees corresponding to UNHCR (United Nations Refugee Agency); returned to Japan in 1985 and became Managing Director of YMCA, Japan; retired in 1998 and worked at Rotary Yoneyama Memorial Foundation as Secretary-General; Chairman of Asian Young People Association; Committee member (technical) of JOCV (Japan Overseas Cooperation Volunteers) of JICA (Japan International Cooperation Agency) Vice Chairman / Adviser of supporting organization for JOCV,

## SGRA レポート バックナンバーのご案内

---

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」  
今西淳子、高 偉俊、F.マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L.ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」  
平川 均、F.マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」  
木村建一、D.パート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT教育革命：ITは教育をどう変えるか」  
白井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、李 來賛、  
斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」  
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」  
S.ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」  
建石隆太郎、B.ブレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F.マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」  
+宮澤喜一元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション  
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B.ヴィリエガス  
日本語版2003. 1. 31 発行、韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」  
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」  
高橋 甫、貫戸朋子 2003.8.30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」  
朴 榮濬 2003.12.4 発行



- SGRA レポート 20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：C O P 3の目標は実現可能か」  
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート 21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート 22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート 23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」  
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004.2.25 発行
- SGRA レポート 24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート 25 第14回フォーラム講演録 「国境を越える E-Learning」  
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F.マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート 26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005.1.24 発行
- SGRA レポート 27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」  
竹田いさみ、R.エルドリッヂ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート 28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか-地球市民の義務教育-」  
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート 29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート 30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」  
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート 31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」  
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト  
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート 32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」  
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、角田英一  
2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート 33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート 34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」  
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤヤ、ミラ・ゾンターク、セリム・ユジェル・ギュレチ  
2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート 35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」  
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート 36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」  
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート 37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」  
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート 38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」  
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート 39 第26回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」  
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行

- SGRA レポート 40 第27回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」  
多紀保彦、加納光樹、プラチャヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート 41 第28回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」  
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート 42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15年—無理解と失敗から相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート 43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート 44 第29回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」  
関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ 2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート 45 第30回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～日本、中国、シンガポール～」  
佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート 46 第31回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」  
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート 47 第32回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」  
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート 48 第3回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く—アジアの留学生と生活を共にした協会の50年」 工藤正司 日本語版、中国語版2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート 49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」  
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート 50 第8回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」  
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート 51 第35回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」  
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート 52 第36回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21世紀の課題」  
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チィ、劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート 53 第4回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～TABLE FOR TWO～」 近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート 54 第37回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：東アジアのエリート高校教育の現状と課題」 玄田有史 シム チュン キャット 金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
- SGRA レポート 55 第38回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル～」 木村建一、高 偉俊、Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 剣宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート 56 第5回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」  
第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」 高見邦雄、汪 敏、張 昌玉  
第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」 高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート 57 第39回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」  
井上まどか、ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、  
島蘭進、陳 継東 2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート 58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」 平川 均 2011. 2. 15 発行

- SGRA レポート 59 第10回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300年前の東アジア地域交流」朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート 60 第40回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム チャン キャット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート 61 第41回 SGRA フォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」柳田耕一「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉 2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート 64 第43回フォーラム講演録 in 蓼科「東アジア軍事同盟の課題と展望」朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44回フォーラム講演録 in 蓼科「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュン・キャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭 2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel：03-3943-7612 Email：sgra.office@aisf.or.jp）へご連絡ください。

SGRAレポート No. 0068

---

第7回SGRAチャイナ・フォーラム（北京フォーラム）

ボランティア・志願者論

Volunteer・志願者論

“Volunteering・Volunteers”

編集・発行 （公財）渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8

Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512

SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール: [sgra-office@aisf.or.jp](mailto:sgra-office@aisf.or.jp)

発行日 2014年5月15日

発行責任者 今西淳子

印刷 （株）平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。

